
魔法少女リリカルなのはR e w r i t e

由真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはRewrite

【Nコード】

N6751Z

【作者名】

由真

【あらすじ】

もはや敵なしと云われるほどの実力者、氷上京谷は高町なのとはとある違法研究施設に突撃をかけようとしていた。そこで出会ったのは一人の生きる意味を知らずに人間兵器にされかけた少年。

京谷はその少年を助け、自分の仲間に取り込むことにしたのだった。
。。。

それから二年後、時空管理局局長堂本奏のもとナイトオブブラウズ

のメンバーの一人となった一騎は壮大な戦いに巻き込まれていく!?

その剣は誰を守るために、その意志は何を変えるために。

魔法少女リリカルなのは Rewrite、始まります。

お知らせ

この作品はEエブリスタ（現在非公開）で掲載していた私同名小説の前の時間軸の話になります。また、そのサイトで掲載していた内容も後々掲載するのでご了承ください。

この作品はリリカルなのはシリーズの二次創作です。

また、一部原作とは異なる設定がありますが、あくまでこの話のことであり、原作とは一切関係ありません。

R e w r i t e 0 : 若き剣士（前書き）

一騎「始まったな・・・」

京谷「ああ。つか許可とって10か月くらいほっというて今更再始動つてのもなかなかいい加減だぞ」

作者「面目ない・・・。だって仕事もいそがしいし」

一騎「まあ、いいか。んじゃ、始まるぞ」

Rewrite 0：若き剣士

「味方の損害率、70%突破!!」

「第五防衛ライン崩壊します!!」

「第104部隊から援軍要請が...!!」

「ぐう、何故だ!!なぜ我が国がこうも簡単に圧されてしまっているのだ!？」

総指揮官であろう男は非常に焦った顔をしていた。今この世界では戦争が起きている。この国と近隣の小さな国。

無論圧倒的に、今やられている側の国の方が圧倒的な軍事力を持っている。なのに何故非常に不利な状況にいるのか。

それは...小国側に最強の戦士達が味方にいたからだ。

「スターダスト・フレア
星屑の咆哮ッ!!」

そう叫んだ俺の仲間の一人、星川さららの放った砲撃がフィールドを張っているにも関わらず、再び複数の機械魔神をいとも簡単に撃ち抜く。

当たり前だ、魔法とビームじゃ組成が違う。混乱するのも無理はない。

「メテオ・インパクト
隕石の衝撃ッ!!」

別の方向ではさららの双子の姉、星川きららが同じく機械魔神をぶっ壊していた。

二人ともまだ10歳なのになかなか出来るやつだ。

さて、俺も動かないと敵にロックされてんな。

前方に六機．．．いずれも中距離戦闘用か。向こうさんは、俺を見つけるや否やマシンガンを撃ちながら突撃してくる。

が、焦っているのか狙いが甘いし統率もとれていない。

ならば、隊長機を先に落としておくか。

俺は自分の刀の一本、白龍を抜いて敵の動きを注視する。そして、隊長機が俺の射程に入った。

「ドラゴン．．．スレイヴッ！」

俺は刀に淡い黄色の光を纏わせ、薙ぎ払う。刹那、刀から三日月状の剣撃が放たれ隊長機を引き裂き撃墜する。

隊長機が落とされ、残りの機体の統率がさらに悪くなる。それを読み取った俺は一気に距離を詰め、すり抜け様に二機の腹を引き裂く。そして爆発、さらに誘爆して二機を落とす。

そして残りの一機は苦し紛れにマシンガンを乱射してきた。が、そんな甘い照準で俺が当たるわけではない。

反転した俺はそのまま、コックピットに刀を突き刺す。

誘爆状態に入ってからすぐに抜いて、上空へ避難した。その直後、それが爆発した。

俺が一息突いた後、シオンから通信が入る。

「シオンさんか」

『どうやら最終兵器が出たようです。反応の情報を転送します』

そして程無くそのデータが送られてくる。ふむ、オールレンジ攻撃とマルチロック攻撃が出来る高機動の機体か。成る程、すこしは骨がありそうだ。

「じゃあシオンさん、要塞破壊の攻撃お願いしていいですか」

『わかりました。では、五分で片付けてくださいね』

まったく、シオンもしれつとすごい要求をしやがる。何て言っている間に敵は俺目掛けて突っ込み、俺をビームソードで斬りつけようとする。

俺はそれを刀で裁き、難なく切り刻んだ。

すると、遙か後方から高火力のビーム砲が飛んでくる。

虚を突かれたがなんとか回避し、飛んできた方角を見た。

そこには、蒼い翼を讃えた神々しい機械魔神がいた。

それは他とは圧倒的に違う速さで迫ってくる。

「ちっ」

俺は、刀を構え直し敵の攻撃に構える。敵は二刀流のビームソードを抜き薙ぎ払うように突撃してくる。

その脇をなんとかすり抜けて、反転する。

射撃は得意じゃねえが仕方がねえ。

俺は、刀を握ってない手に魔力を込めて無言詠唱する。

そして振り返った刹那に誘導射撃魔法”アルテミス”を放った。

魔方阵の周囲に幾多の光の珠が浮かび、すぐに敵目掛けて光が駆ける。

そしてすぐに、突きの構えをして突貫。

アルテミスが直撃した直後に、白龍が敵を捉える。確実に落としたと思ったが違った。

爆発の煙が晴れたとき、敵はしっかりとシールド防御をしていた。そしてシールドを左に振り払い、レールガンに至近距離で発射する。が、遅い。俺は振り飛ばされる力を利用して後ろに回り込んでいた。そして、左の翼を斬り落とし爆発。敵はバランスを崩した。

あと2分か・・・

残り時間を確認して、敵の正面から斬り結ぶことを選び、旋回しながら迫る。相手も律儀にそれに合わせてきた。

俺はあらかじめ左手に光波シールドを精製しておいた。なぜか？直ぐに解るさ。

そして真っ正面から斬り結ぶ。俺の刀は相手のシールドを捉え、相手のビームソードは俺のシールドを捉えた。

さすが最強の機械魔神。出力が違うな。だけど・・・終わりだ。

俺は左手に一瞬だけ力を込め、ビームソードを押し退ける。そして直ぐ様もうひとつの刀、”黒龍”を逆手で抜きそのまま右腕を斬り落とした。

あとは簡単、黒龍を手で回して正しく持ち返し刃で右脚、白龍で左脚、そしてクロスで両腕を斬り落とした。ついでなので、アルテミスで羽と頭を頂く。

バランスを失った相手は為す術なく地上へ落下していった。

そして、一息ついて辺りを見回すときららとさららがほぼ制圧していた。ある意味なのはたちよりタチが悪いな・・・。

「シオンさん、終わりました」

『解りました。では、全員を下げてください』

「了解。全員に告ぐ！！直ぐに撤退だ！！」

俺は、前線に向かっていている連中に下がるように告げて、自身も安全圏へ下がった。

そして、シオンが自身のインテリジェントデバイス”アイシクルエツジ”を構え、魔法の詠唱を始める。

「極地に集いし白銀の光．．．消せぬ輝きを纏い、闇を払う剣となれ．．．ダイヤモンドブリザードッ！！」

唱えた瞬間、射線軸に七つの魔方陣が浮かぶ。そして翳された手から、青白い砲撃が放たれた。

青白い光が魔方陣を通過する度に速く、強力になる。最後の魔法陣を通過した時、放たれた時の大きさより何倍も大きい光となって、要塞へ向かって走っていった。

フリーダム
「自由”、反応ロスト！！」

「敵、全軍撤退していきます！！」

「なに！？なにをするつもりだ．．．」

総指揮官はまさかの事態に焦りの顔しか浮かべられない。そして、何気なく前線に顔を向けるとこちらへ飛んでくる一条の光を発見した。

「な．．．！！」

「う．．．うわああ！！」

「に、逃げろ！！」

本能的に死を予感した兵士たちは我先にと逃げ出し始める。しかし、その頃には到達し要塞を巨大な冰山へと変貌させていた。

俺とシオン、きらら&さららがレジスタンスたちのキャン
プに降り立つと、戦線に出ていた人達たちが歓喜の声で迎えてくれ
た。

「ありがとうございます!!」

「すげえな兄ちゃんら!!」

「助かりました・・・!!」

各々から感謝の言葉を述べられる。中には感極まって泣き出す人も
いた。きらら&さららの幼女コンビはおっさんたちに肩車
されたり手荒く頭を撫でられたりされ、喜ぶ一方で笑顔を浮かべて
る。

「いえ、俺達は少しでも力添えしただけです」

俺はというと、レジスタンスの代表に謙遜の言葉を返していた。
そりゃ当たり前だろう、社交辞令だ。まあ・・・俺がそういう人間
だからだろうからな。

ふむ、シオンが疑いの目を向けていることはスルーしよう。

「一騎、そろそろ帰還せねば・・・」

「ん、そうか・・・さらら、きらら!!」

「はいっ」

「うんっ」

シオンに催促されて、俺はきらら&さららと呼ぶ。四人が
近くに集まったのを確認してシオンが転送ゲートを開いた。

魔力の突風が俺達を包み、俺達が元々いた世界に引きずり込むよう

にまわりつく。

その異様な光景に、みんなは呆然としていたが、やがて一人が駆け寄りながら叫んだ。

「教えてください！！あなたたちは何者なんですか！？」

まあ気持ちは分かるよ。だから、教えた。

「俺達は・・・」ナイトオブラウンス「円卓の騎士」さ」

R e w r i t e 0 : 若き剣士（後書き）

京谷「すくねえなオイ。やる気あんのか」

一騎「いやプロローグだし」

京谷「書いた当時作品知らなくていきなり原作崩壊してたな」

一騎「それはまあ・・・しかたない。こんなでも読んでくれた人は出演依頼すごかったしな」

京谷「全員は？」

一騎「さすがに無理らしい」

京谷「一人で20人くらいよこしてたしな。っと、そろそろ」

一騎「こんな小説を読んでくれた方には大感謝を。それだはまた次回」

R e w r i t e 1 : k n i g h t o f r o u n d

そうして俺達は管理局のある世界の自分たちの部隊、ナイトオブブラウنزの隊舎に帰還した。

思ったよりも早く済んで助かったところだ。

「おかえり一騎、シオン、きらら、さらら」

「おかえりです」

「はい、ただいま戻りました」

「貴方もだ、京谷さん」

「ただいま、京谷さん、フィオネ」

「ただいまです」

管理局局長直轄特務部隊、”ナイトオブブラウنز”隊長、氷上京谷^{ひかみきょうや}さんとユニゾンデバイスであるフィオネに出迎えられ、四者四様の挨拶を返す。

京谷さんもバリアジャケットモードのままである辺り、また訓練やらなんやらしてたのだろう。フィオネも大きくなったままだ。

さて、この京谷さん^{ザ・クリエイト}宝具生成、異能再現という反則的レアスキルを所持している。そして己の魔力もEXというとてもない量を保有しているため管理局で倒せるやつは居ないんじゃないかというくらい強い。本気を出せば本人曰く、”星の五つや六つ簡単に消せる”らしい。

誰かこいつを倒せるってやつは前へ出るんだ。

こつちのオレンジ頭の人はフィオネ。京谷さんのユニゾンデバイスなんだが、単騎でなのはと張り合っていたことがあった。あのリンカーコアがあつてこの融合騎ありといった感じだな。

「まだみんなは帰ってねえよ。ゆっくりロビーで休んでな。時間まではまだあるからさ」

「……はいっ」「」

京谷さんの指示を聞いた俺達はとりあえず隊舎のロビーに向かう。隊舎は京谷さんの趣味なのか、妙にアットホームな感じがする。

「では私は支度してきますね」

と、シオンはそういい残して自室に帰った。
じゃあ俺はなんか飲むもの飲むかな。

「なんか飲むか、さららにきらら」

「あたしジンジャーエール」

「私は……イチゴラテで……」

準備の早いやつだ、と俺はちっこい姉妹を見ながら思う。とりあえず、頼まれた飲み物を買ってやった。飲み物を受け取った二人は嬉しそうに飲んでいた。その辺りは普通の少女だなと俺は思う。そんじょそこらの小学校ならモテるのだろうが、まあ……戦ってるときの表情は見せたくないな。特にきらら。

「あ、一騎さんなんか失礼なこと考えたでしょ」

「気のせいさ」

ちっ、さすがきらら。近接戦闘を生業とするやつは違うな。

まあそんなことはさておき、俺はアーモンドチョコ珈琲を買って一口啜る。うむ、いつもながら上手い。ささやかなチョコの旨味がコーヒーとマッチして最高の味を引き出している。

「一騎さんっていつもそのコーヒー飲んですよね？」

ふと目を俺の手に向けたさららが質問してくる。

「ああ、はじめて飲んだときうまくてな」

「そうなんですか・・・」

「なんだかんだで適当なんだね、一騎さん」

「うっせ」

そんな他愛のない会話をしながら、談笑する。
すると、二階から誰かが降りてくるのが捉えられた。

「ありや、一騎くんたち帰ってたんだけ」

「ああ、ただいま命」

「おかえり きららとさららもね」

「ただいまっ」

「ただいまです」

降りてきたのは同じくナイツオブブラウنزのメンバー、つきしろみこと月城命だ。

槍型のデバイス”オベリスク”を駆る近代ベルカ式で、おっしん陸戦A A +
の桜塵おっしんの騎士である。槍を扱わせれば一級品で、”竜騎士”の異名
で呼ばれる事もあった。

「今日のはあんまし怪我ないね？一騎くんも成長したか」

そう言ってくすくす笑う命。一応命の方がひとつ年上だが何故か年
上な雰囲気を持ち合わせていない。スタイルは大人なのだが・・・。

「そっぴやさ、午後から何があるかは知ってるよね？」

「ああ、アースラに隊長と俺と優希、希来が派遣されるアレだろ？」

「いたいなが．．．」

「そうですね。アースラにはフェイトさんやなのはさんが居ますし、なによりクロノさんとかも．．．」

さらにも同じことを考えたようで、はてと首をかしげたがそれは空中で霧散した。気づけば時間だったようで、京谷さんが羽田希来と俺の妹、桜井優希さくらいゆうきを連れてやってきたからだ。

羽田希来は俺の親友で、ナイツオブラウンズメンバーでもある。自律兵装も組み込まれた機械式の剣”アロндаイト”を駆る近代ベルカ式の陸戦A Aの魔導師だ。俺が知ってる近代ベルカ式の魔導師の中ではかなり射撃が上手い。

変わって優希は俺と同じ数少ない双剣の使い手で、”ルナティック”と”サンライズ”を扱う。ちなみにデバイスなのはルナティックの方だ。近接型にも関わらずミッドチルタ式で、空戦A Aの魔導師だ。なぜミッドチルタ式なのかは、使用する魔法の大半が、射撃や治癒防御魔法で占めているからだ。つまりところ優希は俗に言う魔法戦士なのだ。まあ．．．俺が言えた義理じゃないのだが。

「まだ休憩中だったか？」

と、京谷さん。

「いえ、行くならもう飲み干しますよ」

そう言って、俺はコーヒーを飲み干す。きららとさららはすでに飲み干していた。

「ん、準備できたか？」

「はい。きららとさららはもう少し休憩な。んで終わったらデスクワーク」

「「はいっ」」

俺が指示を飛ばすと二人は元気よく駆けていった。10歳らしく元気なものである。

「そいじゃ行くぞ、一騎、優希、希来」

「「「はいっ」」」

先頭に行く京谷さんに付いていく俺達。そして程無く転送ゲートについた。

「目え閉じてろよ」

そういつて京谷さんは慣れた手つきで詠唱とゲート起動を行い、一瞬にして俺たちは異空間へ飛ばされた。

そして気がつくとあら不思議。俺達は管理局巡航艦”アースラ”のブリッジにいた。

「あら、もう来たんだなナイツオブブラウズの諸君」

一番最初に声をかけてきたのは、アースラ艦長であるクロノ・ハラオウンだった。隣には言わずと知れたアースオブエース、高町なのはと希代のエースストライカー、フェイト・T・ハラオウンもいた。

「はじめまして、高町なのは二等空尉です」

「はじめまして、フェイト・T・ハラオウン執務官です・・・」

なのはは元気よく、フェイトは真面目に挨拶してきた。もちろんこちらも挨拶をする。

「管理局局長直轄特務部隊ナイツオブラウンス隊長、氷上京谷二等空佐だ。で、こっちが」

「京谷のユニゾンデバイス、フィオネです」

「桜井一騎^{さくらいかずき}二等空尉です」

「桜井優希曹長です」

「羽田希来軍曹です」

「ああ、よろしく四人とも」

挨拶にクロノさんが労いの言葉をかけた。そして、京谷さんが口を開く。

「久しぶり。元気そうで何よりだな、クロノ？」

「ああ、闇の書事件以来か。空佐もご健勝で・・・」

「つと待った。別に階級で呼ばなくていいだろ」

「だけど・・・」

「俺がいつつうんだからいい。むしろ命令」

「は、はあ・・・」

妙なところでわがままを使う人である。

「じゃあ京谷、再会を喜ぶのはこれほどにして・・・」

「ああ、そうだな。じゃあお前ら、ブリーフィングルームに行くぞ」

「「「「はいっ」「」「」「」」」」

俺達はそうしてブリーフィングルームに向かう。

「ねえ」

なのはが優希に話しかける。

「あ、はい。なんでしょうか．．．？」

「優希ちゃんは訓練とか好きなの？」

「はあ．．．お兄ちゃんにたくさん鍛えられましたからそれなりに
は．．．」

「じゃあさ、私と模擬戦しないかな？」

「ええ!？」

「いいじゃん、優希ちゃんみたいなタイプは初めてだから」

「あう．．．どうしょ、お兄ちゃん．．．」

なのはの熱意に折れそうな優希が俺に救いの手を求める。が、

「頼んだぞ、なのは」

「やたあ!！」「お兄ちゃん!！」

なのはの喜色満面な声と優希の悲観的な声が重なる。残念だが、優希なのはに教導してもらおうとしよう。そして、俺は誰かの視線に気づく。振り返ると、そこにはフェイトがいた。

俺がぺこりと頭を下げると、フェイトもぺこりと頭を下げた。
んー、いい子だなフェイト。

「あの．．．」

「なに？」

「えと．．．その．．．一騎さんは、おいくつですか？」

「俺か？俺は13だよ。ちなみに優希が11、希来は12な」

「同年なんですね」

まあそういうことになるか。

「えと．．．術式は？」

「近代ベルカだよ。デバイスは．．．アルル!」

俺がその名を呼ぶと、俺の胸の前の空間が湾曲し、そこから俺のユニゾンデバイス、アルテマウェポンⅡドゥーエが現れる。山吹色の髪で片目を髪で隠している。別に何かあるわけじゃない。体はけっこうグラマーだ。

一応女の子のためアルテマウェポンと呼ぶのはあまりに可哀想だと思っ、愛称を込めてアルルと呼んでいる。

あ？なんで俺もユニゾンデバイスがいてるかって？それはあれだ、この京谷^{おばか}さんの気まぐれだ。まあいいんだけどな。

「どつたの・・・？」

アルルは寝起きだったようで寝巻き姿のままだった。別に俺の中にいる必要はないが、アルル曰く俺の中は心地よいらしい。

「はやてとおなじなんですネ、一騎さんのデバイス」

「ああ、はやてはリインフォースだったか」

「私はリインちゃんみたいに優秀じゃないんだけどね・・・」

とか言っているが、アルルはリインとは別方向で激しく優秀だ。主に能力強化や防御、回復で進化を発揮する。アルテマウェポンという名前を貰ってるくせにそれともうかと思うけど。

「じゃあ武器はどうなんですか？京谷さんと同じ？」

「いやいや・・・んなわけあるかよ・・・。俺のはこれだよ」

そう言っ、俺は愛用の二振りの刀を取り出す。

「うわぁ・・・」

俺の刀を見て、フェイトは感嘆の声をあげる。俺から白龍を受け取

り、フェイトは一息で抜いた。頭上でくるくると回して刃紋を見てからまた閉まって俺に返す。

「業物なんですね．．．私、刀の事はよく分らないんですが、すごく強そうな感じがします」

「いや、今フェイトが抜いたのはそうでもねえよ」
「え？」

まあ驚くわな。そこへアルルが口を挟む。

「一騎の白龍は不殺の刀っていう異名があるんです。その刀は人を傷つけることが出来ないんですね」

「ええ！？」

「正確には、”斬った斬り傷がすぐに治る”んだ。まあその代わりに痛みは普通に斬ったときより遥かに痛いんだけどね」

「へえー．．．」

フェイトは関心を持って、アルルの話を聞いていた。そうして程なくブリーフィングルームに到着する。

そして戸を開けると、すでに京谷さんとクロノさん、希来、なのは、優希に八神はやてが座っていた。

「あ、はやて」

「フェイトちゃんもきとったんやな。そっちのかつちよええ子とちつこいの？」

「桜井一騎だ。こっちはアルル」

「よろしくです、はやてさん」

「私は八神はやてや。こっちは．．．」

「ラインフォース？です アルルちゃんからはなんか似た者同士な気がするです」

「うん、私もリインと同じユニゾンデバイスだよ」
「そうなんですかー」

なんかリインとアルルの間に既に固い友情が結ばれたようだ。

「お、来たか。とりあえず座れ」

京谷さんの指示に従い、俺達は各々座る。俺の右にはフェイト、その隣には希来、左にははやてといった具合だ。

「よし、ではブリーフィングを始める。まずはこれを見てくれ」

進行役をするらしいクロノさんは、そう言つとモニターに廃墟に立つ謎の生物の画像が投影された。

「これは・・・?」

と、なのは。

「これは二週間前に第2武装隊が送つてきた最後の映像だな」

「第2つて謎の反応を調査しに行ったところですよ?もしかして第2武装隊つて・・・」

「全滅した可能性が高いな・・・」

優希の疑問に俺が答える。

「せやけど第2ちうたらなんか特化した戦闘のプロが所属するとこやろ?そんな所が何でそう簡単に全滅するんやろか」

「考えられるとするなら古代遺産が絡んでる可能性は高いよね」

「いや、もうひとつあるぞフェイト」

「え？」

フエイトの分析に京谷さんが横槍を入れた。それに対しクロノさんが確かにというふうに頷いた。

「ああ、京谷が三ヶ月前に倒してきたスティルヴのパターンもある」

俺はそれを聞いてそういうこともあったな、と思った。あの時、京谷さんがふらりと出掛けたときに打ち倒した魔物である。

「つまり、明確な意思を持った魔物が闊歩している可能性がある。管理局は危険対象として発見しだい駆逐、という方向で決定している」

「じゃあ俺達はその対策とごみ掃除を請け負えばいいのか？クロノ」「そういうことだ。だが、データが少なすぎる。後にも先にも現状はこれだけ。ユーノ使って無限書庫ググらせたり管理世界に片っ端からアクセスさせているんだが・・・」

喋るクロノさんの表情を見る限りあまり芳しくないようだ。しかし然り気無くネット用語が言葉に混ざっている辺り流行については行っているようだ。

「だから最近ユーノくん見かけなかったのかあ・・・」

なのはが寂しそうに呟く。ふたりは親友らしいから、話したり一緒にご飯が食べられなくて寂しそうな思いをしているのだろう。そこに京谷さん宛に通信が入る。

「どうした」

『第47管理世界”ガイア”に例の件に関して情報がありました』

「それで？」

『はい、データの魔物がその世界に来ていたようですがなにやらみおん．．．』と呟いていたそうです』

「『『『『『みおん．．．？』『』『』『』』」

その場に居合わせた全員が首を傾げた。

「それだけか？」

『ええ、申し訳ありません．．．』

「いいさ、関与したてはそんなもんだろ」

『そうですね．．．では、失礼します』

そうして局員の通信は途絶えた。

「さて、一応ガイアに向かった方がいいか？」

「そうしてくれ、実際に向かって分かることもある」

「うし、じゃあ今回は俺、一騎、なのは、紫苑で出向こう」

「了解した、出向許可を出す」

どうやら具体的な方向性は決まったようだ。そして京谷さんはすぐさま神月紫苑さんを通信で呼び出した。

『なんじゃ京谷』

「紫苑、今大丈夫か？」

『うむ、出向も終えてつい先程までオンライン麻雀に興じておつての』

「そうか、なら今から出撃準備してガイアの管理局基地に向かってくれ」

『了解じゃ。しかし、急に出撃指令などまた穏やかな話ではないの．．．』

「まあ穏やかな話じゃないな．．．」

『ふむ、ならば10分有れば指定ポイントに行っておこう』
「ああ、助かる」

そうして、京谷さんは通信を切った。

「よし、じゃあバリアジャケットに変えて出撃るぞ」

「了解!!」

「アルル!」「レイジングハート!」「フィオネ!」

「はいっ!」「Yes, My master」「おっけー!!」

京谷さんと俺、なのはの呼び掛けに応じてフィオネらが応える。そして体は光に包まれ制服がバリアジャケットに変貌していく。

俺のバリアジャケットは黒が基調で、制服を黒くしたような感じにも見える。そして、腰には二本の刀が添えられ白のマントが左腕に巻かれている。

京谷さんのは俺と似ているが、こちらは黒コートである。

「ふええ...二人ともかつこいいね...」

なのはが驚いたような顔で、こちらを見ながら言った。確かに俺と京谷さんが並べば天使と悪魔に例えられることもしばしばである。

「まあ俺はかつこいいからな」

「自分で言うか、京谷さん...」

京谷さんは分かっていてそういう振る舞いをするのがしばしばある。まあ言動に行動がついていくのだから俺は文句言わないけれど。今思えば同じ年なんだよなあ...。

「どうした、一騎」

「いえ、なんでもないですよ」
「そうか、んじゃ行くか」

そう言つて俺達は再びブリッジに向かう。俺と京谷さんがならんで歩いている姿は輝かしく映つたのだろっ、すれ違う人ほぼ全員が敬礼で迎えてくれた。京谷さんは管理局では異常なまでの魔力と多彩な戦術に敬意を表して、”神帝”と謳われている。ちなみに俺は武器である二本の龍の名前がついた刀から”双龍”と呼ばれているらしい。

「人気者だね、二人とも」

なのはは笑顔で俺と京谷さんに話しかける。

「まあ・・・なあ・・・」

「人気者は困るぜ」

あはは、京谷くん自分で言つたら意味ないよ？」

「たまにはいいじゃないか、なあ？」

「いやいや、俺に振られても困るから」

「一騎は澄ましてやがるな。草食か、んん？」

あ、ちよつと暴走してやがるな。

そんなこんなで、談笑しつつブリッジに着いた。それから例の視界暗転による転送で第47世界ガイアの管理局基地”ユーノラス”についた。俺達が基地の広場に降り立つと、二人の士官が出迎えてくれた。

「お疲れさまです。本局管理補佐官、ニーチェ・ゲインズです」
「アルニカ・フォレスト通信士です！お茶の用意してますから、休

憩室にどうぞ」

「構わないよ、アルニカ。俺達がこんなことでへばると思うか？」

「ま、まあそうなんだけど・・・」

アルニカは困ったような顔で答える。それを不思議に思ったか京谷さんが口を挟む。

「知り合いか？」

「ああ、初めての単独で助けた子だよ」

アルニカは俺が初めて単独で担当した任務の際に助けた子である。震災の処理だったのだが、彼女は身寄りがなかったために俺は管理局で勤めることを勧めた。まあアルニカ自身に適正があったのもあるがな。

「お、じゃあなかなかいい感じな・・・」

「んなわけあるか」

「・・・」

「ほらあ、一騎くんが否定するからアルニカちゃん沈んでるよ？」

なぜ沈むし。

「ここか？」

「はい、対象は北西の雪が多い大陸の南に渦潮に囲まれた島があるのですが、そこに局員が調査に行っていた折りに発見したそうです」

会議室のモニターにガイアの地図を投影しながら、俺達は例の敵の居場所を聞いていた。

「渦潮に囲まれた島かあ．．不思議な場所だね」

「まあ渦潮に捕まったら大概は壊れるしな」

「つーことは、水の敵が出てきそうだな．．」

「そうなりますね。ここは不思議に包まれた世界ですから。まだ分からないことはたくさんありますよ」

そう言って、ニーチェは剣をひとつ取り出す。

「ってこれは？」

「この世界のエクスカリバーです」

「これがか！？」

「京谷くんのエクスカリバーとは違った形だね？」

「そりゃ、世界毎に同じ名前のはある。違う世界では同じ姿形したやつが俺達とは違う生活を送っているのだから。ちなみにこの世界には”真のエクスカリバー”があつたら、古代遺産の」

「はい、ですがどこにあるかは未だにさっぱりですね．．って話が逸れてます」

「それがうちのクオリティだ。とりあえず向かえばいいのか？」

「はい、お願いします」

というわけで、早々と準備した俺たちはその場所に向かって通常飛行で向かっていった。

『皆さんの速度なら10分で着きますね。後は定時連絡と帰還時のコールがあればこちらからは特に指示はしません。氷上空佐の指揮にお任せします』

「了解だ」

アルニカからの通信で任務確認をする。通信が途絶えた後最初に口

を開いたのは紫苑さんだった。

「そう言えば、今日で京谷が隊長になって三ヶ月じゃの。指揮には慣れたかの？」

「んー．．．ぼちぼちだな。それにうちの連中は優秀だから簡単な指示で思った以上の事をやってくれる」

「そうじゃの。シオンやアリスに掛ければ分隊指揮はお手のものじやろうから」

「ついでに言えば私と京谷くんが会ってもうすぐ4年なんだよね。一騎くんとは2年かな？」

「そうだな．．．案外早いもんだ。皆階級が上がればもっと忙しくなるんだろうな」

「だな。俺は16になりや提督試験の権利得られるし、紫苑はもうすぐ一佐の試験がある」

「みんな目標あるもんねえ．．．」

なのはは遠い目を向けながら呟く。なのははまだ中学生だからそこまでのだろうが、ガチガチの局員な俺は十分に忙しい。そのうちのなのはらがそうした時間を送り出すようになるのは嬉しいのやら悲しいのやら。

ちなみに俺がフェイト・はやてと面識がなかったのは二人とも俺とは別方面な仕事だからである。なのはからは会ってみるかと何度も言われたがまったく時間調整が出来なかった。しばらくすると、前方に渦巻き島が見えてきた。

「あ、あれじゃない？」

「．．．なんかいる？」

俺のマントにくるまっていたアルルが呟く。目を凝らしてみると、飛竜っぽいのが何匹もいた。そのうちの一匹がこちらに気づいたら

しく、こちらに向かってきている。

「確実に敵意を剥いておるの」

「だな。戦闘開始するぞ．．．一騎と紫苑は遊撃！！なのはは後方支援だ！！」

「了解じゃ！！京谷は指揮を！！」

「分かった！！」

そしてそれぞれ散開する。俺は一旦上空に上がった後、アルルと意思疎通を完了させた。

「いくぞ」

「ユニゾン・イン！！」

アルルが俺と同調し、ユニゾンインを完成させる。この間俺の髪の色が薄くなり、瞳の色も薄くなる。

そして銀竜の射程圏に入ったらしく、銀竜はブレスを吐いてくる。

それにいち早く反応した紫苑さんは、オリジナルのバリア系防御魔法”チェーンウォール”で防いだ。それに呼応して、なのはがデイベインバスターを撃ち込み、撃墜する。

俺はというと、銀竜の一匹が殺られたのを見た仲間が怒ってこちらに来たのを迎撃するために突撃していた。

『中継です！銀竜には特殊防御を備えているのを確認しました。気をつけて！！』

と言う声と俺の”ドラゴンスレイヴ”の攻撃が重なった。光牙は銀竜に向かって一直線に向かう。が、銀竜に張られたバリアに入った瞬間、攻撃が屈折した。

「!？」

「攻撃が．．曲がつた？」

『（ジャマーフィールドに近い反応を検知しました）』

「む．．様子見てワンシヨット」

『（ストライクチェーン）』

紫苑さんが攻撃を仕掛ける。魔力で形成した鎖が銀竜にまとわりつくが、腐りはねじ曲がりやがて砕けた。

「京谷、分かるか？」

「ありゃあ、ディストーションフィールドだな。射撃はまず届かねえ」

「なるほどね。じゃあ、京谷くんも前線に出ようか」

「ああ」

そう言つて京谷さんはゲイボルクを呼び出す。それに呼応するように、俺達は近接攻撃のスタンバイに入った。

「ACSDライバー、起動」

「ストックブレイク、スタンバイ」

「スネイクエッジ、スタンバイ」

刹那、全員が目標に向かって突進した。俺は固まっている箇所、三人は一体ずつに。

ゼロ距離において、ディストーションフィールドが通用するはずがない。なのはのエクセリオンバスター、俺のストックブレイク、紫苑さんのスネイクエッジ、京谷さんの竜剣でまとめて葬った。

「すごいね．．みんな。一瞬で全滅なんて」

「なんだかねだでなのはも落としているじゃないか」

「だけど、一騎くんや紫苑さんは複数倒したし．．．」

なのははそう言って俯く。俺のストックブレイクは範囲攻撃で、攻撃対象と半径数メートル内にいる同じ攻撃対象の敵に物理攻撃ダメージを与えることが出来る優れものの技だ。言うなれば雑魚殲滅用の技である。紫苑さんのスネイクエッジも似たようなものである。京谷さんがちよつと不機嫌なのは撃墜数で負けたからだろうな。そこに再び通信が入る。

『聞こえつか京谷』

「その声、カルトか？」

『ああ、任務中に例のやつとおぼしき奴が攻撃してきた』

「なんだと！？」

『まあ一捻りにしてやったが．．．これ、簡単に終わるようなもんじゃねえぞ』

命と同じ槍使い、”ロングヌス”を駆る空戦S+の荒くれ者カルト・ヴェスデンバーグさんはそう呟いた。

そう．．．俺達はこれから先に起こる事の重大さに、まだ気づかなかった。

R e w r i t e 2 : 同窓会任務に・・・なったらいいな。(前書き)

命「投稿早いね!？」

作者「まあ・・・ねえ。とりあえず第二話」

Rewrite 2：同窓会任務に・・・なったらいいな。

- view cult -

「ちっ・・・派手にやってくれてるな」

俺は前方に広がる廃墟を見て嘆息した。ここはガイアで”霧の大陸”と呼ばれる大陸の南ゲートつつう空の関所にいた。

リンドブルム側に俺達やいるんだが、ゲートが盛大に破壊されていやがる。ここにいた連中はあらかじめ避難していたのがせめてもの救いか。

「・・・酷いですね」

隣にいたスノウ・ルウベル力が呟く。こいつは日本刀を駆るS+のベルカ式の魔術師だ・・・ってなんで俺が説明せにやらんだ。

「まったくだね・・・。けどいい分、目撃情報がないのよね」

はぁ、とセレナ・チェリカールはため息をつく。まあこいつはミッドだ、うん。俺と同じ槍を使う。

「話を総合すると、飛空艇を通すためにゲートを開けた瞬間謎の攻撃があつて・・・それでなんかでかい爆発があつたってこつたな、ガキンチョ」

『は、はぁ・・・そんな感じです。なんか怖いですが・・・（ボソッ

「う、おおい！！怖いってなんだゴルア！？」

『ひ、ひいひい！！』

「カルト、新人泣かしはだめですよ」

「これだから若い子がついてこないんだよ」
「やかましあ！！」

スノウとセレナに宥められたので仕方なく退いてやった。

- v i e u k a z u k i -
「ん．．．これは？」

通信が終わった直後、俺はひらひらと舞う羽根を見つける。それを
手にとると非常に艶やかな触り心地がした。

「ん、どうしたの．．．ってこれは？」

「どれどれ．．．む、これは銀竜の羽根じゃの。普段は倒せば碎け
て消滅するのじゃが、残るのは稀でな。ぬしは幸運だの」

「そうなんですか？」

「うむ、まあなにかに使えるかもしれんから大事にとっておくとよ
かろう」

紫苑さんにそう言われたので、俺は懷に銀竜の羽根を仕舞った。

「うし、じゃあ帰るか」

京谷さんの一言で、俺達は帰還体勢に入る。その帰り道、なのはは
京谷さんに質問した。

「ねえ京谷くん、ディストーションフィールドについて詳しく教え
てくれないかな？」

「ディストーションフィールドか？それはフィールド防御のひとつ

でな、周囲に鏡みたいなのを展開して攻撃の屈折を行うんだ」

「魔力による攻撃も光が含まれておるから曲がってしまうんじゃない」

「そうだ。威力が高いものはある程度は押し込めるが、かなり弱められるし敵の魔力が高いと大したダメージにならない。そこが怖いところだな」

「でも至近距離ならあまり曲がった感じはしなかったんだけど．．．

」

「まあな。ディストーションフィールドは周囲に展開、さらに表面しか効力がないから範囲の中では効果がない。だから、ゼロ距離の攻撃にはめっぽう弱いんだ」

「なるほど．．．」

なのはは関心深そうに頷いた。そこに俺は紫苑さんに話を振ってみる。

「まあ射撃型には辛いもんがありますよね、紫苑さん」

「そうじゃの。特になのはやはやてみたいながチガチの砲撃型には天敵に近いじゃろ」

「そうですよね．．．」

「ま、いい機会だから対策練ったらいいいじゃろ」

「はいっ」

そんなこんなで時間が過ぎていった。

- v i e u c u l t -

「そついえばカルト、一緒の任務は久しぶりですね？」

「ああ、そうだな。この三人は久しぶりか」

突然のスノウの言葉にそういえば、という風に俺は頷いた。

「ま、隊長が気を使って二人きりになるように調整してるしね」

「．．．後で小突いとくか」

要らん気を回すやつにお仕置きすることを誓いながら、あたりをまた見回す。南ゲートが大破している以外は、緑が広がるよい所だと俺は思う。どうやら、南ゲート平原に美味しい湧き水があるらしいから、帰りに飲むのもいいだろうな。そんなことを考えながら横を見ると、セレナが考え事をしていた。

「どうした、セレナ」

「ふえ！？あ、いや．．．」

突然声を掛けられて、素っ頓狂な声をあげるセレナ。

「それより．．．良いとこだね」

「ああ．．．」

俺が思っていたことなので、おとなしく頷いとく。

「せっかいですから、少し歩いて回りますか？」

と、スノウ。

「うし、じゃあ下に降りるぞ」

「了解っ」

そう言って、俺達は飛行魔法を使って、平原の南ゲートに降り立つ

た。

「へえ．．．緑が凄いね」

「気持ち良い場所ですね」

二者二様の感想を耳にしながら、俺は湧水の方を見た。すると、なぜかポットとコーヒーセットが置き去りとなっていた。

「ってなんでこんなもんが落ちてんだよ」

「どつたのー」

俺の突っ込みにセレナが反応する。そして俺の背中からひょっこり顔を出して問題のブツを見て、

「ってなんでこんなもんが落ちてんのさ」

同じ突っ込みを入れた。ちょっと面白くなった俺はスノウを手招きして呼ぶ。

「どうしました、カルト？」

スノウが来たので俺は一步引いてスノウにコーヒーセットが見えるようにした。スノウはそれを見て、

「たかがこんな．．．．．。ってなんでこのようなものが落ちているのでしょうか」

スノウの優しさに全俺が泣いてしまった。

まあそんな事を言っているかもしれないので、二人を適当に休ませつつ俺はコーヒーを淹れていた。銘柄はモツカ。俺は甘ったるくて嫌いだ、二人が美味しそうに飲んでいるのを見て満更でもないなと思った。

「カルトは飲まないんですか？」

淹れるだけ淹れて飲んでいない俺を見てスノウが心配そうに話しかけてくる。

「甘えのが嫌いなだけだ」

「まあモ力だしね。カルト的にはキリマンのーが良かったんでしょ」
「まあな」

まあせっかくなので一口啜る。確かに甘ったるいが、使った水が良いいせいか何故か美味かった。いい水がいいコーヒー作って本当なんだな。そんな矢先に基地から通信が入った。

「ああ！？」

『中継基地です。南ゲート前の平原にエネミーの反応があります。気を付けてください』

「カルト、あれ」

通信が入ってすぐに、セレナが敵の存在に気づいた。

「能力は」

『わかりません、アンノウンです』

「そうか、まあアンノウンなのはいつもの事か。中継基地、カルト・ヴェステンバーグ、スノウ・ルウベルカ、セレナ・チェリカールで迎撃する。．．．出ンぞ」

「わかった」

「わかりました」

二人にそれを伝えて、飛翔する。指定の座標軸に來ると芋虫っぽいやつが俺たちがいた場所に群れてきているのが見てとれた。

「うわなにアレキモッ!!」

「・・・なにか吐き氣がしますね」

「全くだな」

つい正直な感想を言っちゃった。まあいい。

「燃やし尽くしてやるぜ・・・ッ!!」

俺は炎を纏わせたロングヌスを抜いた。

I v i e u k a z u k i

「カルトラがアンノウンと接触したみたいだな」

「ええ!？」

京谷さんが口にした言葉になのはが驚愕の声をあげる。

「ふむ・・・しかしそれでもすごい勢いでぶっ倒しておるの」

紫苑さんが言ったとおり、カルトさん達は激しく暴れまわり、敵を打ち倒していた。けど不安なことはある。

「後処理どうするんだ・・・」

「・・・それは気にしない約束じゃ」

ガイアの生態系の維持に一抹の不安を覚えながら、ユーノラス基地に帰還した。

- view kurono -

どうやら無事に任務に当たっているようだ。優秀な人間が事に当たると非常に助かるな。

だが、これで余計に事が分らなくなる。それは何故か。

「行動が予測出来なさすぎる・・・」

「そうだね・・・」

僕のばやきにフェイトが同意する。執務官の職に就いてるだけあつて、そのへんはよく分かるらしい。

「作戦指揮官の辛いところだね」

フェイトが同情の言葉を上げる。指揮官はあらゆる方面から物事を見なければならぬ。それに対応できる部隊がいるのか、どれくらいで手配できるか、など事務処理がいつも付きまとう。特に、各部隊には保持制限があるからおいそれと出撃手配ができないのも歯痒い。まあ・・・ナイトオブ라운ズは局長特轄だから例外で破格の

戦闘能力を持ったやつが集まっているが。

「とにかく、手当たり次第に探すしかないのが現状だな」

「そうだね……。そろそろみんなが帰ってくる頃じゃないかな」

「ん、そうだな。全員基地に着いて転送処理に入ったところか」

僕はモニターを見て呟く。どうやら遭遇した敵と派手にドンパチやっていたらしくカルトは不満そうに、一騎はやれやれといった感じな顔を浮かべていた。すると、無限書庫から通信が入った。ユーノか。僕は直ぐ様繋ぐ。

「ユーノか」

『うん。検索した結果、”みおん”に該当するデータは30件ほど』

「内容は」

『内容ねえ……。全然大したことないよ。なんせ40年も前に管理局に居た魔導師、下坂魅音しもさがみおんって人の一部戦闘ビデオと彼女の書見と
か程度』

「下坂魅音……。？」

僕はその言葉に覚えはなかった。40年前となれば”三提督”より前の時代だ、俺の知り合いでは誰一人知らないかもしれない。

『まあ誰も知らないよねえ、知ってるならあの人と同じ時代の人くらいだと思うよ』

「どついう意味だ」

『今の管理局の人間のほとんどの人間は知る由がない。要するに……。彼女の事はタブーでもあるんだ』

「はあ？」

『何故かと言うと……。書見で見たんだけど、下坂魅音が管理局に居た期間はたったの二年弱。居なくなつたのは、新暦0029年の

12/4になってる」

「それは、”エクスワールド事件”じゃないか？」

『そうだね。それを境に彼女のデータはまったくないよ』

ユーノがそう言って、僕は考え込んだ。余計に接点がなくなってきた。みおん”下坂魅音”としても、今回の事件に何ら結び付きがない。やはりボツなのか？

僕は頭をフル回転させようとしたところでそれは霧散した。みんなが帰ってきたからだ。

- view kazuki -

「「ただいま戻りました」」

全員が声を揃えて、帰還を伝える。そこにはクロノさんとフェイト、そしてモニターにはユーノがいた。

『あ、なのはお疲れさま』

「ユーノくんもお疲れさま」

なのははマイペースにユーノと会話する。クロノさんがバツを悪そうにしている辺り、なにか取り込み中だったのかもしれない。

『それじゃあ引き続き検索や情報収集に専念するよ』

「わかった、任せたぞ」

ユーノが通信を切る。そして振り向いたクロノさんは労いの言葉をかけた。

「お疲れさま、みんな」

「ああ、ただいま」

「うーっす」

「クロノ提督もお疲れさま」

など、各々が返事を返す。そのまま京谷さんは続けた。

「そっちはどうだ」

「それはこれから話す。だから紫苑も残っていてくれ。他のみんなは母さんらが会食の準備をしているからそっちに向かっていてくれ」

「やたあー!!」

「ご飯ーっ」

飯と聞いて、セレナと残っていた優希が喜色の声をあげる。同じく残っていたはやてはふむと考え込む仕草をする。

「せやから、シグナムらが今朝から居らへんかったんやなあ・・・」

「あー・・・じゃあうちの連中もか」

「京谷くんとも？」

「なにせよこの人数だしな・・・人手が要るんだろうな」

「せやなあ・・・うちらが見てるメンバー殆ど大飯食らいやから・・・」

「」

二人してふう、とため息をついていた。なんなんだ？

「まあいい・・・みんな一騎と行ってこい」

「「「はぁーい」」」

「って待てや」

「なんだよ一騎」

「なんで俺がお守りなんだ、カルトが居るだろ」

「俺アガキのお守りなんざ出来ないんでな」

「．．．だよ」

出来ないじゃなくて、ただダルいだけなんじゃないだろうか。

「そんなこと言ったらスノウとの子供が出来たらどうするのよ」

「う　おいテメエ喧嘩売ってんのかゴルァ!？」

セレナが止めを刺した。スノウはと言うと。

「わ．．．私がカルトの．．．／／／」

乙女モードが発動していた。なのらはあはは、と愛想笑いを浮かべるだけだ。

まあ、こういうのは取り分けラウンズ内では日常だったりする。俺としては迷惑省みないのだが、今では満更でもない。そうこうしているうちに終息したので、食堂に向かった。

- view kyo ya -

やれやれ、ようやくみんな行きやがったか。しかし、あのカルトを宥めるとは優希も凄いな。

「．．．で、どうして俺と紫苑を残したんだ？」

「それは二人が一番冷静な判断が出来ると思ってたからな」

「儂はともかく、京谷がそんな器の広い男には見えぬのじゃが．．．」

じゃあ二代目隊長にするなよ。

「まあそうなんだが．．．」

そこで認めるな、悲しくなる。

「別に一騎も残してもよかったんだが．．．実践経験、まだあいつは一年とないだろ」

「そうじゃな．．．まだ短期カリキュラムを終えて一年とおらんから、いくら落ち着いた童（わらし：子供の意）でもさすがに不安じやろうて」

紫苑はふむ、と首肯した。そう．．．まだ一騎は実践経験が拙い。というか、あいつが魔法に触れてまだ2年しかないのだ。俺が一騎と出会ったのは、なのはと保護任務をしていたときだ。たしか、魔物に囲まれていたのを助けたのが最初だったな。その直後、不意を取られたのをあいつが俺が出していた『約束された勝利の剣』エクスカリバーを奪って防いだ。

あれは嫉妬したな、その後その敵を一撃で潰したんだしな。それから一騎は唯一の肉親である妹を連れて管理局入りを決めたのだ。そして卒業後の進路にナイツオブブラウズを選び、今に至る．．．と。

「おい京谷、なにを呆けておる。行くぞ」

「ああ．．．すまない」

紫苑に呼ばれ、俺は二人に付いていった。

そして向かったのは何やら薄暗い記録室。

「ここは？」

「見ての通り、記録室だ。これを見てください」

そう言つて、クロノはパネルを操作してひとつの映像を投影した。そこには、フェイトに似たバリアジャケットを着たなのは似の少女が、恐ろしい反応速度で演習用CPUを叩き潰している映像が写し出された。

「・・・京谷が女だったらこういう感じだったのじゃろっな」

紫苑がポツリと呟く。

「彼女は、下坂魅音。管理局で二年間働いていた空戦EXの魔導師だ」

「EX？」

「つまり俺だけだと思っていたけどな。だけどリンディさんだけは俺の魔力量見てそこまで驚いてなかったしいてもおかしくないなとは思っていた。」

「ああ、当時の管理局の魔力ランクじゃ彼女の魔力量を定義できなかったんだ。それくらい、異常な量の魔力を持っていたらしい」

「まさに京谷じゃな」

「だけど、そんなくらいすごいやつならもつと資料残っていてもいい

んじゃないか？」

俺は核心を突いた質問をする。しかしクロノは横に首を振った。

「残念だが、欠片も残っていない。よくよく調べたらこの資料も近いうちに廃棄指定になっていたしな」

「それはよく意味が分からの。それほどの魔導師なら、後世に末長く名を残すべきじゃろ」

「それはそうなんだが・・・どんなデータベース探しても、ほとんど残っていないんだ。理由がわかれば苦労しないな」

クロノは嘆息するように言った。俺もしばらく考え込む。なぜ、そのような魔導師がいて、ここまで記録が少ないのか。あたかも彼女がいたことを隠そうとしているようにしか見えない。

「まあ・・・現状では判断材料に乏しすぎるじゃろ。今はこの件は保留じゃな」

「ああ・・・では、二人も食堂へ向かってくれ」

「ああ、クロノは」

「僕はもう少し書見していくよ」

「りょーかい」

そして、俺と紫苑は食堂へ向かった。

ところ変わって食堂。俺達が食堂に着くと、そこではシャーリーさんやリンディさんに加え、アリスやシオン、フィオネらもいた。

「おかえりー」

「お疲れさま」

「あれ、京谷は？」

「まだ記録室じゃないかな」

「そっか・・・」

「ってなんやねんこの料理の多さ」

はやてが料理の多さに突っ込みをいれる。それにシオンと星川姉妹がフオローを入れた。

「私たちが買い出しに行っていたのですよ」

「だよー」

「ですよ」

あー、だから用事が・・・とか言っていたのか。多分きららとさららもシオンの手伝いで来たのだろうな。

「あ、この辺は京谷くんが」

「京谷さんも？」

「せっかくみんな集まるなら、って急遽手配したみたいよ」

妙なところで気が回るやつだな、とか思いながら食卓を見回す。本当に彩りみどりで美味しそうだ。

「さ、みんな。たと召し上がれ」

「「「いっただっきまーすっ」「」」」

リンディさんの声で、それぞれが食べたいものところに行き、皿に取って食べる。俺は無邪気組のみんなの動向を見ながら一息ついた。そこになのはらエース三人娘が近寄ってくる。

「はい、一騎くん」

「ああ、ありがとう」

なのはから、ジュースが入ったグラスを受け取り4人で乾杯。ちょっとだけ嬉しかった。

「なに食べよつか、リイン？」

「私はあれがいいですー」

「いきなり七面鳥!？」

「はやく食べないとアルフに食べられるです・・・」

「あはは・・・」

「一騎くんはなに食べんねや? ついでくるで?」

「ん、そうだな・・・」

せつかなので、立ったままでも食べられるものをお願いしたら、さすが関西娘。焼き鳥と串カツオンリーだった。

「主はやて、こちらでしたか」

「あ、シグナム。それに他のみんなも」

「ん、新入りか? はやて」

「あ、こっちのイケメン「イケメン言うな」は一騎くんや」

スルーしやがった・・・!

「ふむ、ではあちらの子供たちは?」

「あっちのちっこいのがきららとさらら。赤い髪止めのがきららな。」

で、その後ろにいるのが俺の妹で優希。そいでカルトさんらというのが希来」

「ほう．．．ラウンスもいつの間にか若年戦力を入れていたのか。しかし、京谷もだがこの年齢で特務隊とは恐ろしい子供だな？」

「．．．まあ」

シグナムのペースに簡単に吞まれそうになる俺。さすが、管理局の姉御と呼ばれることはある。

「して．．．剣が得物か」

「あ、はい」

「よし、後で模擬戦だ」

「またシグナムやってらあ」

「む、なんだヴィータ。別に構わんだろう、猛者と戦いたいと思うのは戦士としての本能だぞ？」

「あはは．．．シグナムは戦うの好きだしね」

フェイトはシグナムの強引ぶりにあははと笑う。人の事言えないだろ、とヴィータが視線を送っていた。それに気づいたフェイトは反論する。

「な、なによヴィータ、その”お前も人のこと言えないだろこのバトルマニアが”みたいな視線は」

「当たり前だろ、いつもうちのシグナムと模擬戦してるくせに」

「あう．．．」

「あはは、フェイトちゃんも好きだもんね」

「なのはまで．．．」

フェイトはしゅん、と頂垂れる。俺はその様子を微笑ましく眺めていると、制服の袖を引っ張る者がいた。優希である。

「お兄ちゃん」

「ん、どうした」

「せっかくだし、アレ見せない？」

「ああ．．．アレか」

そう言つて、俺は情報端末を操作する。

すると、俺の情報端末に3人の少女が写し出される。

「あれ、この子らは」

「『アーク、エリカ、ステラ13歳誕生日』祝い」

「ああ、マテリアル三人娘だよ」

「たしか京谷らが保護したんだっけ」

そう．．．彼女らはなのはらが9歳の時に対峙した闇統べる王、星光の殲滅者、雷刃の襲撃者だ。二年前たまたま鉢合わせになったところを俺達が保護し、現在に至る。

「まあ闇の書プログラムゆうても、素性は女の子やしな。しかしうちらによつ似とるなあ」

はやてはまじまじと、三人の写真を見比べる。シグナムはふう、と息を吐いて

「まあみんな正反対だがな、特にテストロッサ」

「ええ．．．っ！」

「あー．．．それは分かるかも」

「なのはも!?」

「アホの子だもんね．．．」

「あはは．．．」

「あれ、一騎引つ張りだこだねこれ」

そう言つて、優希は俺の端末を操作して俺がエリカらという写真を表示した。

「まっただな・・・この色男め」

「ちげえよっ／＼」

「あはは、一騎くん顔赤いねんで？」

「くう・・・ってフェイトはなんで難しそうな顔してるんだ？」

「ふえ！？な、なんでもないよっ／＼／＼」

首をブンブン振つて否定するフェイト。なんなんだ？

「フェイトちゃん照れちゃって可愛い」

「違いますよシャルっ／＼／＼」

とまあフェイトが弄られてる間に、俺は串カツと焼き鳥を平らげたので、おかわりをしに食台に向かう。おかわりを適当に注いでいると、隣にはシオンさんがいた。

「どうしたんですか、シオンさん？」

「いえ・・・」

シオンさんはふるふると首を振つた。それに併せて、黒リボンで縛つた長い尾の髪が揺れる。

シオンさんとは年が五つも違つたためか、お姉さんのような風がある。もちろんシグナムのような姉御気質ではなく、優しく物静かなタイプだ。昔から身寄りのなかった俺としては、少し憧れでもある。

「皆さんとは割りと馴染めてますね」

「まあ、あれくらいいごいご来られる方が嬉しいしな」

「そうですか・・・」

そう言つて、わずかに微笑むシオンさん。いつ見ても落ち着く笑顔だな、と思う。

「あ、いただきますね？」

と言つて、シオンさんは俺の串カツを取った。代わりに俺はシオンさんがついでいたおにぎりを貰つて食べた。

そんなこんなで時間が過ぎ、あらかた平らげたところではやてが再び声をかけてきた。

「せや、一騎君は三日後からの盆休みは暇してるん？」

「ん？ああ、暇だが」

「せやったら、うちらと旅行行かへん？」

「旅行？」

「せや、地球の日本、大分に旅行や」

なんでそこなんだよ。俺たちならミコノスでも十分行けるだろうに。

「誰が行くんのだ？」

「せやな、今のところはセレナちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、命ちゃん、優希ちゃんやね」

「女の子ばつかじゃないか」

「せやから、一騎くんと希来くんに来てほしいなと」

「京谷さんやカルトさんでもいいだろ」

「カルトさんはなんか怖いし、京谷くんに相談したら」一騎連れて

いきなよ、いやむしろ命令で行かせる” ゆうて」

「前者は納得できるが後者はふざけんなカスがつて感じたな」

「うゝ おおい、どういう意味じゃゴラァ!？」

「ひゃあ!？」

カルトさんの怒声に方をすくませ、背中に隠れるはやて。何故かは解らないが、恐怖対象のようだ。

「まあまあカルトさん」

「つててめえも納得してんじゃねえ!!」

「事実ですし・・・」

「認めんな!!」

「まあまあ、そのへんにしとけよカルト」

そこに京谷さんが割って入る。カルトはバツが悪そうに舌打ちをし、そこを離れる。

「で、誰がふざけんなカスがつて? (ニコッ)」

「お前以外に誰が居んねん、なにが悲しくて子供たちのお守りを」

「やらなかったら管理局全体にお前のロリコン癖を流すからな」 分かった任せておけ」

うむ、天涯孤独より四日間みんなの面倒見る方が何倍も楽だしな。

いくら俺でも物事の善し悪しは分かるつもりだ。

「それにみんなの面倒見てる方が、お前は顔が活き活きしてるしな」
「そうかあ？」

京谷さんの言葉に俺は面を食らったような返事をした。まあ、自分が知らない部分を人が知っている時もあるが。

「そうですね。一騎は面倒見がよいですから適任かと」

「そうじゃの。京谷でも構わんじやろうが行動の自由という点では一騎に軍配があるじやろうて」

紫苑さんとスノウも京谷さんの決定に同意する。それを聞いて、京谷さんは俺の方に手を置き、満面の笑顔で

「ま、ハーレムを楽しんでこいや（ニコッ）」

カルトさんがたまに京谷殺すとかほざく理由が何となくわかる気がした。俺は頭を掻きながら了承し、シグナムに目配せする。それを感じ取ったシグナムはうむ、と頷いて近づいてくる。

「では京谷、一騎と模擬戦するから借りていくぞ」

「ああ、ボッコボコにしてやってくれ」

「ふむ、やれたら尽力しよう」

「あ、優希ちゃん私とやるんだよね!？」

「ふえ!？」

「任務前に言つてたでしょ？さ、行こ！」

「うえ、あ、ちょ、ふにやあああ!？」

模擬戦の約束を思い出したなのは優希を引きずって、訓練室に向かった。

「じゃあ、行きますか」

「うむ」

そうして、なのはvs優希、シグナムvs俺の模擬戦が行われることとなった。

R e w r i t e 3 : 魔王VS妹 俺VS烈火の騎士（前書き）

京谷「マジで閲覧とかあるのか？」

一騎「さあ？」

命「作者は趣味で書いてるしいいんじゃない？でもせっかくなら読んでほしいよね」

京谷「まあな」

一騎「では始まるぞ」

R e w r i t e 3 : 魔王VS妹 俺VS烈火の騎士

「じゃあルールを説明するね」

審判役としてついてきたフィオネが今回の模擬戦のルールを説明する。今回は公式のダメージカウンターを携行しての模擬戦で武器は非殺傷設定、貫通その他付加効果は非発動、ダメージカウンターは3000で行われることとなった。

ダメージカウンターは受けた衝撃の程度で数値が減っていき、0になればブザーがなる優れものである。また、こちらの防御や切り払いも検知してダメージ調整が行われるので安心して受け止めることができる。

「じゃあ私と優希ちゃんからだね」

「うう．．．」

初めて対戦するタイプに楽しそうなのはに対し、いらんとばかりを食らって鬱気味の優希。テンションの差は歴然である。

「ずいぶんテンションが低いな、お前の妹は」

「なんか恐怖対象みたいだ」

なのはと優希の模擬戦が終わるまで、外で見守ることを決め込んだ俺とシグナムは二人してコーヒーを啜っていた。

「一騎があいつらならどう戦う？」

「え？」

「一騎が優希、なのはの立場に立って戦うならどんな対策を取るか、だ」

俺がなのはなら、優希をどう攻めるか。優希はデバイスこそ剣だが、どちらかといえば魔法でお膳立てして、斬りつけるタイプだ。ならば。

「そうだな、まずはフェイスのチャージタイムを取らせないようにする」

「フェイス？」

「優希のデバイス単体の攻撃力を強化する魔法でオリジナルなんだ。あれを使われたら、いくら魔法を防いでも間合いを詰められて、十八番の”フリンジングラッシュ”かまされて撃墜とされるな」

フリンジングラッシュは優希が現時点で使える最強の技だ。四撃一体で、右薙ぎ、左薙ぎまでは同じでそこからは自転して足撃ちや踏み込み撃ち等三撃目はバリエーションに富む。四撃目は上からの切り下ろしか回転して突撃、または2本の剣で振り抜く形となる。形はどうあれ、3と4の破壊力は本当に優希かというくらい凄い。試し撃ちの時受けたが、凶らずも吹っ飛ばされた記憶がある。

「ふむ、では彼女は数で攻めるタイプなのだな」

「ああ、しかもタチの悪いことにひとつたつ潰しても、すぐに修整してくる。なのはが勝つにはいつ優希の計略に気づくか、だな」

「じゃあ優希の立場なら？」

「優希なら、でかいのを撃たせないことだな。なのははシューターがあるから、それをいかに掻い潜って間合いを詰めるか。そしてバスターとブレイカーを撃たせなければ敗けはないと思う」

「だが、曲がりなりにもなのはは戦技教導隊の人間だ。ただ対策を打つだけでは優希は勝てんだろうな」

「ああ、勝負の分かれ目はどちらの数撃ちが先に鈍くなるか、だな」
「お互い頭は良いから、単純な魔力比べには・・・お、始まるぞ」

シグナムがフィオネのゴーサインに気付き、俺は訓練場に目を向けた。

I v i e w n a n o h a i

うわあ、初めて対戦するタイプだからときどきだなあ。

優希ちゃんのデバイスはあの2本の剣みたい。だけど、私と同じミッドチルタ式なんだよね。ということは魔法は使えるけど、どちらかといえば詰めるタイプなんだね。

「じゃあ、いきますよ？スタンバイレディ・・・」

フィオネちゃんの掛け声を聞いて、私はレイジングハートを構える。

「ゴーツ！」

ゴーサインの刹那、優希ちゃんは直ぐに詠唱を始めた。私はアクセルシューターを展開して全弾叩き込む。だけど、さすが優希ちゃん。詠唱破棄して切り払った。

「やああああ！！」

優希ちゃんはその反動を利用して斬りかかってくる。私はそれをレイジングハートで受けた。

ギンッ

そのまま、鏑迫り合いの状態に入る。力任せに押し合う時間が少し続く。

「ッ！！」

これまた同時に振り払い、距離を取る。そこから私はデイベインバスターの発射体勢に入った。見れば、優希ちゃんもなにか唱えている。

「デイベイン・・・バスター！！」

「クロス・・・スレイヴッ！！」

お互いの砲撃と斬撃は中間距離で交錯し相殺、大きな爆発が起こった。だけど、その上から大きく優希ちゃんが飛び上がった。

「ACSDライバー、ドライブ！！」

それを見た私は、私の近接攻撃モードであるACSDライバーを起動させて迎撃した。その直後、優希ちゃんの一刀と私のバスターがぶつかる。

「・・・ッ」

優希ちゃんは苦虫を潰したような顔をする。どうやら、これは完璧に不意を取ったと思ったみたい。だけど甘いね。

「私は・・・簡単には落ちないよ？」

私はつい、そう微笑みかけた。

I v i e w y u k i i

強い。

私が一番最初に思った感想。フィオネさんの始めの合図の瞬間に、あれだけの破壊力を持った攻撃を素早く撃ち込まれたときは瞬殺されるかと思ったくらいだ。それをなんとか切り払って防いだ後も、ほとんどの行動で私は遅れをとっていた。

そして今も、不意を取ったと思った一撃を難なく止められている。

「私は．．．簡単には落ちないよ？」

そう言われたとき、私は言うだけの力はあると思った。それに、ランクも年も上だしね。

「．．．でも、負けられない！！」

私は距離を大きく取る。そして私のサンライズとルナティックの柄を合わせ、キーワードを唱えた。

「クロスジャベリンモード、ドライブ！！」

クロスジャベリンモードは、私の2本一対であるこのデバイスを1

つにして扱いやすく、かつ攻撃力の増加を図るモードだ。さすがになのはさんもビックリしたんだろう、少し驚愕の表情を浮かべた。

やるなら、今だ。

それを悟った私は一気に間合いを詰め、ルナティック側で突きを繰り出す。それをなのはさんは紙一重でかわし、さらにそのままアクセルシューターを私目掛けて撃ってきた。さっきはかなりヤバかったけど、今は大丈夫。そのまま反転して、剣をバトンのように回して防いだ。

「!?!」

「まだまだあ!」

その隙を見逃さない。刹那にクロスジャベリンモードを解き、横薙ぎに一閃。切っ先なのはさんのバリアジャケットをわずかに裂いた。さらに、

「アクアジェット!!」

ルナティックを自分の足元に撃ちつけ、水撃を発生させた。しかも、これは私の技の中で一番弾速が速い技だ。

『p l o t e c t i o n E X』

「っ!」

やっぱり簡単にはいかないか……。プロテクションEXで防がれてしまった。

「優希ちゃん……。凄いね。私、もっと全力で行けるよ……。!」

「・・・お好きに！」

と思った矢先、なのはさんのただならぬ魔力の上昇が始まる。そしてなのはさんが手を翳すと、アクセルシューターよりも威力の高そうな魔力弾が形成された。

（クラスター！！）

本能的に身の危険を感じた私は防御魔法”ウイングブレイカー”を展開し、空域を素早く離れた。数瞬遅れて、私が居た辺りで爆発が起こる。

（・・・防ぎきれないの！？）

なのはさんはさらにフライヤーフィンを全開にしたままアクセルシューターを撃ってくる。ここまでされると私は防ぎきれない。瞬間に蜂の巣にされ、私はバランスを崩した。だが、もっと言えば正しいことをしてくる。あるうことが、そのままディバインバスターを向けてきた。

（噓！？）

直ぐに体勢を建て直して、なのはさんにディバインバスターを撃たせまいと迫る。

「ディバイン・・・バスター！！」

遅かった。射線軸にいた訳じゃないが空戦Sの砲撃だ、かすっただけでも私は大きなダメージを受けた。カウンターを確認すると、既に500になっている。どうやら次の攻撃で雌雄を決しそうだ。

「最後は、お互いの全力全開で決めましょ」

なのはさんは、そう私に言ってきた。．．挑むところよ、こちら
も自身の必殺技を繰り出そう。私は剣を構え直した。

- view nanoha -

うん、反応速度もなかなかだし私の攻撃も読めてる。けど体が頭に
ついていてない感じ．．かな。時々反応が鈍い。そしてさっき
の攻撃でカウンターも大分減っただろうと思う。お互いの全力全開
で決めましょって言ったけど、ぶっちゃけあの子の最高の攻撃が
見ただけなんだけどね。

『starlight breaker』

そして全力全開の必殺砲撃、スターライトブレイカーのスタンバイ
に入る。念のために発射直前に効果が切れるようにプロテクション
を張っておいた。

『10．．．9．．．8．．．』

カウントダウンに入る。しかし、優希ちゃんは動く気配がない。何
か策があるのかな。

『7．．．6．．．5．．．』

が、まだ動かない。

『4...3...』

その時だ。突然、優希ちゃんの姿形がぶれる。そして、気づけば目の前に迫っていた。

（チャージ!!）

優希ちゃんの右薙ぎの一撃が真つ正面からぶつかる。もちろん、プロテクションを張っているため届くことはない。が、優希ちゃんは構わず左薙ぎの一撃を叩き込んできた。

（さらに連撃...!）

じゃああれはチャージタイムだったのか! やられた...! けど...やらせない!!

- view yuki -

（防がれた!?! だけどもんか!!）

私は構わず三撃目に入った。私の攻撃力が極端に大きくなるその一閃は、なのはさんのバリアを完全に打ち砕いた。

「な．．．!!」

なのはさんが驚愕の表情を浮かべる。しかしそれも一瞬だった。目の端でそれを捉えたとき、ブレイカーの発射を予感させた。

「スターライトオ．．．ブレイカーッ!!!」

「ぶっ．．．とべえッ!!!」

私のフィニッシュとブレイカーが真っ正面からぶつかった。暫しの均衡状態が続く。しかし、それも程なく終わった。私の攻撃の効力がなくなったのだ。スターライトブレイカーをモロに受けた私に為す術はなく、結局試合なのはさんの圧勝で幕を閉じた。

- v i e w k a z u k i -

「あー．．．お兄ちゃん負けたあ．．．」

「あはは．．．よしよし」

いくら実力が掛け離れていても悔しかったのだろう、シュンとなった優希の頭を俺は撫でる。

「で．．．どうだ？うちの妹は」

「うん、初めて戦うタイプだったとは言え攻撃やトラップ、誘導が素直だから看破しやすかった。けど、AAランクらしかぬ突破力と瞬発力は光るものがあるね。私なら．．．そうだなあ、もう少し射

撃能力とスタミナ、それで瞬発力のさらなる強化に重点置いて．．．
それに加えて最後の技に近く、かつ使い勝手がいい技の会得を目指
させるかな」

さすが戦技教導官。分析や傾向だけでなく、これからの成長指針ま
で打ち出した。ふむ、じゃあ優希の指導をなのはにさせてみようか
な。優希はあまり人と仲良くしようとしないうつだからいい機会だ。

「なあ、優希の指導を任せていいか？」

「優希ちゃんのか？」

「ああ、優希は今でこそアレだがあまり人と仲良くしようとしな
やつだから．．．教導もかねて仲良くしてほしくてな」

「．．．なあに言ってるのよ一騎くん？私は元よりそのつもりなん
だからね」

「そつか．．．じゃあよろしくな」

「うん よろしくね、優希ちゃん」

「．．．はいっ」

良かった、なんとか打ち解けられそうだな。そう思っていたときに、
肩に手を置くものがいた。シグナムである。

「では、殺し合い（試合）を始めようか」

「ああ、なんか当て字が違う気がしたが突っ込まないでおこう」

「が、頑張ってねっ（ガクガクブルブル）」

いやいや、なんで微妙に震えてるんですか。まあこの直後、俺はそ
の当て字があながち間違いないことを身を持って知るのだった。

「ゝ」

「どうしたんだ、はやて。そんなご機嫌に鼻唄唄って」

俺達はあの後食事の跡形付けがてら、アースラの食堂でのんびりしていた。

俺はというと、はやて、アリスと食器洗いをしている。なにが悲しくて男が食器洗いなんだか。紫苑曰く”意外性を突いた起用”らしい。

「そりゃあみんなで旅行は楽しいやんか？」

いや絶対嘘だ。一騎と話すのを心待ちにした目だ。思えば興味を引いたものにはとことん詰め寄るからなあ、こいつは。でなきゃあの日に俺に興味を抱くことはなかっただろうし、ある意味こいつが興味を持ったから今の俺がいる。だから一番感謝しなきゃならないのはこいつかも知れない。

「楽しそうだね、はやて」

「せや まあ同年代のもんなで行ければ一番ええんやろうけど、こればかりはなあ・・・」

「大丈夫だよ、はやて。はやてが帰ってきたら今度は残ったメンバーが休みだからその時は盛大に自慢しながら行ってくて」

「なんや今日は意地悪やな？」

それはお前が一騎に水の字な感じに見えるからだろ。アリスはツンデレでヤキモチ焼きだからな。

「．．．なんか失礼なこと考えた？京谷」
「気のせいだろ」

ってなんでこうも勘がいいやつばかりなんだ．．．ったく。とにかく手早に洗い物を片付けていく。

「．．．．．」

「って今度はなんだよ」

「いや．．．京谷くんほんまなんでも出来るなあって．．．」

「まったく男のクセに腹立つよね。一騎も料理作るのバカみたいに上手いし。こないだだってフランス料理フルコース作ったんだよ？」

「マジで！？俺それ初耳だぞ！？」

「うん、京谷とカルト、セレナが任務で出てたときに一騎が”あいつがいない内に美味しいもん食わせてやる”って」

ぐ．．．あいつ俺がいない間に．．．。なんか最近俺に対する態度に疑問を感じないわけではない。

「まあまあ、喧嘩するだけ仲ええゆうし．．．」

「いっつもなにかしらぶつかってるような気もするけどね。まあ一騎は作るだけ作ってまた厨房に籠ってたけど」

「ってどんだけバカにする気なんだ俺を」

「後で聞いたら”フランス料理大嫌いだからな”って言ってた」

食えもしないのに料理法身に付けるなよ。

「でも食わんのに作れるんやね。なんでやる？」

「それは気になるな」

アリスが出し惜しみする前に俺も知りたいと告げておく。アリスは

ツンデレ属性があるだけあって気まぐれだから、みんな知りたいと言っ霧囲気を作っておかないと絶対に聞き出せない。

「って京谷がなんで気になるのよ」

「そりゃあ気になるだろ!？」

「いやいや．．．一番近くにいたアンタが気づかないってどうなのよ」

ますます意味が分からない。俺が一番知っている？

「ほら、一騎の研修期間。みんなになかなか馴染めなくて書庫読み荒らしてたでしょ」

「ああー．．．あつたなあそんな時期」

一騎と優希がラウンスに入ってから研修期間、ずっと二人はみんなに馴染めなかった。研修期間の終わりにかけによやく馴染め出したのだが、それは割愛する。ともあれ、待機時間の間は2人して書庫に籠っていたのだ。たまに俺が様子見に行って話しかけたりもしたが全部無視された。腹立たしくなって、セレナ、紫苑と一緒に一騎が読んでる後ろに机を積んで派手にひっくり返すイタズラを敢行したが、やはり無視だった。今思えばその集中力が一騎の強さを物語っているなど今更ながら実感している。事実、俺が研修期間中に仕込んだ”斬魔術”を完璧にマスターし、更に自分のオリジナル剣術まで編み出した。特にあいつの”龍の咆哮”に似た技．．．あれの破壊力は最早．．．

「ってボヤツとしないでよ京谷!」

アリスに蹴りを入れられ我に返る。いかんいかん、つい考え込んだ。まあなんだかんだで皿洗いは終わってる。

って終わったなら蹴るなよ。

俺は手を拭きながらエプロンを外す。その後をはやてがにやにやし
ながら付いてきた。

「どうしたんだよ、はやて」

「さっき一騎くんのこと考えてたやろ」

「考えてねえ」

「私は分かるでえ？一騎くんの事話してるときどっか嬉しそうやも
ん」

「やめてくれ、気持ち悪い」

俺は手早く片付けると自分の執務室に向かうことにした。どちみち
仕事溜まつてることには変わらない。っと・・・

「そついやはやて、一騎に荷造りの事言ったのか？」

「ううん、言ってないよ。今から言いに行くところ」

「そついや模擬戦してるんだよな。ちよつと様子見るか？」

「せやね」

近くの休憩室に入り、端末を操作して一騎らがいる訓練室のモニタ
ーを開いた。そこに映し出されたのは、とても子供には見せられな
いものだった。

- v i e w k a z u k i -

ギインッ

「．．．！！！」

「くっ．．．！！！」

これで何度目の鏑迫り合いだろうか。というかどれだけの時間が経ったのかすら分らない。分かるのはお互いが非常に消耗していることだ。

「はあ．．．はあ．．．なかなかやるな．．．一騎．．．」
「シグナムこそ．．．」

そして再び烈火を纏わせたレヴァンティンで斬りかかってくる。すでに俺は握っていた刀を黒龍に切り替えている。それを受け、そのまま切り抜ける。

「甘い！！！」

すかさず返し刃。すぐさま体を反転させて刀を縦にして受けた。

「さすがだな、一騎。だがそこまで無茶な行動は無駄に体力を使うだけだぞ」

「分かってる．．．さ！！！」

刹那の隙を突いて一気に離れる。そして刀に魔力を込めた。

「閃魔．．．飛光撃ッ！！！」

稲妻に似た、魔力の光刃がシグナムに直撃し爆発した。しかしその煙の中からシグナムが現れ、剣を向けた。

「吼える蛇 丸!!」

「絶対ネタだよな!?!」

こいつはシュランゲモード・・・レヴァンティンが分離し、そのまま降り下ろしてきた。

「くっ」

さすがに初めて戦うタイプだ、軌道を読めなければ意味がない。

「そおら餌だ!!」

「だからネタだよな!?!」

そのまま右薙ぎに振り払ってくる。攻撃する度に某パイナップル頭の赤髪死神の真似してるのは気のせいじゃないだろう。

「逃げているだけでは勝てんぞ!!」

そこで一旦戻し、再びレヴァンティンを伸ばしてくる。俺は右に体を反らしてかわし、そのまま突貫する。

「ちっ」

シグナムはすぐさまレヴァンティンを戻し、袈裟懸けの一撃を受け流し、さらにその力を利用して反撃に転じた。さすがに俺は避けられず、右脚を斬られる。もちろん非殺傷設定なので体に傷はつかない。

俺はそのまま後ろに下がり、間合いをとる。シグナムも少し間合いを取った。

「ふむ、そろそろ魔力の限界だな．．．」

シグナムが呟く。たしかにこちらはかなり少ないし、おそらく次がラストショットになるだろう。

「では、己が叩き込める最高の一撃を斬り結ばせようではないか」
「．．．ああ」

俺はそう言つて刀を構え、魔力を斬る力に変換し、そして収束させた。シグナムもカートリッジをひとつ炸裂させ、レヴァンティンに焰を纏わせる。

「破魔．．．」

「紫電．．．」

「竜王刃ッ！！」 「一閃ッ！！」

2つの巨大な魔力が凝縮されたお互いの一閃が真つ正面から衝突する。

「ぐっ．．．！！！」

「はああああ！！！」

俺は渾身の力でシグナムを払い飛ばそうとする。だが、シグナムは口の端をつり上げた。

「まだ青いな」

そう言うと竜王刃を同じ力で流し、そのまま俺は返し刃で弾き飛ばされてしまった。

「ぐあつ!？」

訓練室の壁に思いきり叩きつけられる。すぐにリカバリーしようと竜王刃の二射目に入ろうとしたが、魔力が収束が出来なくなっていた。

「魔力エンプティだな。強引な切り返しや瞬間的な高速機動の使いすぎだ」

シグナムはそう言いながら、レヴァンティンの切っ先を俺に向けた。もちろん為す術がないので降参である。

「はは．．．まだまだ俺も甘いな」

「いやいや、最後の一刀は良かったぞ？まあ甘いところだらけだが」
「厳しいな」

愛想笑いを浮かべながら、訓練室を出て優希となのはの元に向かう。

「戻ったぞー、ってなんでふたりしてがたがた震えてるのさ」

「だ．．．だってだって．．．」

「？」

「なんなのアレ!？お兄ちゃん達よく生きてられるね!？」

「あ、ああー．．．」

シグナムが成程といったように声をあげる。どうやらあの戦闘が恐怖対象に映ったらしい。

「いやいや、優希たちもそれなりな戦闘をしていたぞ？」

「だからって普通に吹っ飛ぶ戦闘ってどうなのよ!？」

優希が涙目になって反論する。

「あつはっはっ、可愛いな優希は（なでなで）」

「シグナムさん撫でて誤魔化さないでくださいっ」

なのはあはは．．．と愛想笑いを浮かべながら、シグナムと優希のやりとりを見ていた。

「あ、ちょうど終わったみたいなんやね」

「あ、はやてちゃん。どうかしたの？」

「一騎くんに用が．．．って怪我凄いな！？シグナムも！！」

「すみません、つい模擬戦に熱が入って」

「そっかあ。なのはちゃんや優希ちゃん、一騎くんもお疲れさまや」

はやてはあつはっはっと笑いながら俺たちの健闘を称える。やはり社交的なんだなと俺は思った。

「それで主はやて。一騎に用事とは？」

「ああ、せやったな」

そういつてポケットのなかをこそこそ漁るはやて。そしてひときれの紙を俺に手渡してきた。見ると、洗面器具や下着三日分などと書かれている。

「これは？」

「今回の盆休み旅行に必要なブツやな」

「なるほど、これを俺と優希の用意すればいいのか？」

「自分のだけでええよ？さすがに女の子の荷造りするのは男の子がするのはどうやるか」

「確かになあ．．．」

「ねえ、はやてさん」

「ん？なんや優希ちゃん」

優希がはやてに質問を投げ掛ける。なんだろう？

「持参物にWiiがあるけど」

「それは旅館でスマブラのガチバトルするためや」

「いやいやいやいや、なに著作権に関わるもの引っ張り出してるんだよ。」

「ちなみに負けたやつ罰ゲームな」

「やつぱりやるのかよ」

「はやてちゃんらしいねえ・・・」

しかし罰ゲームか・・・。ちょっと期待するな、うん。

「まあどんな罰ゲームにするかはまだ秘密な」

「だね、お楽しみは最後にだよ」

「そうか・・・」

「さ、体も汚れていますし早めに帰りましょう」

「せやな」

「だね」

シグナムの一言でみんながいる食堂に歩を向けた。その後は幾分か雑談した後、各々の隊舎へ転送帰還しオフシフトとなった。

日が進み、ここは俺と希来の部屋。二人して明日から行く九州旅行

に持って行く荷物の確認をしていた。

「いやあ、明日から旅行だね。楽しみだなあ・・・」

「そりゃあなにも考えなくて良いならな」

「あはは・・・一騎は皆のまとめ役やらなきゃならないもんね」

「・・・まったく京谷さんのやつ・・・」

ぶつくさ言いながらも、荷物を纏めていく。

「そーいや、魔力エンプティ大丈夫なの？」

寝る前なので、大人モードになっているアルルが問いかける。大小変化自在ならそのまま居てくれたらいいのにとか思わないでもない。

「ああ・・・明日要らんことしなきゃ大丈夫だろ」

「だよねえ。ま、んなこと言ってたら面倒事に巻き込まれるんだけど」

「止めてくれ、ゾツとしない」

「あはは・・・」

そう、こいつが嫌な予見をする度にバツチり当ててきている。正直なところなにか大きいイベントがある前の日はとっとと眠らせた方が良いのだけだ。

「でも、楽しみだよな」

「・・・ああ、そりゃあ年が近いやつら・・・それも女の子と一緒に行く旅行だ。楽しみじゃないはずない」

そりゃあ曲がりなりに男の子なんだから、そっちの事も少しくらい

は期待してしまう。まあ、正直なところ期待するだけ無駄だと思っているため、今回の旅行はうんと羽を伸ばすために使おう。

「．．．よし、これで準備完了だな」

「お疲れさま」

「じゃあ寝る？二人とも」

「うん」

「ああ、万が一があるから早めに寝よう」

荷造りも終えたため、手早く寝る支度を整えて床についた。アルルは俺の隣で大人モードで寝ている。

だからやめなさいと。

ま．．．明日からの四日間が有意義になればいいなと思いながら、意識を闇に沈めた。

R e w r i t e 3 : 魔王VS妹 俺VS烈火の騎士（後書き）

一騎「なかなかいい感じだな」

作者「ここから急転直下話が進みだすんだけど」

シオン「作者さん・・・ねたばれダメ」

作者「おっと、すまん。というか・・・頭悪いな私」

京谷「いまさらか」

作者「あとで覚えてろよ・・・さて、読んでくれた方には無上の感謝を」

一騎「ここまで読んでくれた人は次も読んでくだされば幸いだ」

作者オリジナルキャラ設定

京谷「いきなりかよ。まあいいけど」

作者「や、紹介はしないとだよね？」

一騎「だいたいインスピレーションでわかるだろ。いちいち話すこともないと思うがな？」

命「えー……」

作者「まあ。今のところ京谷の能力の異常さが際立ってますけど、そのところ主人公の一騎さんはどのように？」

一騎「これはキャラへのインタビューなのか？」

作者「ただの文字稼ぎ」

一騎「死ね」

命「わたしはそこは気にしないかな。だって敵に勝てばいい話だし」

シオン「そんな簡単で……ええんかい？（びしっ）」

作者「まあいいや。じゃあ一騎の設定からチエケラ！」

名前：桜井 一騎

身長：164

体重：58

魔力ランク：古代ベルカ式空戦S

デバイス：アルテマウェポンⅡ？（ドゥーエ）＋？？？

武器は黒身の刀『黒龍』&白身の刀『白龍』

性格：冷静なように見えてけっこう熱血型。カッとなってもそれなりには理性的。

見た目：ガンダムWのヒロの目をそこそこ穏和にした感じ。趣味は自爆なんてことはない。

一騎「？？？つてなんだよ。つかいきなりS+つてのもたいがいチートじゃないか」

作者「シグナムに負けたくせに。というかテメーが一番ビジュアル決まらなかったんだよ。ざけんなよ畜生が」

京谷「つか一人で2個のデバイス持てたか？・・・まあはやてがそうだが」

作者「ネタバレになるので言いません！！次ッ」

名前：月城 命

身長：155

体重：45

魔力ランク：近代ベルカ式陸戦AA+

デバイス：槍型アームドデバイス オベリスク

性格：明るくはつらつ。図太い性格。

見た目：はやての髪型に長いテールを付け加えたような感じ。シングルテール。横髪ははやてより長い。

京谷「けっこうまんまだな」

作者「ちなみに原案時にはおとなしい女の子の設定だったんだけどね……。いったい何があったのか。次！」

名前：星川きらら

身長：130

体重：25

魔力ランク：古代ベルカ式陸戦A+

デバイス：グローブ型アームデバイス デュナミスケイル？

性格：男勝りでモノをはつきりと言う。 実は繊細？

見た目：魔法少女きららとさららのきららをもつ少し幼くした感じ。

名前：星川さらら

身長：130

体重：26

魔力ランク：ミッドチルタ式空戦A+

デバイス：弓型インテリジェントデバイス テーレウェイン&ビュロン？

性格：物静かでおとなしい女の子。しかし切れると怖い。

見た目：魔法少女きららとさららのさららを少し幼くした感じ。

作者「現時点では数少ない幼女姉妹。これからいろいろ楽しみですな」

京谷「ロリコンか!!」

一騎「変態だな・・・」

シオン「そういえばなれ初めとかどうなんでしょう?」

作者「本編が方着いたらやりますよ。次」

名前：シオン・E・グラキエース

身長：168

体重：53

魔力ランク：ミッドチルタ式空戦S+

デバイス：杖型インテリジェントデバイス アイシクルエッジ

性格：物静かな大人の女性。メンバー中一番精神年齢が高い。

見た目：ボカ口の弱音ハク。

シオン「・・・なぜかしら。ものすごくバカにされた気分・・・」

京谷「うおっ！？なんかこのあたり寒くなってるないか！？」

一騎「オーバードライブ暴走が始まってんぞ！？」

作者「落ち着けシオン！！とりあえず連続で次！！」

名前：羽田 希来

身長：159

体重：53

魔力ランク：近代ベルカ式空戦AA+

デバイス：剣型アームドデバイス アロンドイト

性格：心優しい性格。戦いや日常でもそれは変わらず。でも芯はしっかりしている。

見た目：ガンダムSEEDのキラ。

名前：桜井 優希

身長：147

体重：40

魔力ランク：ベルカ寄りハイブリッド式空戦AAA

デバイス：双剣型アームデバイス ルナティック&サンライズ

性格：すこしあまえたがりな性格。明るいはうだが弱気なところも。

見た目：そらのおとしもののイカロスの髪の色を明るい茶髪にして瞳はたれ目ではなくふつう。

京谷「こんなものか」

一騎「京谷以下お借りしたキャラについては割愛させていただきます。ご了承ください」

優希「でもこれってそこそこはぶいているよね？」

作者「よく気づいたね。だけど、ネタばれになるから私は絶対言わないから！」

一騎「まあ当たり前だな」

シオン「・・・共演依頼とか来たら面白そう・・・」

作者「気がはやいな!？」

希来「あはは・・・じゃあ今日はこの辺で。更新、楽しみにしてくださいね」

R e w r i t e 4 : 最強の魔導師(前書き)

命「おお？なんか意味深なタイトルだね？」

作者「ここからが本番だよ」

一騎「今までののはつかみ・・・と」

作者「そゆこと ではお楽しみあれ！」

R e w r i t e 4 : 最強の魔導師

そして朝。ミッドチルタの国際空港に俺と優希、希来、セレナ、そして命は来ていた。

「おっせえな」

「一騎が早すぎるんだよ」

命が目を擦りながら答える。確かに2時間前に来たから早いのだ。なんでこんなに早く来たかというところ。

「「んーまーいーっ!!」」

国際空港限定パンを食いたくて仕方がない優希とセレナのためにわざわざ早く来たのだ。まあ美味しそうに食べてくれるので、ちょっと嬉しい部分がある。

「一騎ってなんだかんだで可愛い女の子に甘いよね」

「そうかあ？」

「うん、ぶっきらぼうだけど思いやり持って行動できてると思うよ」

「おかしいなあ！？私可愛いのに優しされた覚えがないなあ！？」

「なんでお前に優しせないかんだ」

「ひど！？」

「あはは・・・」

命の雄叫びを軽くスルーして携帯で時間を確認する。ふむ、後20分くらいか？そう思った頃、向こうから見覚えのあるシルエットが近づいてきた。エース三人娘とリインフォース？である。

「あ、みんなおるやん。おっはよ〜」

「おはようです」

「おはよう」

「お．．．おはよう、一騎にみんな．．．」

朝から元気がいいものである。こちら各々に挨拶を返した。

「いやあはやいなあ」

「まあ、あそこの天然娘がここの”スペシャルセレクト改”を食べたい言うから仕方なくな」

「なんか凄そうな名前つけとったら売れるだろ的な意図が丸見えやね」

「実際美味いみたいだぞ」

「一騎くんら食うとらへんやん」

「俺らは白飯派だからな」

「えー」

とまあ、そんな他愛のない会話をしながら待機時間を過ごす。さて、そろそろ時間だな。

「んじゃ、機内^{なか}行くぞ」

「「「はあーい」」」

俺を先頭に入場ゲートへ向かう。ミッドチルタ国際空港は無駄に広いため、いちいち気をかけながら歩かねばすぐに迷子になりかねない。なので、俺は皆の歩調に出来るだけ合わせて歩くことを心がけた。

「ほえー．．．」

「ん？どうかしたの、優希ちゃん」

辺りを見回しながら歩く優希にセレナが話しかける。

「いえ．．．こんな大きな空港、私初めて来たんです。ですから色々初体験で」

「初体験．．．エロい響きやなあ．．．」

「はわっ!？」

「ちよつとエロい方向持つてかないでよはやて!」

「そ、そうだよっ!そ．．．そういうのは．．．ねっ、夜に．．．」

「は?なにゆうてんねん?」

「ええ!?そつちじゃなかったの!？」

「そつちもなに勘違い．．．はっはーん．．．フェイトちゃんエロいなあ、一騎くんとくんずほぐれつなこと考えてんねや?」

「だから違うよお．．．／／」

「あっはっはっ、分かつてるでえ耳年増ちゃん」

「(ポヒュー／／)」

「ん、じゃ搭乗券出せよ．．．ってフェイトお前無茶苦茶顔が赤いぞ!？」

フェイトの顔が耳まで朱色に染まっていた。俺が先導している間何があったというんだ!？」

「あ．．．赤くないもん．．．／／／」

「そうか、なら俺が手鏡見せてやるから」

俺がどこからともなく出した手鏡を覗き込むフェイト。

「林檎．．．みたい．．．／／／」

「ん、分かったならとりあえずゲート潜るぞ、はやても」

「う、うん」

「りょーかーいー」

そうして異物チェックのゲートを潜って改札。次元航行機の機内に入ると既にセレナらが席に座っていた。

「おつそいよ三人とも．．．」

「悪いな、はやてがフェイトを弄りゃー」一騎くんとフェイトがいちやいちやしてたからなあ（ニヤニヤ）って被せんな！！」

「嘘．．．私がいながら浮気だなんて．．．」

「俺と命はいつデキたんだ！？」

「うわあー一騎くんフェイトちゃんじゃ飽き足らず命ちゃんも美味しくいただいてんねんなあ（ニヤニヤ）」

「え．．．私、一騎に．．．／／／」

「いただいてねえよ！あとフェイトも悪乗りするな！！」

「あつはつはつ、なんや一騎くんツツコミ凄いエエなあ」

「だよね、はやてちゃん」

「ああ！？一騎飛び降りようとしたらダメだよ！？」

離してくれ希来！！俺はこいつらの面倒を四日間見れる気がしないんだ！！

「お兄ちゃんはクールな時とそうでないときの差が凄いんだよ」

「あー、だよねえ。特に京谷とアリス相手の時はキャラ壊れやすいかも」

席では優希とセレナが冷静に分析を行っていた。それはそれで妙に腹立つ。

「一騎に．．．／／／」

まだ引つ張るかフェイト。

正直な話、こんな連中だけでよかったと思う。理由？そりゃ・・・
めんどくさいやつが円卓の騎士にはいっぱいいるからな。

まあてんやわんやあったが空港を出ると、みんなして爆睡した。
俺を除いてみんな寝てしまったので全くすることがない。しょうがないので今回向かう場所について説明しておこう。

これから5時間の旅を経て向かうのは、なのはの生地である管理外
世界地球の日本。その中の九州地方と呼ばれる島国の大分という場
所に最初向かう。

初日の日程は空港に降りてからまずはバスで旅館へ。それから地獄
巡りをして旅館に戻って終了、といった感じだ。まあありきたりな
観光名所巡りだが、こういう旅行も悪くはない。まあ今までの旅が
京谷さんの気まぐれでとんでもない世界に行ったり、あてのない放
浪だったりしたのもあるのだが。

『これより、本機は安定航行に入ります。シートベルトは・・・』

・・・と、どうやら安定航行に入ったようだ。みんな寝てしまっ
たので、しょうがなくベルトを外して売店へ向かう。飛行機と違っ
て本当に揺れがないため、わざわざ売り子が歩いてくることがない
のだ。

「いらっしやいませ、ご注文は？」

「鮭おにぎり3つと伊右衛門で」

「かしこまりました、小計600円になります」

代金を支払い、焼津鮭のおにぎり3つと某飲料会社の伊右衛門を持って自席に戻る。うん、やはりおにぎりは鮭に限るな。

席に座り、包みを外して一口頬張る。パリッとした焼きのりとふっくら炊きの白飯。そして、脂の乗った鮭切り身のコーボレーションは絶妙な味を醸し出す。程なく食べ終えたところで、俺は誰かの視線に気づく。ちょうど寝起きのセレナである。

「じー．．．」

どちらかというと、俺ではなくて俺の手中にある鮭おにぎりを注視しているようだ。思えばこいつは大飯食らいだったな。

「お腹空いたなあ」

と、猫撫で声でおねだりするセレナ。こいつは間違いなく俺のおにぎりが欲しいがための行動だ。

「自分で買ってこいよ」

「お腹空いたなあ．．．」

「だから買ってこいつて。たかが150円くらいちょいだけのちょいだろ」

「くれないやフェイトを美味しくいただいたって噂流すから」

「．．．わかったよ」

くっそなんてたかがおにぎりくらいで人生左右されなきゃならないんだ！？新入りだからかラウンズ内からの弄られ率がハンパない気がする。

「うまうま」

俺からおにぎりを奪った本人は美味しそうにそれを食していた。満面の笑顔で幸せそうに食べるもんだから、怒る気にもなれなくなる。

「しかし、朝スペシャルセレクト改を食つときながらまだ食つか」

「一騎も私が朝バリバリ食べるのは知ってるでしょ？私、召喚士とは言え、前衛向きの能力だから」

俺はああー、という風に頷いた。そう、忘れがちだがこいつは氷の三龍帝とかいう龍召喚を使いこなすくせに、短槍を扱う変則の魔導師だ。本来なら後衛型のはずなんだが、後衛型の重要スキルの射撃は威力はあるが誘導が下手で、攻撃補助・防御に至ってはそこら辺の後衛型魔導師と大差ない。しかし近接戦闘ともなればきららを圧倒し、命と張り合える実力がある。このアンバランスな能力を持ったのがこのセレナ・チェリカールと言う魔導師なのだ。

「そついやさ」

セレナが思い出したように口を開く。

「一騎のデバイスってなんなの？私、全然見た記憶がないんだけど」

「俺の？アルルだよ」

「ユニゾンデバイスじゃなくて、普通の。アームドかインテリジェントとか」

「ああー．．．ねえよ」

「え？」

「俺の黒龍と白龍は、一応魔力媒体の適正があるからな」

俺の刀は特定の工程を経た、非常に特殊な造りの刀である。本来なら全身黒、全身白なんていう都合のいい刀は質量兵器としてのそれで作れるはずはないので、必然的に古代遺産扱いされる。しかし、

こうして自分の武器として保有できているのは京谷さんのお陰なので、そのあたりは感謝している。

「ふうん．．．純白と純黒の刀かぁ。黒龍だけ持ってたら一騎は黒ずくめの男と大差ないわよね」

「．．．言っな」

「ふふ．．．でもありがとね、おにぎり。美味しかったよ」

そう言っ、にこつと笑うセレナ。天真爛漫組ならではの無邪気な笑顔である。俺はそれをぼんやり眺めながら、ボトルのキャップを開ける。

「ありゃ、お茶も買ってたんだ？私持ってきたのに」

そう言ってセレナはバッグから生茶を出す。確かに俺が好きな類いの茶だ。

「なら言えよ．．．まあ、寝てたから言えないだろうけど」

伊右衛門を口に含みながら言っ。すると、セレナはまったくすすり笑い出した。

「なんかおかしいか？」

「別に、後先考えないのは一騎らしいなっ」

「はぁ？」

そう言ってまったくすすり笑い出す。まったく意味がわからないな。

「旅行、全力で楽しもうね」

「．．．ああ」

それから二人してくすくす笑い出してしまった。
だが、これからの旅行で惨劇が起こることはまだ俺達は欠片ほども
理解していなかった。

「んーっ、はあっ」

空港エントランスから出た瞬間、命はんーっと背伸びをした。
ちなみに今の時間は、俺がセレナからおにぎりをぶんどられて三時
間ほどが経過したあたりである。五時間という長旅のためか、みん
なして屈伸や伸びを延々繰り返していた。

「やっぱり長旅は体に堪えるねえ．．．」

肩のストレッチをしながら、まいったという風に希来が言う。

「まったくだ．．．なっ」

俺も前屈をしながら答える。正直、エントランス前でひたすらスト
レッチしてる集団は傍目から見たらただの変質者だろう。

一足早く終えたはやてらがちよつと困った顔をしながら呟く。

「そろそろ移動せえへん？」

「ん、そうだな．．．」

「あつちにバス停あるよ」

優希が指し示す先にはバスがあつた。．．．って！！

「急げお前ら！！あれ別府行きのやつだ！！」

「ふ、ふええ！？」

「みんな行くよ！」

「え、あ、ちょ！？」

俺の掛け声で、全員で荷物を抱えて全力で走り出す。き、キツイ・
・！！

「まもなく発車しまーす」

つて出る寸前かよ！？万事休すか！？

「任せて」

俺の横で命が呟く。それを聞いて俺が命の声がした方を見たときには、命の姿はすでにバス停にあった。

『ちよつとだけ待ってもらえますか？』

『ちょ！？あなたいつの間に』

『きにしちゃメッ』

『いやでも唐突に『メッ！！』は、はいい！！』

命のお陰でバスは待つてくれるようだ。俺は無言で命に近づく。

「えへへー、待つてくれるって痛ったあああああ！！？」

「てめえ魔法とかが認知されてない世界で普通に”響^{ソニード}転”使ってん
じゃねえよ！！」

「まあまあ、一騎くんもそんなに怒らなくていいじゃん。結果的には命ちゃんのおかげで間に合ったんだから」

「なのは・・・お前事の重大さがわかってねえな」

天才と呼ばれる連中にまともな奴はいないのかと思うと、ゾツとする。

「以後慎めよ・・・ったく。ただでさえお前は色々ごつちやな奴なんだから」

「そりやおま、召喚士の母と吸血鬼の父を持つたらこんなアンポンが生まれるでしょうに」

命はなにを今更、といった風に反論する。

命は吸血鬼の父、召喚士の母を親に持つ稀なハーフの少女だ。しかし、命父は吸血鬼の亜種であるため、あまり糧として血液を必要としない。それでも一応必要なため、たまに俺に血をせがんでくるのでたまに吸わせているが。

ともあれ命は人より身体能力が高いため、その利を生かし竜騎士として技を磨き続けている。召喚士としての適正もあるらしいが、本人曰く「対話と同調がだるいから多分使わない」とのこと。

「ったくなんでもありだな、お前は」

「チートが前提の主人公キアラには言われたくないよ（笑）」

バスに乗り込みながら、他愛のない口論を命とする。こんなのをよく飽きもせず毎日続けられるなと我ながら思う。そこへセレナが突然爆弾を投下する。

「というかさ、命って器用貧乏って言葉が似合うよね」

「うつ・・・」

命がそれを言うな、といった恨めしそうな顔でセレナをみやる。希

来がそこに口を挟む。

「そうだよねえ、料理や裁縫、なんでも出来るけど特別これは．．．
つてのはないよね」

「希来まで!？」

「そうだよ、料理ならシオン。裁縫ならさらら。掃除洗濯はアリス
に軍配が上がるよ」

「さしずめジムカスタムちうとこやな」

「．．．．．」

はやての一言が完全にとどめを刺した。命はずーん、とつつむいて
しまう。それを必死になのはがフオローする。

「で、でもさ!なんでも出来るってのはいいことだよ!？ほら、巨
人のキムタクみたいなさ!!」

「野球選手と比べられても．．．」

だが誤爆。なのはの慰めは余計に命をしゅんとさせた。俺としては
そんな野球選手を知っていたなのはに尊敬の拍手を送りたい。

「それでさ．．．これはどこ向かってるの？」

気を取り直した命が聞いてくる。俺は他の一般人に見えないように
情報端末を開いた。慣れた手つきでそれを操作し、これからの日程
表のフォルダを展開する。

「まずは旅館の悠水亭に行って荷物下ろし。んで、近場のレンタル
サイクルで自転車を借りる。んなら地獄巡りして今日のアレは終わ

りだな。まあ．．．時間的な余裕はないから三つ回れたらいい方が」
「あ、あの青い湯が沸いてるところは行くんだよね!？」

優希が食いついてくる。どうやら普段見慣れないものには興味津津らしい。

「ああ、んで間欠泉のやつと湯気が凄いとこはいくぞ」
「えへへ、楽しみだなあ」

目を輝かせる優希。キラキラトーンが背景に見えるのは気のせいでありたい。

「で? レンタルサイクルまでは?」

「一時間ちよいか」

「じゃあさ、私と一騎とはやてとフェイトと希来で古今東西しない?」

セレナが暇潰しにそれを提案する。古今東西はお題に沿った名詞を言っていくゲームだ。雑学や記憶力を試す遊びだな。

「罰ゲームは?」

ちよつと乗り気で聞いてくる希来。

「負けたら猫口調ね。男はメイドで。それじゃあ行くよ」

まてまてまてまてって始まりやがった!!

「セレナから始まるっ」 セレナのコール
「『イエーツ!』『』『俺以外の合いの手』」

「古今東西っ」

「「イエーツ!」」

「【は】から始まる言葉っ」

”は”からか。さて・・・

パンパン（手拍子） セレナの番

「ハンドガン」

パンパン（手拍子） 希来の番

「えと・・・ハリウッド!」

パンパン（手拍子） 俺の番

「handsonic」

「一騎の負けー」

「なんでだよ!？」

「一応”は”から始まつてるじゃないか!! 某天使ちゃんの武器だぞ!？」

「著作権に関わるものはチョメで」

「この小説の根底を覆さなきゃいけない発言だぞオイ」

セレナから世界的前提を壊しかねない発言が飛び出す。少し自重すべきところである。

「まあ約束だからメイドね」

「くっ、わか・・・分かりました、お嬢様」

く．．．、屈辱だ．．．！！

「じゃあネクスト。負けたやつは語尾にゃんよね。それじゃあ行くよ」

また著作権に引っ掛かりそうな罰ゲームである。それはネタじゃないかと思ってしまう。

「セレナから始まるっ」

「「イエーツ！」」

「古今東西っ！」

「「イエーツ！」」

「AKB48の歌っ」

．．．は？

パンパン セレナの番

「RIVER！」

パンパン はやての番

「ヘビーローテーション」

パンパン フェイトの番

「私の負け．．．」

「ひとつも思い付かへんの!？」

「国民的アイドルグループだよ!？」

全く思い浮かばなかったらしいフェイト。仲間がいてよかった・・・マジで。メイドで某戦線の野球少年口調は鬼畜だ。

「で、でも他の人も思い付かないよね・・・？」

フェイトは周りの皆に同意を求める。

「僕はわからないかな・・・」

「興味がありませんから」(俺

「お兄ちゃんが聴いてないから私も聴いてない」

「私は家族が聴いてるみたいだから聴いてるよ」

「よかった・・・聴いてない人いたよ」

胸を撫で下ろすフェイト。が、安息は束の間だった。

「じゃあ語尾にやんよね」

「は、はいやんよ・・・／＼」

正直に言おう、似合わない。

「って、セレナがやったら難しいのばっかしが出てこないやんよ！？」

フェイトがセレナに反論する。が、セレナはしれっと言い負かしてきた。

「単なる勉強不足でしょ？」

「けれど地球の文化なんてなのはや一騎くらいしかわからないよ！？」

「いや、出身の私もなかなか厳しいんだけど」
「俺は興味がない」

「というか、娯楽がなかったしな。」プラント」は。

そんなこんなで古今東西は続き、結局セレナが圧勝で終わった。フ
イトに至っては語尾にやんよ、甘えんぼ口調、猫耳力チューシャ、
仕舞いにはセレナが何故か用意していたパールルージュを塗らされ
た。

「．．．」

「どうしたの、フイト？」

「ふえ！？な、なんでもないよっ」

パールルージュはフイト的に受けがよかったようだ。

で、レンタサイクルを經由して現在は海地獄に向かっているところ
だ。海地獄は、1200年前の鶴見岳の爆発によって出来たとされ
ている。湯が青いが、摂氏98もあるのももちろん入ろうものな
ら大火傷だが。入った瞬間、目の前の青い色をした湯を見て、優希
は感嘆の声をあげる。

「ふわぁ．．．すごく青い．．．」

「凄いね．．．本当に海みたいだよ」

セレナやはやてらもこれにはびっくりなようであじまじとコバルト
ブルーのそれを眺め続ける。

「ちなみにそれほぼ沸騰した湯と同じ温度だからな」
「うそ！？」

「だからさわんなって書いてるんだろ」

そう言って俺は海地獄について記された看板を指し示した。それを一別してなのはは呟く。

「．．．なんで青いんだろう．．．」

「さあ．．．」

さすがにそこまでは俺は預かり知らない。そしてふと、俺は竿に吊るされたソレを見つける。

「なんだ．．．?」

「ん?どれや」

はやてが俺の隣に来て、同じく目を凝らす。そして程なく気づいたようで、首をかしげた。

「ざるのなかに．．．卵が入っとるみたいやね」

「蒸し焼きの類いか?」

「かもなあ．．．湯気と水温が凄いさかい、それ使っとるんやろね」

俺はああなるほど、と思った。有効活用とかお土産物確保的なアレなのだろう。

「せつかくだし食うか?」

「え、ええの?」

「たまにはこういうのもありだろ。おい、お前ら卵いるか?」

今だ興味津々で海地獄を眺め続ける優希たちに声をかける。

「うんー、いるー!!」

「りょーかい。んじゃ、買ってくるな」
「わかったやよ」

俺はそう告げてお土産屋に足を運び、人数分の卵を確保した。そしてみんなで美味しく戴いていた頃、管理局で警戒すべき事態が起きたことは未だ知るよしがなかった。

- view kyo ya -

「飛天御剣流・・・九頭龍閃ッ」

ここは俺やラウンズが短期的に能力強化をするためにある、『修練の門』。無論俺が作った場所だ。

内部で”ゲートオブバビロン王の財宝”を使い、氷輪丸を出していた俺は見よう見まねでるる剣の九頭龍閃を放つ。使う度に思うが理屈さえ分かっていたれば一応撃てるようになるようだ。この能力をくれた死神には感謝しなきゃな。

「きょーやー、書類整理終わったよー」

フィオネの呼び掛けに気づいて、俺は声がした方を向く。

「ああ、わかった」

「ってまた訓練？ただでさえ強いのにまだ強くなるんだ？」

「そりゃあ準備しといて損はないだろ」

修練の門を出て、汗を拭きながらシャワー室に向かう。あそこで訓練すると、ガンガン強くなるのが解る。あの場所は、時間の流れが1日がこちらの世界において一年に相当する。つまり一時間では半月分の鍛練を積んだことになるのだ。まあ隠りすぎはちよつとまずいかな。

「ヴオオオイ！！京谷あ！！」

突然の怒鳴り声に俺はつい肩をすくませる。まあこんな怒鳴り方をするのは一人しかない。

「どうしたんだよ、カルト」

「出向中の紫苑とシオンから緊急通信だ」

「紫苑とシオンが？」

ちなみに読みは同じ”しおん”だから、二人が固まって居るときに呼び掛けると両方反応する。かと言って階級つけたら紫苑がえー、といった顔をするから余計困る。

「分かった、すぐ行く」

俺は手早く制服を羽織って、端末で紫苑らと通信を繋ぐ。すると、少し焦りの顔を浮かべたシオンが応答した。

『京谷ですか？』

「ああ、どうした通信なんざ」

『ええ、紫苑が巨大な魔力反応を感知して向かったのですが・・・』

「やられたのか！？」

悪い未来を想像し、語気が荒くなる俺。しかしシオンは首を振る。

『いえ、戻ってきたには戻ってきたのですが・・・紫苑が手紙を預かっていたみたいで』

そう言つて、懷から一枚の紙切れを取り出す。確かに俺の二つ名”神帝”宛になっている。

「内容は」

『”今夜、この世界の西の森で貴方を待つ”・・・だそうです”果たし状か。京谷に挑むなんざあ、頭イカれてやがるな”

カルトは鼻で笑う。だが、俺は少し引つ掛かるものを感じる。なぜわざわざこうして経由させて伝えなきゃならなかったのか。

「なあ、紫苑から受け取ったときなんかおかしいところなかったか？」

『おかしいところ・・・ですか？』

「ああ、些細なことでもいいんだ。何かないか」

シオンは暫し考える。やはり思い当たる節があつたようであ、そうだという風の手をぼん、と合わせた。

『何か操られていた感がありましたね。手紙も受け取ったはずなのにいつの間にか持っていた的な』

俺の予感が的中する。何者かに紫苑は手紙を渡すように仕向けられた。ラウンスで四番目に強い彼女が操られるとなると、非常に高ランクな魔力を有していることになる。

が、やはりもうひとつ気がかりなことがあつた。

「・・・どうして無傷で返されたんだ？」

俺はある意味管理局でやりたい放題なため、上層部からは畏怖の対象となっている。

脅しやらなんやらなら、もう少し卑劣な手を使ってもいいはず。もしくは俺自身だけに牙を剥いていることになるのか？

「・・・とにかく、俺は向かう。フィオネ、準備だ」
オールライト
「了解」

フィオネはすぐに俺がいつも携行するものを転送して準備した。

「勝てんのか、京谷」

「はっ、この程度勝てなきゃ”神帝”を名乗る義理はねえよ」

そう言っで自分自身で転送魔法を使い、紫苑らがいる管理世界に飛んだ。

俺が飛んだ先には紫苑、シオン二人ともがいた。俺を目測するや否や、紫苑は近づいてきた。

「京谷か」

「ああ、まさか操られていたなんてな」

「うむ・・・儼としたことが手玉に取られての。ああ、変なことはされておらぬから大丈夫じゃ」

紫苑はしてやられた、といった表情で自分の失態を悔やんでいた。

「そついや、反応時の推定魔力はいくらだったんだ？」

「・・・聞いて驚くでないぞ」

紫苑はそう前置きし、一拍置いて告げた。

「・・・EXじゃ」

「！！」

魔力ランクEX。際限がない量の魔力を保持し、またそれを意のままに操る戦闘技術を有する魔導師が名乗ることを許される最強の証。それを持つものが、今この世界に存在している。

「実力は少なくとも京谷と同等と見てよいじやろ。儂が接触した限りでは無法者ではないように思うが、油断は決してするな」

真剣な表情で、真っ直ぐ俺を見て忠告する。

俺の胸中に一抹の不安がよぎる。しかし、直ぐにそれは掻き消された。

エマージェンシー

『緊急事態、緊急事態！！西部の森に魔力反応あり！！推定ランク、

EX！！繰り返します』

「・・・来やがったか！！行ってくる！！」

「あ、京谷！！」

「待つんじゃない！」

フィオネと紫苑の制止を振り切り、端末で反応地点を検索しながら基地を飛び出す。

反応は西部の森から動く気配がない。恐らく待っているのだろう。俺は全速力でその場所に向かった。

俺が降りれる場所を見つけ、降り立つとそこには楡の木の森が広がっていた。元々やたらでかい木な上、すでに夜なので無駄に迫力がある。いつ襲われてもいいように、左手には王の財宝で呼び出した”千本桜”が握られていた。

「・・・君が、氷上京谷くん？」

俺はハッとして、声がした方を向く。そこには、ボロボロだが大きなマントに身を包んだ女がいた。無論、声だけでの判断だ。

「・・・だとしたら？」

「力を試させてもらっわ」

そう言い終わる前に、女は俺の眼前に迫っていた。

「っ！？」

繰り出された手刀を仰け反りながらかわし、そのまま蹴りを加える。

が、片手で止められあまつさえそのまま投げ飛ばされる。

「ぐっ．．．散れ、千本桜ッ」

そして千本桜の解放を使用し、女に向かわせる。

「止まって見えるよ、加減してるのかな」

女はそういうと、手刀で千本桜の刃を振り払った。

「こんなもんじゃないでしょ？」

そう言つて再び間合いを詰めてくる。

俺はならば、と刀を手放す。正確には、”千本桜の卍解”だ。

「散れ．．．千本桜景厳！！」

千本桜の始解では到底かなわない、数億の桜の刃が形成される。

「へえ、やるじゃん」

俺は女に桜の刃を向かわせた。俺の魔力でさらに強化されたこれは、オリジナルよりも遥かに攻撃力がある。

さすがにヤバイと感じたか、女はすぐさま距離を取った。

無論、逃がす気はない。俺は手掌で千本桜の波を操り、女の気配がする方へ向かわせた。

しかし、それでもギリギリで捉えきれない。

「．．．さすがにマズイか。スプリガン」

『all right』

女は千本桜の攻撃範囲外に逃げると、デバイスらしきものを手に取りこちらに切っ先を向けた。

「がっかりさせないでね．．．エメトアッシャー」

刹那、膨大な魔力の収束を感じ取った俺は千本桜をかき集め、盾にさせた。と同時に、女の砲撃魔法がぶつかる。

（．．．っ！重い．．．！！）

俺ですら、重いと感じる強烈な闇色の砲撃。それをなんとか受け止めた俺は千本桜を仕舞い、オーデインが使ったとされる刃”斬鉄剣”を取り出した。

「凄いいね、いろんな武器が使えるんだ」

「これが俺の能力なんだね」

俺は隙を伺いながら、女の問いに答える。女は地上に降り立ちながらこう言った。

「．．．じゃ、君の得意なレンジで戦ってあげるよ」

「ッ、なめんなあ！！」

簡単な挑発に乗ってしまった俺は、女の元に突撃する。女は動じず、斬鉄剣をデバイスで受け止めた。

「なっ．．．」

「驚いている暇はないんじゃない？」

そう言つて、剣撃を振り払う。

「スプリガン．．．ザンバーモード」

デバイスをザンバーモードなるものに変えた女は俺に迫り、袈裟懸けに振り降ろしてくる。

それをバックステップでかわした俺は、カウンターに入ろうとした。しかし、体が動かなかった。

「．．．バインド!!」

尋常じゃない硬さのバインドが俺を絡め取っていた。そして、女は俺の腹に手を当てる。

「．．．何の真似だ」

「すぐにわかるよ」

女が言つた瞬間、腹に形容しがたい衝撃が走り、俺は絶息した。

「私あまり周りを壊したくないときに使う魔法、”ショック”。これを使えば、自分の最大戦力の攻撃と同等の攻撃力が必要な相手だけにぶつけられる。まあ君にかけたのは手加減してあるけどね」俺は薄れた意識の中、先程の技の説明を受けた。バインドを破ろうにも時間がかかりすぎる。ましてや、大ダメージを受けた後だ。かなり難しい。

「．．．紫苑を操つたのは、テメエか」

「そうだよ、あなたに連絡をするように仕向けたのは私。まあ一触

即発な感じだったから本気で縛って、刷り込みしたんだけどね。心配しなくても体には負担かからないわよ」

俺が聞きたいことに対し、言うまでもなく答える女。しかし、やはり解せないことがある。

「まあ訳あつて管理局の輩共には顔を見せるわけにはいかなくてね。私みたいな魔力の持ち主なら、すぐに反応するでしょうからこの形を取ったのだけだね」

「・・・じゃあどうして俺に接触したんだ」

「・・・力を試すためだよ。奏っちゃんの味方がどれくらいやり手なのかを図るためにね。これから起こる惨劇に対応する力があるのか・・・それを見たかった。君は、13歳にしては称賛に値する判断力と戦闘能力を持つてる。これなら君の下にいる子達も信用できるわね。それじゃ」

訳が分からないことばかりを抜かして、立ち去ろうとする女。

「待て!!」

「大丈夫よ、私がこの世界から消えたらバインドも消えるから」

俺に背を向け歩きながら、そう告げる。俺が聞きたいのはそれじゃない。

「お前の名は!??」

「もしまた会えたら教えてあげる」

それだけ告げて世界から脱出しようとする。が、そうだと言う風に振り替えて口を開いた。

「力の使い方、間違えないでね」

そう言っつて、女は消えた。そしてバインドも音もなく崩れ去ってゆく。

『京谷！！京谷！！』

通信で、フィオネの呼ぶ声がした。すぐさま回線を開いて対応する。

『良かった．．．何故か通信が繋がらなかったから心配したのよ！？』

フィオネは目に涙を溜めながら言う。気づかなかったがどうやら、俺が戦つてゐる間ここは外界からシャットアウトされていたらしい。

「ああ、なんとか」

『派手にやられてんじゃねえか京谷あ！』

後ろからカルトの怒鳴り声が聞こえる。なんだかんだで心配だったんだろうな。

「大丈夫だよ、なんとかな」

俺は体を動かしながら答える。

『まあお前が死ぬような奴だとは思わねえがな。．．．で、どれくらい強い』

急に真剣な眼差しになるカルト。フィオネや紫苑、シオンも真剣な目で俺を見ている。

「尋常じゃなく強い。お互い力をセーブしていたが、本気で戦っていたらどうだろうな」

それを聞いた途端フィオネ達の顔に影が走る。

『何か言ってた？』

「俺を呼んだのは、力を試したかったらしい。これから起こる惨劇に対応する力がなんとか．．．ってよ」

『．．．何か起こるのかな』

『一種の犯罪予告か？』

「．．．それなら、俺だけに告げる理由はない。それに、俺達と敵対してる訳じゃなさそうだ。かと言って．．．」

そこではたと、何か引つ掛かるものを感じた。

『どうしたの、京谷？』

「いや．．．大したことじゃないんだが．．．あいつの口から局長の名前を聞いた」

『奏さんの？』

「ああ．．．一応、後で話聞いた方がいいかもな」

『そうだね。じゃあ早く戻ってきなよ』

そうして、フィオネは通信を切った。

「．．．惨劇、か」

この時の俺はまだ気づいていなかった。その凶刃が今旅行している一騎らに向けられていることを。

R e w r i t e 4 : 最強の魔導師（後書き）

京谷「……………」

命「機嫌悪そうだね？」

作者「俺が最強だぐへへへへってやつにはいいお仕置きだよ」

京谷「『^{エヌマ・エリシユ}天地乖離す開闢の星！！』」

作者「ぎゃあああああああ！！！！！！！！！」

一騎「あーあ、作者が死んだ。さて、代わりにこの小説を読んでくださった人には無上の感謝を。それでは！！」

Rewrite5：湯布院の惨劇 前編

- view kazuki -

「・・・」

翌朝。俺は重い頭を必死に動かしながら昨日の回想をしていた。

「えーと・・・なにがあつたっけ・・・」

昨日の記憶をがさがさと漁る。んー・・・思い出せない。

『ドカンと一発！（だだだん）いつてみよーおーおー！！』

「うおおっ!？」

突然鳴り出したアラームに焦る俺。周りを見渡して音源を探すと、どうやら音源ははやての携帯だった。

「なんでこんなわけのわからん着信を・・・って」

そこで俺は異変に気づいた。まさかまさかと思いながら周りを見渡すと、絵面にはなかなか出来ないはやてらの姿があつた。

「・・・あ、思い出した。こいつら甘酒で酔つたんだ」

ここで、事の顛末を思い出した。旅館に着いて、あらかたやること済ませてから予定通りスマブラ大会をしたんだ。で、負けたはやてが今晚のつまみの買い出しに出掛けて甘酒を買った。それを飲んだ俺とセレナ、希来を除く全員が酔い潰れて大変なことになった。

ついで野球拳（家禄のある野球拳）をし出して俺は見なかったことにして先に寝たんだ。

「．．．顔洗うか」

そう思った俺は、洗面所に向かい顔を洗う。

水が冷たいので、すぐに眠気は覚めた。そして程なく通信が入る。これは．．．京谷さんだ。なんだろう？

『一騎か。旅行は楽しんでるか？』

「．．．むちゃくちゃ疲れるんだが」

『ははっ、まあ頑張りな』

「．．．それだけじゃないだろ」

『ああ、そうそう．．．忘れていた』

本気で忘れていたらしい。

『昨日、紫苑らの出向先で魔力EXのやつが現れた』

「本当か？」

『ああ、ついでに言えば俺は戦って負けた』

「．．．！．．．！」

京谷さんを倒す程の実力者。今回の事件は京谷さんを持ってしても厳しいのだろうか。

『まあ敵対する訳じゃないだろ。力を試したかっただけらしいし』

「．．．」

『で、こっからが本題』

そして真面目な顔で京谷さんは話し出す。

『そいつの話によるとだな、これから少ししたら惨劇が起きるらしい。だから、全員に気を引き締めとけて言つて言つてくれ。俺達もいつでも向かえるように準備しておく』

「了解した。そう言えば京谷さん」

『ん？』

「・・・浦原貴輔の店って湯布院にあるんだよな」

『？それがどうした』

京谷さんは首をかしげながら言う。浦原貴輔は、ラウンス御用達の店で管理局やあらゆる世界事情に無駄に詳しい。行き詰まった時にたまに訪れる場所である。

「・・・少し寄っていく」

『ん、そうか。俺から話は通しておくよ』

「ん、了解。他に用件は？」

『んー、今のところはないな。んじゃ旅行楽しんできな』

そう言つて、京谷さんは通信を切った。俺は端末を切ってから部屋に戻り、周りを見渡す。

いまだにはやてたちは起きる気配がない。妙に浴衣がはだけたりしているため、やり場に困る。

（さて・・・どうしたものか・・・）

俺は起こすより先に、自分の身支度を整えるようにした。手早く衣服を取り出し、サツと着替える。

軽く体を動かしていると、もぞもぞ動き出したやつがいた。フェイトである。

「ん．．おはよ、一騎」

「おはようさん、酔っ払いその1」

「いきなりそれはやめてよ．．」

苦笑いしながら答えるフェイト。はやてら程じゃないが酔っていたことには変わらない。

「みんなまだ寝てるね」

「ああ．．まあ旅行は行き当たりばったりだから別に昼間で寝てくれて構わないけどな」

同じく苦笑いしながら答える俺。せっかくの休みなんだから、こういったハメ外しも悪くない。が、それはあくまでただの休み旅行だけの話であって先程京谷さんから話を聞いたとおり、少し危険な旅行になりつつあることは必ず伝えねばなるまい。

それをいかに伝えるかを模索していたところ、フェイトの他にももぞもぞと起き出す。

「あ．．おはようやよあ．．」

「おはよ、お兄ちゃん．．」

「．．．（むくり）．．．（すぴー）」

「こらこらせレナ」

俺は適当に引っ付かんだペットボトルで突っ込みをいれた。

「．．．（すぴー）」

．．しばらく放置しよう。そう心に決めてから、部屋のカーテンを開け放った。

外は曇りひとつない快晴。紫外線や脱水症状に気を使わねばならない天気だ。みんなに一本ずつアクエリを買ってあげなきゃな。

「うー．．．頭痛い．．．」

「そりゃ甘酒ゆうてもあんだだけ飲みゃあなあ．．．」

なのはは完全にやられてしまっている。命はまだ寝ているが、気分悪そうな顔をしている辺りこいつも二日酔いの類だろう。

（大丈夫かよ．．．ちよつと大変な事態なのに．．．）

様子を見てため息を突きたくなる。京谷さんがいればなんとかの杖で一発で万事解決なんだろうけど、生憎そんな便利能力には恵まれていない。

結局、全員の体調が万全になる昼まで旅館から出られなかった。

「よし、んじゃ手短に京谷さんから連絡されたことを言っぞ」

ようやくベストコンディションになったみんなを集め、京谷さんから連絡されたことを伝える。今までのおちゃらけが嘘のように、各々真剣な眼差しを向けていた。

「まず一つは京谷さんの方で戦闘があつたこと。魔力ランクはEX」
「『！』」

全員が息を飲んだ。驚くのも無理はない。

「じ、じゃあ京谷くんは!？」

「軽傷だ。相手は本気で戦り合うつもりはなくて力を試したかったらしい」

「．．．なんのために？」

なのはが問う。こちらにも戦技教導官としての顔だ。俺はひとつ間を置いてから答える。

「これは二つ目に言いたいことと被るんだが、これから遠くない未来に惨劇が起きるらしい。それに対応するだけの技量があるかどうか、だと思う」

「けどそれやったらうちらにも刺客は送られるべきやん？」

「どちみち京谷さんから指示が飛ぶんだから大したことはない。で、京谷さんからの指示はとにかく気を引き締めると言うことだ」

「．．．了解」

全員が二つ返事で返した。それから、はやてを手で誘き寄せる。

「ん、なんや？」

「もし戦闘がこっちで起きたら、隊長らから指示が来るまでは俺とはやてで仕切るからな」

「うえ、さすがにラウンズメンバーは恐れ多いで．．．」

「はやては指揮官候補だ、資格取りや年上のしたっぱ持つことだつてあるんだぞ。まあ．．．極力俺が面倒見るようにするけどよ」

あああ、なんで妥協してしまうんだ俺。それを聞いたはやてはにっこり微笑んで、

「ありがとな」

と言った。やれやれ、俺も甘いな。

「とりあえず、この話はおしまいにして・・・今日はどこ回るの?」

話は終わったと判断したのか、フェイトが今日行く場所を聞いてきた。

「ああ、行きたいところがある」

そして、ところ変わって湯布院。大分の観光名所のひとつだ。

俺たちが居るのは由布院駅の前に広がる観光通り。いろいろな土産屋や有名な食事処やB級グルメが売っており、シーズン中は観光客で賑わう。

また、この通りの公園には日本を代表する蒸気機関車D51が完形で置かれてあり鉄道マニアにはk t k r^{キタコレ}な場所でもある。

ちなみに、贅沢にも俺達は直通特急”ゆふいんの森”で来たのはここだけの秘密だ。

「へえ・・・風光明媚な場所だね」

一番最初に降り立ったなのはが感嘆の声をあげた。ついで、降りて

きた連中もおお、といった表情を浮かべる。

「おみやげいっぱい買わなあかね」

「隊長やみんなにもだね」

各々がやりたい事をやあやあ言っているのを尻目に、俺はセレナの
ところに向かう。

「ん、どうしたのかず．．．」

振り向いたセレナを強引に引き寄せて、耳許でこう囁いた。

「にやに!？」

「浦原のどこに行く」

「．．．了解。みんなを見てたらいいんだね？」

セレナが最後の台詞を言い終わる前に俺は離れ、右手を挙げてから
立ち去った。

『あれ、一騎くんは?』

『ちよつと下したみたい』

『さやかあ．．．一緒に回りたかったなあ．．．』

『あはは．．．』

よし、なんとかごまかしてくれたみたいだな。

「だらつしゃあ!!」

「・・・掃除しようよ・・・」

サボってほつきを振り回す少年を宥める少女。

「うつせえ!! 鉄斎が怖くて掃除なんか出来るか!!」

「いや・・・怖いから掃除するんじゃ「俺様に口答えすんな!!」（ぐりぐり」痛い痛い痛いよ!？」

「こらこら、なにしてんだガキンチョ。店長は居るか?」

店で働く子供二人が喧嘩しているところに乱入し、仲介する。

「・・・まいど」

さて、ここは浦原雑貨店。表向きはあらゆる雑貨やお土産を取り扱う謎の店だ。値段も良心的で破格の安さを誇る。

というのは表向きの姿で、ご覧の通り俺達ラウンズや異界を旅して回るものには重要な拠点であり、魔法や魔法具、あらゆる世界事情にも精通する。

「む、まだ掃除中・・・」

「しかたねーだろ、こいつが開けろつつうんだから」

少年は筋骨隆々の男、葛飾鉄斎に言い返す。ちなみに、パツと見てラウンズの者だと分かるように制服に着替えた。

それを見てラウンズの者だと分かった鉄斎は、抱えていた荷物を下ろして応対してくれた。

「ラウンズの者でしたか。今店長を起こして参ります故」

「ザーンネン、今日はもう起きてますよん」

と、突然奥から間の抜けた声が聞こえてくる。そこから無精髭を生やすゲタ帽子・・・浦原貴輔はあくびをひとつしながら出てきた。

「おはよ鉄斎、タツキ、雨音。そんでいらっしやいませー騎サン」

「ああ、アルテマウエポン？の調整以来か」

「そつすねえー、あれから使ったんすか？」

「いんや、まだ扱えるレベルじゃない」

「へえ・・・でも、調整はするんスね」

貴輔に言いくるめられ、俺は言葉につまる。

「まあ、そのあたりはキミの扱い次第。さ、今日はなにを御求めで？」

「ああ・・・ちょっと今俺たちが抱えてる問題に関してだな」

「へえ・・・そんなことになってるっスか」

俺は今までの顛末を手短に話した。貴輔は黙って最後まで聞き、やがて口を開いた。

「魅音．．．か。懐かしい響きつスねえ．．．」

「．．．懐かしい．．．？」

その言葉に違和感を覚える。すると、後から入ってきた鉄斎も戸をピシヤリと閉めながら呟く。

「まったくですな。私などはかれこれ40年はその名を聞いていません」

「40年．．．？どういうことだ？」

貴輔は少し間を置いてから、少しずつ話し出した。

「恐らく京谷サンから聞いてると思うんスけど、魅音サンが魔力EXの魔導師ってことは聞いていますね？」

「ああ」

「．．．では、稀少技能”闇”の事も？」

「な．．．！！」

稀少技能、闇変換。それはあらゆる自然属性変換よりも稀少とされている技能で、魔力を闇の力に変換して攻撃するというものだ。

が、管理局の歴史では管理局勤務の魔導師に持っている者はいないとされている。

「．．．聞いていないみたいっスね。むしろ京谷サンも知らなかったか」

「．．．管理局ではそれを持っている者はいないとされた」

「そっス。ですが、あくまでそれは表向きの話。今から42年前に

現れてしまったんす。それが下坂魅音っす」

俺は言葉が浮かばない。しかし、貴輔の説明は続く。

「今の魔導師で言えば、高町サンが魅音サンに近いつスカねえ。魅音サンも高町サンと同じように、現地協力者として管理局入りしました。そして余りある魔力の才能を存分に発揮し、程なくEXランクを受けました。しかし、それがある魔物の組織が目をつけたんす。無論、それは管理局も知っていた。けど、上層部は黙殺する方向に決定した」

「．．．どうして？」

「魅音サンは管理局の歴史で初めて、上層部の闇に気づいたんす。管理局の最強の魔導師として名を上げる一方、暇があれば管理局のデータベースを探り、闇を突き詰めていった。それ故に．．．魅音サンはその名を闇に葬ることになったんす」

- view hayate -

さて、買い物はこんなものかな。しかし私らもよう買ったなあ。トロロやらジブリやら可愛いものや掘り出し物があるから、ついつい買い込んでしまった。

一騎くんがおつたら、荷物持ちさせるんやけど．．．。

「まだ帰ってきいへんねえ．．．」

「そうだね．．．」

なのはちゃんと二人してため息をつく。一体どこをほつつき歩いているんだか。

その中、なのはちゃんがふと空を見上げる。

「...」

「どないしたん？」

「うっん、なんでもないよ」

なんやなのはちゃん。呆けるなんて珍しいなあ。

一騎君の言っていたこと、正直に言えば実感がなかった。そう、至近距離に”ソレ”が現れるなんて。

ズガアアアンツ

「「「!!!」」」

突如北西で爆発が起こる。突然の事態で私たちも反応が遅れた。そして程なく二回目の爆発が起きた。

「はやてちゃん!!」

「わかつとる!!」

私たちはすぐに荷物を捨て、レイジングハートと剣十字のネックレスを取り出す。

「リイン!!」

「レイジングハート!!」

「セツトアップ!!」

その言葉を唱え私達はデバイスフォームになり、爆発のあった方へ向かおうとする。

「ッ!! はやてちゃん!!」

「!?!」

なのはちゃんの声で反射的に振り返る。

「へへッ死にな」

異形の魔物がそこにいた。

- view kira -

「ッ! アロндаイト!!」

魔力弾を10形成して魔物に撃ちつける。着弾と同時に突撃^{チャージ}を仕掛け、頭を割った。

「大丈夫、希来ッ」

「... なんとか!!」

一回目の爆発の近くにいた僕と命は、複数の虫型の魔物と対峙していた。恐らくレディバクというやつだろう。その幾つかが、魔法を放とうと魔力の収束を開始する。

「・・・」ラスオブツヴァイ！！」

ラスオブツヴァイは命の十八番のひとつで、チャージによる乱れ突きだ。さらに命の風変換と吸血鬼ならではの瞬発力でバカにならない破壊力を秘める。

もちろん、今詠唱に入っていたレディバクは全滅させた。

「そこっ」

僕は間合いを詰めて、一息に三度斬る。一騎や隊長みたいに神速の斬撃は繰り出せないが、連撃には自信がある。

「一騎・・・どこいったの!？」

命は怒鳴りながら、次々現れる魔物を蹴散らしていく。しかし、その一匹を撃ち漏らしそいつは一般人の元へ向かっていく。

「しまっ」

「ラウンドシールド」

が、間一髪誰かのシールドによって防がれた。

「行くよ、ジーク」

『了解ッ』

彼女は短槍ジークフリードを自在に操り、次々現れる魔物を蹴散らしていった。

あらかた倒したところでようやく彼女・・・セレナは口を開く。

「こいつら・・・何者なの?」

「分からない．．．けど、明確な敵意を持つてゐるね」
「！あそこ！！」

命が指差した先で、空が異常に沈んでいる。
いや、歪んでいるといった表現が正しいのかもしれない。
そして、その近くに優希とフェイトがいた。

- view fate -

二回目の爆発が起きた時、私と優希は近くにいた。が、そこにいたやつは私たちに目もくれず、一目散に何処かへ行った。呆然としていたところに、優希が空の歪みに気づきそこへデバイスフォームで近づいた。

「なんなの．．．これ」

近づいた気がしない。しかし、確実にそこはなにか歪んでいる。
僅かの気の緩みもなくし、そこを注視する。
すると、突然何かが現れた。

「サンダースマッシャー！！」

予め詠唱していたサンダースマッシャーをソレにぶつけ、優希を引き連れてその場を離れる。
すると、そこから一匹の巨大な魔物が現れた。

「！！！」

私の背筋に悪寒が走る。あいつは危険だ、逃げると頭の中でけたたましく警鐘が鳴り響く。

「優希!!」

が、優希はそんな私を尻目にチャージを仕掛けた。

「っ」

怒鳴るよりも先に支援攻撃。私はプラズマランサーを出せるだけ出して、優希の共に向かわせた。

「クロススレイヴ!!」

三日月の波光撃を撃ち出し、さらにすり抜け様にスピंकロスをかけて追撃。さらにプラズマランサーが全弾突き刺さり爆発を起こす。

「やったの!？」

「・・・いや」

私は苦虫を潰した顔をしてしまった。そいつには痛手ひとつ負わせられてなかった。

「・・・こんなものか」

「っ!？」

（喋った!？）

「ヒヒツ青いの・・・小娘!!」

魔物は一気に間合いを詰め、私に左腕を伸ばした。咄嗟に私はバルディッシュで切り払い、ザンバーフォームに切り換える。

相手の速度に合わせて切り返すが、僅かに追い付かない。

「ヒヒッ!!」

そして触手を伸ばし、私を絡め取ろうと迫ってくる。そのひとつに足を取られ、私はバランスを崩す。

「アクアジェット!!」

しかし、間一髪優希の攻撃で触手は切り払われる。そして、優希は私の近くで構え直した。

「あなた・・・何が目的？」

「目的？ヒヒッそんなもの決まっておる!!下坂魅音に用があるのじゃよ!!」

「!？」

「どうやら知っておるようじゃの。隠し事はいかん、さっさと吐け」

「・・・嫌だと言ったら？」

「こっしてくれる!!」

そう言つて魔物は距離を詰めてくる。優希はクロスジャベリンモードにして迎撃しようとする。

「なっ!？」

が、見事にかわされさらにスピードを上げる。どうやら狙いは私のようだ。

「プラズマツザンバー!!」

カートリッジを1つ撃ち込み、雷の一閃を叩き込む。

「バカッ!!」

優希が私に怒鳴る。その意味は数瞬遅れて理解した。

そして、後ろを振り返ると魔物が今まさに攻撃しようとしていた。

- view hayate -

「な・・・」

私には何が起こったか理解できなかった。

気がつけばすでに弾き飛ばされていた後だった。

「はやてちゃん!!」

なのはちゃんは叫びながら、アクセルシューターを叩き込んでから私のところまで飛んでくる。

「大丈夫、はやてちゃん!？」

「あー・・・なんとか」

当たりどころがよく、幸い軽い脳震盪で済んだ。すぐにシュベルトクロイツを構え直し、相手の出方を伺う。

（近距離型か・・・こちらじゃかなり不利だな）

けど、そんな事は考えたらあかん。確実に潰さなきゃ民間に被害が出る。

「一気にカタつけよっか」

「了解!!」

私は詠唱を、なのはちゃんはチャージをかけながら魔力弾をばらまいていった。

- v i e w k a z u k i -

「なんだ!？」

二度の爆発が聞こえ、俺はすぐに店を飛び出す。すると、上空ではフェイトらがそれぞれ魔物と対峙していた。

「・・・来たみたいっスね」

「まさか・・・これが惨劇!？」

「その可能性は高いっス。京谷サンには既に連絡がいつてる筈っス。アタシらも直ぐに対応する準備をしましょう」

「わかった、俺も出る。・・・アルル」

「うん」

「「ユニゾン・イン!!」」

息ぴったりに、それを唱える。ただでさえ大きな魔力の奔流はさらに大きくなり、俺の髪は山吹色に変わっていく。

「一番向かうべきは高町サンたちのところスね。あそこは一番不利っス」

それを聞き終わる前に、俺はなのは達の元へ全速力で向かった。

「間に合え．．．!!」

- view hayate -

「白銀の風、天より注ぐ矢羽となれ．．．フレズヴェルグ!!」

私の渾身の一撃、フレズヴェルグが全弾直撃する。

「はやてちゃん後ろ!!」

「ッ!!」

しかしまたノーダメージ。敵の右薙ぎの一撃をシュベルトクロイツで弾く。

「デイベイン．．．バスター!!」

なのはちゃんの援護射撃もまるで読まれたかのようにかわされる。

「ハッ．．．温いな。魅音に似てるからもしやと思ったが外れのようだ．．．死にな」

魔力を込めた手刀が眼前に迫る。さすがに避けきれ．．．!!

「破魔、竜王陣!!」

「っ!!」

突然、攻撃を止め飛び退く敵。そして眼前にいたのは、左腕に千切れた陣羽織を巻く片翼の騎士。

「悪い、遅れたな・・・」

一騎くんが居た。しかし、普段と様子が違う。

『これが私と一騎のユニゾンよ』

念話で誰かに話しかけられる。誰かと思えばアルルだ。

「はやて、なのは」

敵と対峙したまま、一騎君は私達を呼んだ。さらに攻撃に備えて、刀に魔力を収束している。

「他の援護に回ってくれ」

「だけど一騎くん!!」

「いいからいいから。つか・・・俺の攻撃に巻き込まない保証はない」

一騎くんの言葉には、本気で心配しているような、そんな思いが込められていた。

「・・・やれんねや?」

「多分な」

「多分ってそれじゃだめでしょ!?!」

「あーもー・・・」

なのはちゃん心配している気持ちはよく解る。私のフレズヴェルグを振り払う相手だ、いくら一騎くんでも倒せるか不安なんだと思うけど、私の目には絶対やつてくれそうな感じが伝わってくる。なんだかんだ言っても、ラウンズ05の肩書きを背負っているんは伊達やないんやな・・・。

「いくよ、なのはちゃん」

「でも・・・」

「一騎くんが大丈夫言ってるねや。ここは任せよ」

「・・・うん」

なんとかなのはちゃんを宥めてその場を離れる。

・・・死なんといてな、一騎くん。

ようやく行ったか。

はやてらの動向を見てから、もう一度魔物を見やる。
異形な仮面に必要以上に長い首。筋骨隆々の体に長い尾。そこらへの魔物とは格が違うのが伝わってくる。

「ふん．．．なぜ逃がしたんだ？」

魔物はバカじゃないの、といった表情をしながら問う。まあ別に残していても良かったんだが．．．。

「なあに、はやてらを傷物にしたくないだけさ。．．．お前が試し斬りに十分な奴だといいいんだがな」

「自惚れが過ぎるぞ、小僧」

その言葉を言い終わらない内に、魔物が眼前に迫る。それを仰け反って回避し、そのまま黒龍で横薙ぎに払う。

（浅いッ）

しかし、思ったような傷は入らない。魔物が捕らえようと腕を伸ばしたのをかわしながら、微妙な距離を取る。

そしてまたチャージ。右左と順番で単純なパンチだが非常に高い破壊力を有している。

5撃目を受けたところで、視界の右端になにかがぶれるのを感じたが、反応が遅れた。

尻尾をもろに受けた俺は、勢いよく飛ばされる。しかし魔力壁で足場を作り、受け身を取り再び構え直した。

「ほう．．．魔力壁を足場にしたか。若造の癖になかなか．．．」
「残念だが違うな」

背後に回り込み、予め刃に溜めていた魔力を解放する。

「破魔．．．竜王刃！！」

破壊力を極めた斬撃を魔物の背中に叩きつける。至近距離の攻撃だ、痛手を負わせて．．．

「残念だな、小僧」

思った程の傷は入っていなかった。

すぐに体勢を建て直し、魔物は尻尾を振り回してくる。

俺はバックステップでかわし、再び竜王刃を撃つ。しかし、今度は着弾する前に払われた。

「ふん．．．ナイツオブラウンスの者と聞いていたが、この程度か。この仮面魔獣デスカーディウスが本気を出すまでもなかったな」

仮面魔獣デスカーディウス。ミッドではSSクラスの討伐対象で追加給金が付く程の強者だ。ランクで言えば俺より0.5上だが、たぶんそれ以上の差があるだろう。だが、俺は動じていなかった。

「はっ、この程度ならなんとかかなりそうな気がするな」

「ふん．．．大局を見誤ったか」

そう言って手を伸ばしてくる。それをラウンドシールドで受けた。

「どうした、いくらお前が格上でもこいつはなかなか割れねえよ」

しかしデスカーディウスはニヤリと．．．まあ仮面だから表情分らないけど．．．笑った。

「だから温いのだ、小僧。 ” カーズ ” 」

刹那、シールドが割れて俺の体に気味の悪い何かがまとわりついてくる。

「ッ！！だアッ！！」

強引に振り払い、空域から脱出する。そして飛光撃を．．．

撃てなかった。正確には” 撃った瞬間に霧散した ” のだ。さらに．．

（毒か！？さらに視界に靄が．．．！！！）

色々な異変が体に起きていた。必死に動かそうとするが動きがままならない。

「こいつはワシの体液から作った、究極の毒だ。即効性ではないし、致死させるには時間がかかるが戦闘に多大な影響が出る」

そして、俺に近づきながら説明を続ける。

「通常毒もあるがまずは視界の限定させる毒。そして行動を緩慢にさせる毒。そして極めつけは魔力の収束を阻害する毒だ」

そう言っただけに尻尾を叩きつける。

「がはっ・・・！」

「今の魔導師には魔力収束が出来ないのは致命傷だ。貴様も例外ではなかったようだな」

「ぐ・・・」

体が思うように動かない。アルルも治癒魔法を使おうとするが、カースによる影響でままならない。万事休すと言っただけだ。

「では名残惜しいが、時間だ」

そう言っただけで、デスカーディウスはカースの2射目を撃とうとしている。無論、かわす力はない。

（ちっ・・・）

その時赤い三日月が、デスカーディウスの収束した魔力塊をとらえた。爆発が起き、デスカーディウスは飛び退いて周りを見渡す。

「いやあー、まさか一騎サンがここまでやられるのは計算外でしたね」

「・・・誰だ貴様」

剣撃を放った主・・・貴輔は帽子を直しながら答える。

「なあに、しがない商店の店主っスよ」

「それは答えてないと言っただがな」

そう言いながら、貴輔に向かうデスカーディウス。

「分からない人だな」

パンチを放つ前に背後に回り込み剣撃を加える。モロに受けながらも、デスカーディウスは左腕で攻撃を仕掛けた。だが、貴輔が元いた場所に拳が届く頃には、貴輔は脇腹を斬り裂き、再び後ろを取った。

「こちらに来る間にアナタの行動パターンは解析済みです。無論アナタの必殺でもあるカーズもね」

デスカーディウスはたじろぐ。貴輔の声はあくまで冷静だ。そして普通とは微妙に形が違う刀を掲げ、こう言った。

「次は・・・攻撃する前に腕を斬りますよ」

- view fate -

「．．．あれ！？私なんで．．．」

「起きましたか、テストロッサ執務官」

私が目を覚ますと、目の前にはスノウがいた。スノウはため息をつきながら愚痴を吐く。

「まったく．．．つくづく甘いですね、貴女は。私が居なければ胸に風穴が空いていたところです」

「．．．ていうかスノウ私に対して冷たいよね」

「あなたが甘すぎるのです」

ちよつと凹む。私たちがいたのは駅前だ。先程の戦闘で大破したとはいえ、休む場所くらいはあった。

「ねえ、さっきの魔物は？」

「．．．私が遅れを取るとでも？」

すでに倒していたようだ。たぶん私は何らかの形で気を失ったのか．．．。

「他のみんなは？」

「優希は他の場所の応援に向かいましたわ。一騎は重傷を負ったようです、誰かが他にいます」

「そっか．．．」

良かった。みんな一応無事みたいだ。私はほつと胸を撫で下ろす。でも．．．なんだろう、この胸騒ぎは。何かまた大きな何かが近づ

いているような・・・。

「貴女でもさすがに気づきますか」

「まあ・・・ね」

今までの比にならない何か近づいてくるのが、なんとなく分かった。

それは段々と大きくなってくる。

「・・・来ますわ!!」

スノウの合図で飛び上がり、周囲に警戒をする。そして辺りを見回している。

「ッあれ!!」

私が指差した先には、もう比べるのが馬鹿馬鹿しいほどの巨大生物がいた。私らが何人でかかってもちよつと危ないかもしれない。

「あれだけでかいと、逆に笑えてきますわね・・・」

「そうだね・・・」

「後少しで京谷達も来ます。持ちこたえますわよ」

「了解ッ」

そう言って、私達はデバイスを構えるのだった。

Rewrites：湯布院の惨劇 前編（後書き）

京谷「そつえばお気に入り登録があつたな」

作者「え、まじで？登録してくれた方、本当にありがとうございます。つたない文章ですが、未永く閲覧お願いいたします」

命「おおっ？作者がすごく低頭だ！？」

京谷「んで、なんか後半戦に持ち込むみたいだな」

一騎「あの下駄帽子なかなかできるぞ・・・」

命「みなさん後半戦に期待しててくださいね。それでは、ドライブ・イグニッション！！」

なのは「わ、わたしのセリフ~~~~！！」

R e w r i t e 6 : 湯布院の惨劇 後編(前書き)

きらら「そついえばさ」

さらら「なに？お姉ちゃん」

きらら「なんで湯布院なの？」

さらら「それはね、作者さんが旅行の件を書こうとしたときに一番行ったことある観光地が大分だったからだよ」

きらら「だからってこんなファンタジーに現実感のあるネタを入れられても・・・」

さらら「あはは・・・では、後半戦、始まります」

Rewrite 6：湯布院の惨劇 後編

- view kazuki -

「．．．はあ．．．はあ．．．」

くそっ、さすがに挑発して乱すほど雑魚じゃなかったか．．．。
未だに視界が霞むし、体も思ったように動かせない。上体を起こすのがやっとだ。

『ごめん、一騎．．．私だけの魔力じゃ全快は難しいよ．．．。それに私も魔力収束阻害されちゃうし』

アルルは申し訳なさそうに呟く。アルルはユニゾン状態だったから影響はないと思っていたが、どうやら体内にもきっちりダメージを与えるようだ。

俺は空を見上げる。そこでは、貴輔がデスカーディウスに対して多彩な攻撃で対応し、圧倒していた。

「．．．アルル」

『何？』

「とりあえずアレのスピードに付いていけるくらいまで回復させるのに何秒かかる？」

『一騎の魔力使っていいなら30秒』

「ああ、なら任せた」

『オッケー』

そういつてアルルは治療に専念し出した。さて．．．動けるようになっただろうするか。

- view snow -

「灼火、一閃!!」

巨大生物に一撃を叩き込む。しかし、まるで効いた感じがしない。

「トライデントスマッシュャーッ!!」

フェイトも負けじと砲撃魔法を叩き込むも、やはり大したダメージにはならない。

「くっ．．．」

「化け物ですわね．．．」

しかし、痛みに鈍い分動きは非常に鈍重。ゆっくりと進行している割には攻撃しようという気概がない．．．あくまで行動での話で、奴が歩く度に周りの建物などは気持ちいいくらい綺麗に壊れていくのだけだ。

「．．．どうする?」

「どうすると言われましても．．．」

残念ながら策を打つまでもなく的がでかい。とりあえず魔力が尽きるまで攻撃してもいいけれど、それでは余りに分が悪い。しかも相手の出方が分からないのだ。というか周りのみんなもそろそろ気付いてもいい気がする。

「．．．突撃しかありませんわね」

「嘘！？スノウからそんなセリフが出るなんて思わなかったんだけど！？」

「仕方ないではありませんか！！アレだけでかいのにわざわざ頭なんて使う必要ありませんわ！！」

「でかいからこそどうしたら有効的な一打与えられるか考えようよ！？」

「では貴女には対策ありますの！？」

「うえ！？そ、そりゃあ．．．．．」

「．．．．．京谷が来るまで死なないとか」

「．．．結局策なしですね」

こんなことならとつと突撃するべきだったと本気で思った。ふと振り返ると、巨大生物は動きを止めてなにやら探し物をしているようなそぶりを見せた。が、それも一瞬で次の瞬間巨大生物の魔力が収束を開始した。

「！！離れますわよ！！」

「う、うん！！」

私はフェイトを呼び、直ぐ様上空へと退避する。そして巨大生物はあくまで緩慢に、そのまま向いている方向へ巨大なビームを放った。

「「「「！！？」」」」

おそらく今回旅行に出払った全ての者が驚愕したはずだ。その一閃はそのまま別府湾まで一直線に焼き払った。

「嘘．．．」

目の前の光景にフェイトは目を見開いたままだ。私もしばらく呆然としていたが、すぐに我に返って全員の安否を確認する。

「みんなは!？」

「大丈夫、みんな巻き込まれていませんわ!！」

フェイトはそれを聞いて安堵の息を吐く。しかし状況が良くなった訳ではない。

「これ程となると・・・」

「ヤバイね・・・」

私は平静を装いながら、隊長の到着を待つ。

・・・まだ来ないのですか、京谷・・・!!

- v i e w k a z u k i -

「・・・!!」

貴輔は動きを止めた。恐らくさっきの魔力収束に関係しているのだろう。驚愕の表情を浮かべていた。その隙を突き、デスカーディウスは貴輔に一撃を叩き込む。

「ガッ・・・!!」

「ハッよそ見なんざやってくれるなッ」

デスカーディウスのラッシュが始まる。今まで攻戦一方だった貴輔が嘘のように防戦一方となる。

「うおるら!!」

気合の一発がモロに入り、貴輔がバランスを崩す。

「まだだあ!!」

さらに尻尾を叩きつけ、貴輔を撃ち落とす。

『準備完了だよ、一騎』

同時に俺の回復も終了する。突き刺さったままの黒龍を抜き、デスカーディウスの元へ飛翔する準備を始める。

『あれ!!』

アルルが叫ぶ。その先では、デスカーディウスが貴輔に向かって力ズを放とうとしていたところだ。

「ツクそ!!」

俺は全速力で射線軸に割り込もうとする。しかしギリギリで間に合わない。

「死にな」

「・・・ここまでっスか」

叩き落とされ、身動きができない貴輔は半ば諦めた表情で目を閉じる。しかし、俺が間に合わないと判断した保険のために用意したシルドが間に張られた。

「また貴様か。その盾では防ぎきれん!!」

デスカーディウスが力を込めると、シールドにひびが入り始める。

「いつけえええええ!!」

シールドの後ろに回り込んだ俺は、あるうことかそのシールドを叩き斬った。

「バカが!! わざわざやられ・・・て・・・」

デスカーディウスの言葉が尻すぼみになっていく。なぜなら、自らが放ったカーズが”すべて消失していた”からだ。

「一騎サン・・・」

貴輔ですら、驚愕の表情で俺を見ている。

マギナ・ブレイク。

それが今さっき俺が使った術式だ。

敵と自分の間に張られた、特殊な魔力シールドに何らかの攻撃が接触しているときに自らの手でシールドを砕くことでシールドに加えられた攻撃の”全て”を無に返す究極の防御術。さらに応用すれば、相手の防御フィールドなども無に返す事も可能だ。

しかし実践に使うには非常に使用タイミングが辛いし、わざわざ危険を犯さなくてもかわせば済む問題なため、既に廃れてしまっている。こんな術式を使うのは俺くらいだろう。

「何故．．．マギナ・ブレイクを．．．」

貴輔は本気で驚いた表情で俺を見ながら聞いた。

「魔法剣に関する書見がラウンズの書庫に眠っていたんだ。たまたま俺が研修期間に読んだものにそれがあつてな．．．ちょっと難しい術式だが京谷さんにヒントもらって覚えたんだよ」

「敵と対峙している間に、ずいぶんと悠長だなあ!？」

デスカーディウスは再びカーズをぶつける。しかし、もうあのような敵しい真似はしない。次はしっかりシールドで止め、刹那にマギナブレイクで破壊する。

「なっ．．．」

「さっきのでコツは掴んだ．．．もう当たらねえよ」

俺は刀にありったけの魔力をしつかり練り込んで込める。そして刀からは凝縮され、留めきれない分の魔力が噴き出し、ぼんやりとだかくつきりとした龍を形作り纏わせる。

「な．．．」

貴輔はその光景に絶句する。俺は、そのまま切っ先をデスカーディウスへ向けた。

「悪い．．．手加減できそうもない」

俺は剣先をデスカーディウスへ向けたまま、先程とは比べ物にならない速度で突撃する。剣先から俺の右肩にまで纏わされた”龍”は咆哮を上げながら眼前の魔物を喰らおうと口を大きくあげた。

「．．．！！」

さすがにマズイと思ったのか、背を向けて逃走を図ろうとする。だが、それすらも許さない。

「逃がすかよ。龍牙、天斬ッ！！」

そして眼前に迫った俺は、テイクバックの後右腕を思いきり突き出す。纏わされた”龍”は天へ昇るかのような勢いでデスカーディウスを喰らい、打ち出された。

その”龍”は魔物を喰らった後も刀を突きだした方向にそのまま一直線に突き進んでいたが、やがて魔力の霧散が始まり消失した。

「．．．」

俺はそれを無言で見つめた後、貴輔の許に降り立った。

「一騎サン．．．」

「大丈夫か、浦原．．．」

俺は手痛い一撃を受けた貴輔を見ながら聞いた。

「アタシなら大丈夫です。しかし、アナタはカースをモロに受けますよ」

「俺も大丈夫だよ。動けるようになるまでにはちょっと無茶をしたかな」

正直なところ無我夢中だった俺は自嘲気味に笑う。

未だ自分の意思で撃てない龍牙天斬。りゅうがてんざん

それはこれから俺がナイトオブラウンスに所属している間ずっとお世話になる必殺の剣だった。

「そういえば、どうして動きを止めたんだ？」

「上空で見ればわかるっス」

そう言ったので、貴輔に治癒魔法をかけてからふたりして飛翔する。ある程度飛び上がったところで辺りを見回すと、凄まじいでかさの魔物が存在していた。

「な．．．！！」

「あいつはパトゥーリアっスね。ヴォヌスの亜種っス」

「ヴォヌス．．．？」

聞きなれない単語について聞き返す。貴輔はゆっくり頷きながら話し出した。

「はい。さっきの魅音サンの話にも被りますが、ヴォヌスは魅音サンの魔力に目をつけた組織の兵器っス。見た目は突然変異した亀っぽいんですけど、中身は凶悪な武器を内蔵してるっス」

「凶悪な武器？」

「はい。ひとつ目はさっき放たれたデイスアスターっていうビームアレを本気で撃てば地球なんて一瞬で塵っスね」

「一瞬．．．」

ぞつとした。あの巨大生物はいとも簡単に星屑に出来る力があるのか。

「やっかいなのは二つ目っスね。やつは滅多に使いませんが．．．」

俺は、その後恐ろしい魔法の存在を聞くことになったのだった。

- view mikoto -

「だっしやあっ!!」

153!

いやあ、私の撃墜記録を軽く更新してるね。

さすがに数が多いから魔力はほとんど防御と治癒に回して、自分の身体能力を存分に振るって魔物を斬る。無論吸血鬼の力を持つからこそ出来る所業であって、他のみんなはというと。

「・・・っ」

「はあ・・・はあ・・・」

「さすがに、キツイねんな・・・」

「どこから沸いてくるのよ・・・」

へばってましたー。情けなっ。

というかなんでなのはちゃんとはやてちゃんまでも仲良くダウンしてるのさ。

「そりゃあ命ちゃんみたいに近距離戦えないしさ・・・」

なんだかんだでアクセルシューターで蹴散らしながらなのはは答える。

「なのはさん運動ダメですもんね」

「あう．．．」

優希にまで言われ出したら、不屈のエースもお仕舞いだね。まあ二人は放っておいて。

「希来、優希。魔力と残弾は？」

「僕はまだ大丈夫だよ」

「私も、極力使うの控えてましたから」

よしよし、ラウンス勢は大丈夫みたいだ。

「私も余裕だよ」

どこかに行っていたのか、突如上から降ってきたセレナもそう答える。

「ってどこ行ってたの？」

「偵察。あまりに無限に出てくるから裏があると思って」

そう言いながら、ザコ魔物を片っ端から蹴散らしていくセレナ。魔力弾一発で墜ちてくれるからありがたい。

「それで？」

「色々飛び回った結果、どうやらさっき現れた巨大生物から現れている事が分かったわ」

「巨大生物．．．？ああ．．．」

緊張感ないのが、ラウンス若年クオリティ。優希はバトントワリングのように敵を切り裂きながら相づちを打った。

「うん。定期的に出してるよ。まあフェイトとスノウが気付いてるかは知らないけど」

「え、スノウ来てんの？」

はやてちゃんが驚きながら聞いた。今さらだけど私達暢気に話ながら戦ってるよね。

「うん、袴のバリアジャケット着るようなやつなんてスノウ以外知らないし」

「あ、納得」

「で・・・どうするの？」

至極真つ当なのはちゃんの疑問。セレナはそうねえ、と言いながら首を捻る。

「私の三龍帝使ってもいいけど、それでもいけるかと言われたら・・・」

「というかこの世界のマスコミに嗅ぎ付けられるわけにはいかないしね」

「いや手遅れやって」

はやてちゃんはなにいうてんの、といった顔をする。と、その時。

『おい、聞こえるかみんな！？』

「京谷！？」

「隊長！？」

我らが救世主、京谷君から通信が入った。

『良かった・・・生きていたのか』

「もちろんですよ」

「京谷くんこんなんでうちらがへばると思う?」

「さつきまでへばってたでしょ」

「あ・・・命ちゃんにセレナちゃん、それは言わんといてえな」

はやてちゃんは困った表情をしながら両手を合わせてせがむ。
私たちはそんな優しくないですよーだ。

「それで隊長は今どちらに?」

『ああ・・・でかいやつ目の前だ』

えー。

I v i e w k y o y a i

へ・・・これだけでかいと笑えてくるな。

「今私があいつに思ったこと思いましたわね」

「べ、別にいいだろ!?!一応初対面なんだから」

「笑いとしては失格です」

「おまつ、笑いはとらねえよ!?!」

「あなたが反則的な強さですからハンデとしてボケるべきですわ」

「お前どっちの味方だ!?!つかフェイト俺見てドンマイみたいな顔するな!?!悲しくなるから!?!」

「来ますわよ」

「「うわああ!?!」」

んな言い合いしてる内に、的の魔力弾が異常な量で迫ってくる。

「チツ」

俺は防御フィールド”絶対防御^{イジス}圈”を展開する。こいつなら殆どの攻撃は．．．

カシャン．．．

「な!？」

”絶対防御圈”が割れた。さすがに油断していたので、急遽かわす。

「なら．．．破道の六十三、雷吼砲!！」

放射状に広がる砲撃、雷吼砲で魔力弾を片っ端から．．．。

「なんで撃ち落とせないんだ!？」

「知りませんわよ!！」

三人してふわりふわりと回避し続ける。これでは全く埒が明かない。そしてそこへ通信が入る。

『京谷ツ!!!』

「一騎か!？浦原さんも!！」

『いいか．．．よく聞いてくれ。そいつの魔力弾は．．．』

俺や同じく通信を聞いている二人も生唾を飲む。そして一騎は口を開く。

『全ての魔力を打ち消す、あるいは相殺する．．．!!!!』

「「「!!?」」」

魔力を打ち消す。つまり、魔力によって生成されたものは全てあの魔力弾には無効と言うことだ。

「って勝てねえじゃねえかロリコン一騎!!」

「俺にキレんなハーレム隊長!!」

「ああ!? まだハーレム作ってねえよ!!」

「まだなのかよ!! 作る気満々じゃねえか!!」

「いいじゃないか、男の夢だろ!!」

「だから後で苦労するんだよテメエは!!」

「つかさつきからタメ口だな!？」

「良いだろうが、同じ年なんだからよ!!」

「知るか!! 敬え!!」

「なんだとゴラ!!」

「「「!!」」」 メンチの切り合い

「口喧嘩はその辺にして・・・直接叩けば問題ないっス」

それを早く言えよ。なぜかすごく疲れた気分だ。

「いや、笑いは必要だと思っんでww」

「てめえ・・・」

「それより、あれだけでかいつスから硬さも相当っス。あれを叩き斬れるほどの破壊力を秘めた武器が・・・」

「ある」

俺は断言した。俺が知り得る中では世界最強である、一本の剣を。

「・・・エアか」

「ああ」

これは一ヶ月前に俺が本物にした、乖離剣エア。こいつなら斬れるはずだ。

俺は直ぐ様トレースし、右手に握った。

『へえ．．．世界最強であるだけ、禍々しい魔力放ってるっスね』

貴輔は誰に言うでもなく呟く。

「で．．．一刀両断か？」

『まあ．．．ですかね』

「了解。スノウ、フェイト!!」

俺は同じく魔力弾の嵐から逃げ回るスノウとフェイトを呼び出す。

『な、なんですよ!?(ハアハア』

『きょーやあー、私もう．．．(ハアハア』

やばい、かなり無理させていたみたいだ。可哀想なので、手短に用件を伝えることにした。

「いいか、おれがいつせーのー、つつたら一騎らのところに逃げる」

『はあ!?!』

『え、ちょ、きょう．．．!!!』』

「せえー．．．のう!!」

『『京谷のバカあ!!!』』』

三人の罵倒が見事に重なり、同時に俺はデカブツの元へ向かい、スノウは一騎らの元へ飛んでいった。

．．．というかなんでバカとか言われなきゃならないんだよ。

まあそんなこんなで、デカブツの目の前に来た。デカブツは俺を緩慢な動きでだが、しっかりと俺を見据えてくる。

「へっ．．．もうここまでくりゃあ下等神並だな」

存在するだけで押し潰されそうな程のオーラが俺を襲う。並の魔導師なら当てられただけで気絶モノだろう。

俺はエアに魔力を込めて、敵の出方を伺う。

『ッ！！京谷、下がりなさい！！』

スノウが警告を発してくる。恐らく、この魔力の奔流と関係があるのだろう。

だが、こんなもので動じるはずがない。

魔力の装填を終えた俺は大きく飛び上がり、デカブツの上空に迫る。

「天地乖離す．．．開闢の星ッ！！」
エヌマ エリシユ

そして、頭のとっぺんから思いきり両断しようとそのまま斬り下がる。世界最強であるこの剣の一閃は瞬く間に敵の体を裂いていく。そして。

ズウウウン．．．

一刀が地面まで降り下ろされたとき、敵は真つ二つになり左右に倒れる。そして俺はすぐにその場から離れ、エアを担いだ。

『や．．．やりやがった．．．』

『うわあ．．．』

『啞然とするしかありませんわね．．．』

俺の荒業にあんぐり口を開けたままの一騎たち。しかしやった俺も驚きの破壊力だな。

『たいちよー、雑魚片し終わったよー』

『お、命たちもお疲れ』

『うう．．．京谷くん疲れたあ．．．』

『後で休めばいいだろ』

『あはは．．．』

命たちも周りの雑魚敵を片し終えたようである。しかし、倒して油断していた俺に凶刃が向けられる。

『京谷サン下！！』

『な！？』

突如伸びてきた触手を切り払いながら、俺は距離を取る。下をみようと、先程倒した魔物がただの黒い塊に変わっていた。そしてそれはみるみる内に変形し、人形で人と同じくらいの大きさ、両腕は鎌鼬のごとく刃となっていた。

「形態を変えたのかよ．．．いいぜ、来な」

『待ちなさい』

「「「！？」」「」」

突然頭に響く声に全員が驚く。全員に聞こえたと言うことは全員に

向けられたのだろう。

そしてその声はやがて、直接聞こえてきた。

「お疲れさま、奏っちゃんの騎士たち。こいつは私に任せな」

俺の肩に手を置きながら言ったのは昨日俺を押し込んだ女だった。

「あ、あんたは・・・」

「昨日ぶり・・・時間にして20時間50分27秒ぶりだね、少年」

「無駄に詳しいな」

「あっはっはっ」

女はにつこりと笑いながら言った。前会ったときと違い、フードを脱いでいた。

整った顔立ちで栗色の髪、そしてフェイトと同じツインテール。勝ち気なツリ目に、檸檬色の瞳。

そんな美少女を思わせる女は向かってくる敵を軽く一蹴して大きく吹っ飛ばす。

「さて、約束だから私の名前を教えたい。私は、下坂魅音。よろしく、京谷くん」

「魅音・・・じゃああんたが・・・」

「そ。私がかつて魔力EXを初めて取ったエースなのだよ」

「だけど若いな。なんでだ？」

「それは秘密。さ、分かったならさっさと安全圏へ行く!!」

「な!? 何いってんだよ!! そいつは・・・」

魅音はやれやれと首を振りながら、嘆息する。

「分かってないなあ。残念ながら”今はまだ”私の方がボウヤより

強いから」

ぼ、ボウヤ……。そこまで言われなきゃならないのかよ。

「・・・分かった」

そう言つて、俺は安全圏まで下がった。

- view mion -

あちゃー、ちよつとプライド傷つけちゃったかな。私もあそこまで言わなくても良かったね、うん反省反省。

さて、京谷くんを離れさせたはいいけどこいつがどんな動きをするかで私の戦闘スタイルは変わる。とりあえず先制しとくか。

「行くよ・・・ガンスレイヴ!!」

私の呼び掛けに応じて、周辺に私の魔力で造り出した自律兵装が12基現れる。細かい魔力弾の他に単独で突っ込ませられるスパイク付だから困ったときに便利だ。

「さあ、行きなッ!!」

そして手掌で操り、敵へ向かわせ集中砲火を浴びせる。そして私はさらに魔法詠唱に入った。

「穿て稲妻・・・」ライジングショット”!!」

私が一番最初に編み出した直射魔法を土手っ腹に撃ち込む。そしてさらに接近して。

「パルマ・・・フィオキーナッ!!」

これまた私が編み出したゼロ距離魔法。これは集束砲撃に使用する魔力を極限かつ短射程にのみ効力を発揮するように圧縮した正直ミッド式には無駄な魔法だ。ただし、非殺傷を解けば効力範囲の関係で確実に撃墜出来るため、狭い空間での戦闘では私的に重宝する。しかし。

「やっぱ簡単にはいかないかぁ・・・」

結構な痛手を与えたが、さすが”私の魔力から産み出された”魔物だ。無駄に強い。

「・・・けど、勝てるなんて思うなよ」

私は右手にスプリガンを握った。同時に鎌鼬を振るい、私に攻撃してきたので”フリット”で間合いを取る。

そしてスプリガンをザンバーモードに切り替え、近接戦闘に対応できるようにする。

「!」

そして敵はニタニタ笑いながら迫ってくる。次いで振り下ろされた左腕を紙一重でかわし、骨盤の上を両断してまた離れる。

無論超速再生で無に返されたが、確実にダメージは蓄積している。

「さ・・・来なよ。まだ本気出してないから」

そう言つて、私はザンバースプリガンに魔力を溜める。

私の戦闘スタイルは基本的に何でも御座れたが、一番得意なのはガンスレイヴで攪乱してからザンバーで片っ端から斬り伏せる戦法だ。私程になれば、一瞬で行路をトレースできるから意外と効率はいい。刹那、魔物が消え私の背後に周り首に鎌を宛がう。くっ、無駄に速いじゃないの。

しかし、さらに私はそのコンマ三桁の間に背後に回り込み首を切り落とす。．．無論回復されるのだが。

「こつちだよ!!」

私は上空へ飛ぶ。もちろん、追いかけてくる。そこで私は急にバツクステップをかけて、背後を取った。が、反応がいい。直ぐ様敵は振り返つて右腕を後ろに払ってきた。

それを私はザンバーで受ける。計算通り!!

私はザンバーを形成する魔力波を自身の技能の闇変換でスカーレットに染め、そのまま振り下ろす。

「クレッセント．．クラッシャアア!!」

クレッセントクラッシャーは私の”近接攻撃”最強の技だ。

そこから放たれる、ザンバーと同じ色をした三日月状の斬撃は敵の右半身をバツサリ切り裂いた。

あ、もちろん超速再生で元通りになる。その超速再生による戻りが若干遅くなったのを私は見逃さなかった。

「バインドッ!!」

あらかじめ詠唱しておいたバインドで魔物の体を絡め取る。尋常でない固さのこれを疲弊した状態ではまず破壊できない。バインドを壊そうともがく敵に私はゆっくりと近づき、下側へ回って通常形態に戻したスプリガンをあてがった。

「よく頑張ったよ。けど．．．」ハデス・クイーン「冥界の女王」の敵じゃなかったね」

スプリガンの先端に魔力を込める。

魔物はこいつはヤバイと本能的に悟ったのか激しくもがき出す。

もちろん、逃がす気はない。

やがて、魔力は集束を終えた。私は軽く魔物の体にスプリガンをめり込ませ、解号を唱えた。

「ライオットバスター、シュート」

刹那、先程この魔物が湯布院を割ったビームを越える破壊力を持った集束砲が魔物を塵に返すのだった。

- v i e w k y o y a -

「え．．．えげつねえ．．．」

俺は先程の時間にして一分前後の戦闘を目の当たりにして、啞然としていた。

正確かつ隙を与えないコンボに多彩な攻撃。

さらに僅かな攻め時のサインを見逃さず、確実に撃墜する決定打の保持。

「化け物じゃないか．．．!」

そんな俺の戦慄を余所に、魅音はすつきりとした顔で俺に近づいてきた。

「ふふん、どうよ」

「．．．凄いな」

「でしょ？」

魅音は勝ち誇った顔で笑う。確かにそうするだけの實力はあった。しかし、少し解せないことがある。

「どうして．．．40年前のエースがこんなに若々しく．．．」

『魅音サン．．．？』

しかし、貴輔の乱入に俺の言葉は遮られる。

魅音は貴輔を懐かしむかのような顔をしていた。

「久しぶり、貴輔」

『．．．脱出出来たんスね。どうですか？久々の人間界は』

「んー、悪くないよ」

『そうですか．．．』

貴輔はそれきり、物憂げな表情をする。

「ガーネットやロックは元気？」

『大丈夫っスよ。元気にしてます』

「そっか．．．良かった．．．っと、そろそろ行かなきゃ」

魅音はそう言うと、自身に転送魔法をかけた。魅音の体が光に包まれ、呑み込まれていく。

「待て！！アンタはなにを言いたいんだ！？」

「私からは時間の都合上言えないわ。詳しくは・・・奏っちゃんと、貴輔に聞いて」

魅音の声が遠くなり、やがて消失した。

『浦原・・・』

「浦原・・・、後で聞かせてくれないか？局長と一緒に」

『・・・もちろんっスよ。奏サンもこの世界に呼びます』

時間にして二時間弱。湯布院を襲った惨劇は大きな爪痕を残して幕を引いたのだった。

R e w r i t e 6：湯布院の惨劇 後編（後書き）

さらら「おおゝ．．．。謎が謎を呼びますね」

作者「んだねえ。でも．．．これを読んでもてゐる人は興味持つて読んでくれるのかなとすごく不安ね」

さらら「じゃあ読者さんに聞いてみます？」

作者「いやいや、それはさすがに．．．でもレビューはすごく励みになります。なんか適当なところは．．．見逃してください」

さらら「それでは、読んでくれた人にはいっぱい感謝！次回も見てくださいね。明日の未来も、撃ち抜いて見せるッ！！」

作者「．．．何のネタ？」

R e w r i t e 7 : 奏の記憶 前編（前書き）

作者「さて、今回も前編後編構成になります」

一騎「いちいちタイトル考えるのかったるいからとか言ったら殴るぞ」

作者「いやいや、わざわざ凝ったタイトルにすることはないでしょう？わかりやすさが大事なの。では第七話、お楽しみください」

R e w r i t e 7 : 奏の記憶 前編

- v i e w k a z u k i -

さて、ここは悠水亭。

あんだだけの騒ぎがあつたにも関わらず、俺達を泊めてくれる宿主の肝っ玉振りには感服である。

「．．．来ましたわ」

スノウが転送魔法を感知する。すると空間が縦に裂け、中から俺たちの部隊の真の指揮者、堂本奏が現れた。

「ふう．．．何度やつても疲れる．．．。皆、お久しぶり」

奏は優雅に一礼して、用意された座布団に座る。そして辺りを見回し、貴輔の所在を確認するとようやく口を開いた。

「貴輔．．．五年ぶりね。元気にしてた？」

「もちろんっスよ、奏サン。アナタこそいつもお疲れさまっス」
「ありがとう、貴輔」

奏は優しく微笑む。どうやら彼らは並々ならぬ関係のようだ。

「局長、そろそろ．．．」

京谷が急かして、奏は我に返る。そして話始めた。
皆は真剣に耳を傾けようとする。

「まずは、私達の事を言わないとね。私と貴輔．．．ここにはないけれど、ガーネットとロック、そして魅音は管理局では無敵の五人とされた」

「ガーネット．．．ガーネット・テイル？」

セレナが食いつく。

「うん．．．。管理局では歴代最強の召喚士で、魅音の後を追ってEXランクを勝ち得た天才．．．」

「やつぱりかあ．．．私の目標なんだよね」

セレナはふふふ、と笑いながら言う。

「ガーネットは記録では龍神バハムート零式、機械神アークを操る”女帝”と呼ばれた天才だ。

そしてロック・パスカルは世界を股にかける伝説の盗賊で、近接戦闘において無類の強さを発揮したそうだ。

いつの間にか管理局に協力するようになったとされている。

そして奏や貴輔も凄腕の魔導師だった人達だ。この五人は40年前の管理局の切り札だったのだろうと言うことを改めて知った。

「私達、実は魅音と同じ年の52歳．．．」

「「嘘!?’’」」

「嘘じゃないっスよ」

貴輔は奏除く全員の言葉を否定する。

「私たちにも、呪いが掛けられていたから．．．」

「呪い．．．?」

「うん．．．。皆には、この事を話さなきゃいけないね．．．」

奏はそう言つと、慈しむかのように過去の話始めた。

- E P I S O D E : m i o n ' s h i s t o r y (v i e w
a n a d e) -

新暦0029年11月末。

私達は12歳。

この時から既に私、魅音、貴輔、ガーネット、ロックは周りを超越する戦闘能力を有していた。

高速機動による遊撃の私、近距離戦闘のプロフェッショナルのロック、あらゆる研究から導きだした有効的な戦い方をする貴輔、遠中近どのレンジでも無敵を誇る魅音、二騎の究極召喚を行使するガーネット。

この時既に私達は仲良く魔力ランクSSSを獲得しており、管理局最強の名前を欲しいままにした。

「こら貴輔ッ！！また部屋散らかして・・・またワケわからないもの作ってるの!？」

「べ、別にいいじゃないっすか・・・」

「まあまあ、魅音も許してやりなよ。浦原は研究好きなんだから・・・」

「そうだよ、魅音。一応役に立つんだしさ」

「そ、それはそうだけど・・・」

魅音はやれやれといった感じで首を振った。
それを横目で見ていた私はくすくす笑う。

「・・・なによ」

「うつん、なんでもない」

「なんでもないので笑わないでしょお．．．？」
「こ、怖いよ魅音．．．」

私達は皆似たような境遇．．．つまり、両親がいないというこの年齢にはなかなか過酷な状況に置かれていた。

それ故にひかれあつた私達は、いつの間にか五人で一部屋を共同で使い、いつも一緒に訓練や仕事に励んでいた。

「ねえねえ、夕方に訓練し終わったら三連休だよね？」

ウキウキしながら魅音は言う。

「そうだね。私達にしては久々の連休だものね」

ガーネットはようやくか、と言った表情を浮かべる。12歳ではあるのだが、実力ゆえにたくさん仕事が舞い込んでくるため中々休みがない。もちろんこんなことでへばる私達ではないが、やっぱり休みは欲しいところである。

「アタシはまた研究したいっすよ．．．」

「つか暇さえあればいつも研究してるよな、貴輔」

「アタシの趣味ですから」

貴輔はニコニコしながら答えた。私はと言えばいつも一歩後ろから微笑ましく眺めていたものだ。

「こらこら奏、あんたもいつも後ろから付いてくるだけじゃダメなのよ？」

「うっ．．．解ってるけど．．．」

「解ってるなら割り込む！！」

「ひゃあ!？」

魅音に引つ張られ、私は皆の輪の中に放り込まれる。

「はは、奏いつもこうして引つ張られてるな」

ロックは可笑しそうに笑いながら言う。

図星なので私は全く言い返せない。

「うう．．．」

「”非情の天使”も、”冥界の女王”^{ハデス・クイーン}には形なしよね」

「あんた方も勝手に私の二つ名つけないの」

「いいじゃないっすかー、魅音サンは闇魔法使うんすからお似合いっすよ?」

「まあ確かに私は闇使えるけどさあ．．．」

魅音は気恥ずかしそうに頬をポリポリ掻きながら言った。

まあ女王というよりは鬼だよね、魅音の場合は。

「まあいいや。明日からどうするの?」

「折角だから体動かしにいかないか? バッティングセンターとボーリング」

「ロックは体動かす事しか能がないのね．．．」
「うっせ」

なんやかんや話している間に、私達の部屋に着いた。

「あー疲れた。先シャワー浴びるわー」

入るや否や豪快に制服を脱ぎ捨てながら魅音はシャワー室に入っていく。

「．．．」

「魅音サンには恥じらいがないんスカね．．．」

「別にまだ気にするような年でもないだろ、まだ貧乳だし」

「だっ誰が貧乳よ!？」

「いや．．．この年齢なら妥当．．．」

シャワー室から魅音の怒鳴り声が聞こえる。思えば魅音は地獄耳だったっけ。

「飯食うとやることないよな．．．」

誰に言うでもなくロックは呟く。確かに管理局の設備じゃ子供達は娯楽に困る。なので私達の遊びは必然的に体を動かす遊びになってくるのだ。

「．．．ツイスターゲーム？」

「いつの時代の人間なんスカガーネットサン」

「じゃあアレか？みおから始まるリズムに合わせてーってやつ」

「だからいつの時代の人間なんスカロックサン」

「じゃー、ふーえーるーアハツハハツてやつ」

「私らは トビメンバーじゃない．．．」

なんでこうもはね ビから離れないのだろうか。と言うか時間軸的には私たちが開発した的な感じのノリだ。

「じゃあアタシの取って置きを使うしかないじゃないっスカ」

と言って貴輔が取り出したのは。

「はっ、奏また借金かよ！」

「うう．．．なんで仕返するの．．．」

「ガーネットは手堅いっすから．．．」

人生ゲームだった。無論、貴輔が造り出したバーチャル筐体式である。

雀荘の雀卓より一回りほど大きい程度のため、五人部屋である私達の部屋では特に場所は取らない。

ちなみに中のハードウェア（カートリッジ式）を入れ換えれば麻雀や桃電なども出来る超万能な機械だ。その時は各々用の操作盤を取り付けなければならないが。

「あ、私上がり」

しばらくして、魅音が一番乗りを宣言する。見れば、調度決算から一発でゴールしていた。

「．．．何やつても無敵だね」

私はなんだか切ない気分となる。

「い、いやこれは勝負の世界だし．．．」

「そ、そうだって！！たまたまだよたまたまつ」

「いいもんいいもん．．．私は貧弱でぺったんこで役立たずだもん．
．．．」

「あーあ、魅音サンのせいっスね」

「私！？」

ま、なんだかんだで遊び倒して皆は爆睡し始めた。みんなのように騒がない私は、まだ眠くならない。

「．．．23：11か」

私は机に掛けていた陣羽織．．．別に戦いに着けないが．．．を羽織って部屋を出た。

目指す場所は訓練用湾岸都市があるエリアだ。あそこは意外と静かな場所なので、私のお気に入りの場所でもある。

「そろそろオリオンが見えてくる季節かあ．．．冬の星は綺麗」

誰に言うでもなく、私は呟く。自然を慈しむのは、私が管理局に入ってから覚えたことだ。というか、血生臭い戦場を翔ける私にとっては非常に大切なことである。

私が、護るべきモノを忘れてしまわないように。そして、また立ち上げられるように。

「おーおー、また一人で抜け出して!!」
「ひゃやああ!？」

突然背中に現れた魅音の声には私は情けない声をあげてしまった。

「な、なんで後ろにいるのよ!？なに、ストーカー!？私拐われる!？」

「落ち着け落ち着け」

「いーやー拐われるー!!?」

「ああもう可愛いなかなでん!!」

閑話休題。

「で?どうしてついてきたの...?」

「なんでってそりゃ眠くないからどうしようかと悩んでたらかなでんがどこか行こうとしてたから、面白そうと思って...」

えー。

「ま、いいじゃない。あ...なんか飲む?買ってくるよ」

「じゃあ...ミルクセーキ」

「オッケー。じゃあ買ってくるよ」

そう言つて、魅音はここから五分歩いたところにある自販機へ向かった。...もちろん瞬動連発によつて1分とかからなかったが。そして、程なく魅音は飲み物を買ってきた。

「はい、かなでんの好きなキャラメル味」
「ありがとう・・・」

魅音からミルクセーキを受けとり、プルタブをあける。
魅音はなにを買ったのだろう・・・ちらりと見てみる。

リリカルスウェット

えーっと・・・。

「ん？なに？」

「な、なんでもないよっ」

一度ベンチに缶を置き、目を擦る。そしてもう一度魅音の飲む缶の
銘柄を見る。

リリカルスウェット

ネタだ・・・絶対ネタだ・・・！！

「どしたん？その」リリカルスウェットってなに！？作者のネタ？

”みたいな顔は”

「え．．．えっと、魅音の突っ込みはよく分からないけど、そう言う世界の理に触れることはよした方がいいと思う．．．」

魅音の台詞はいつも危険だ。

「ま、いいじゃん。味はポ　リだよ」

「そんなことだと思ったよ」

所詮作者の知識や捻りはその程度だ。

とりあえず置いていたミルクセーキを口に含む。甘ったるい味は本当は苦手だけれど、私はなぜかこのミルクセーキだけは好きだった。

「ふう．．．そう言えばもう2年なんだね．．．」

魅音はふう、と息をつきながら呟く。少し肌寒い風が魅音の二つに結われた栗毛をそつと撫で、そよそよとなびく。その後ろ姿は、普段無敵の彼女が、本当は儂く壊れてしまいかねない存在なのかもしれないことを指しているようだった。

「そうだね。短期プログラムからの付き合いだっけ」

「そうそう、最初の任務のときにロックを保護していつの間にか管理局にいたしね」

「なんか凄く昔のように思えるな．．．」

私は空を見上げながら苦笑いする。魅音の破天荒に皆がついてゆき、そして苦楽を共にしてきた日々。それらは私の一番大切な思い出だった。

「そろそろ戻ろっか？」

「うん」

各々飲み干した私たちは立ち上がり、ゴミ箱に缶を捨ててから部屋に戻る。

明日も楽しい日に出来たらいいな。

そんな、淡い期待を抱いていた。

「なんか偉く普通な話だな」

京谷は奏の話を聞いて率直な感想を言う。

「それは、どんなことにも起承転結は要るから。私が話したのはまだ起」

奏はしれつと受け流す。真剣に話を聞いていたなのはたちは、

「そうなんだ・・・」

「続き気になるね・・・」

「色恋とかあるのかな？」

等と、非常に関心を抱いて聞いていた。

「京谷もこれくらい素直ならいいですね・・・」

スノウが京谷の態度を見て、やれやれと言った表情で嘆息していた。
うん、それは同感する。

「で、続きがあるんだろ」

「うん、だから続けるね．．．」

奏は一呼吸置いて、また話し始めた。

そして次の日。ロックの要求通り、バッティングセンターに来ていた。

「魅音、今度こそ負けねえからな」

「アンタこそヘマやらかさないようにね」

二人がなにを張り合っているのかというと、ホームラン競争である。私たち御用達のバッティングセンターは通常用と実践用、そしてひたすらかつ飛ばすホームラン競争用とある。

ご丁寧のパノラマなので、より臨場感ある打撃が出来る。さらにはここの常連内では二人の対決はちよつとした見物になっていた。

「嬢ちゃん頑張れよ!!」

「そっちの君も打ちまくれよ!!」

皆の声援を受けながら二人はバッターボックスに入り、構える。どちらも無駄の無いフォームだ。

カキイイイン
キインッ

打撃もどちら也讓らない。そんな熾烈な争いを余所に私たち野球はべつにい組はのんびりスマッシュピンプンをしていた。

「そついやさっ」

私はバックスマッシュを決めながらパートナーであるガーネットに問いかける。

「なにっ？」

ガーネットもまた、動きに無駄のないスマッシュを決めていく。

「なんかっ、変な魔物が観測世界に出回ってるらしいっ」

「あー、聞いた聞いたっ。行方不明者も出たらしいねっ」

今、管理局では不可思議な事件が起きていた。

観測世界に出現する謎の魔物。特に危害を加えてくるわけではないが、一部に被害が出だしたために管理局では少し警戒されている。あっけらかんと話しているのはプレイしながらなので仕方ない。

「もしかしたら私達にも出向命令出るかもね」

最後の球を見事にスマッシュし、最後のゾーンに落とす。まさかの全面ストライクに私は驚いた。

「そうだね．．．本当なのが一番だけど」

「あはは．．．」

「お、終わったっすか？」

私たちが打っている間、座って待っていた貴輔が出迎えてくれる。その貴輔の手にはノートPCが抱えられていた。

「今度は何してるの？」

「いや、アタシの新しい魔法の術式考えていただけっすよ」

そう言つて貴輔はパソコンを開け、プログラムファイルをオープンした。

「まったくわからん」

ガーネットは一発でサジを投げた。うん、私にもさっぱりだ。

「そっすねえ．．．奏サンの為の技ですよ」

「私の？」

「はい、まあ．．．昔の文献から引つ張ってきたのを奏サン用に改編するだけです．．．。奏サンは天使の血が流れているでしょう？」

「まあ流れはしているけれど」

そうなんです、私は某天使ちゃんよろしく天使の血が流れています。なんせ天界の人間ですから。そしてなぜ私の術式なんだろう？

「これは天界の高級階級にいる戦士が扱える身体強化術っす。これを使いこなせば奏サンはアタシたちより強くなれますね」

あっさりと貴輔は断言した。

「実感沸かないけどね．．．」

「あはは．．．」

ガーネットは愛想笑いを浮かべる。私もそれにつられてつい笑ってしまった。

その刹那、私は一瞬だが異常なさつきを感じた。

「ッ!？」

「ん?どうしたんスか?」

不思議そうに貴輔が聞いてくる。ガーネットも「?」マークを頭に浮かべていた。

「いえ．．よく分からないけど、一瞬殺気を．．．」

「殺気?ああ、アレッスか?」

貴輔がのほほんと指差した先には。

『だらっしゃあ!』

『うおお!!150メートル!?』

『どっせえええい!!』

『お嬢ちゃんは151メートルか!』

『ガキの癖にやるじゃないか!』

『はっ．．負けねえぞ魅音』

『あたしもだよ．．!』

たしかに殺気立ってはいるけど。

二人の殺気なら普通にスルーできるレベルだ。人一倍感覚に敏感な私を感じ違えるはずはない。

「奏考えすぎだよ。疲れてるんじゃない？」

「でも・・・」

「まあまあ。何のための私達かな？」

ガーネットが胸をトン、と叩きながら言う。

確かに私達SSSランクが五人いるのだ。そういう意味ではなんとでもなりそうな気がする。

「だよね。私も考えすぎかな・・・」

私は情けなく笑った。そして再び羽を伸ばしにガーネットらとピンポンやらなんやらを疲れない程度にやっていく。

私は・・・この判断を一生悔やむことになるなんて思いもしてなかった。

市街を歩き回り、遊んだところで夕食とした。

場所は地下市街にあるうどん店。手打ちでコシがあるから美味しい、というのは貴輔の弁。

「いやあー、遊び倒したねえっ」

魅音があっぱれあっぱれといった感じで言う。

「アタシはしばらく勘弁してほしいですねえ．．．」

「私も．．．」

「なーにいつてんのよ貴輔に奏。一番出不精なのは貴方たちなんだからたまには外出するの！」

ここぞとばかりに魅音はお姉さんぶった口調で演説する。

対する貴輔はなんと形容しがたい嫌そうな顔をしている。

「えー．．．」

「えーじゃないつ。大体男がえーゆうても可愛くないわよ」

「解つてますよおそんな事」

「離してロックー！一回シバきあげないと気が済まないのー！」

これははいはい、お姉ちゃん解つたからもういいよ的な感じのアレだ。貴輔も魅音の扱いに慣れてきている。

「も、もおー！帰るわよー！」

顔を真っ赤にして店の外に向かう魅音の後を連れだつて私たちは付いていく。そして地上へと続く階段を一番最初に登りきつた魅音は不意に立ち止まる。

「どうしたの？」

そのすぐ後ろにいたガーネットが肩口からひょっこり顔を出す。そして同じく固まる。

「．．．．．？」

私、ロック、貴輔は首をかしげる。そしてその後ろから様子を伺う。

「「「「「」」」」」」

暫し硬直。

「あつはつはつ、まさかまさか？」

「そうそう、あんだけはしゃいでいる間に地上が何故か壊滅してて魔物がたくさんいて、それを知らずにノコノコ出てきた私達の前に待ち構えて今まさに殺そうなんて．．」

『キシャアアアア！！』

グシャツ

殺られるわけじゃないじゃないですか！。私達SSS戦隊ですよ？

ロックの魔力弾で魔物は爆散し、数瞬遅れて私達はバリアジャケツトモードになる。

「．．．たく、洒落にならないわね。．．全員でとりあえず適当に潰して回るわよ」

「「「「「了解」」」」」

魅音の合図で全員が適度に広がってこの都市で一番大きい広場まで走り出す。

その間、魔力の波動を嗅ぎ付けて全方向から魔物が襲いかかってくる。

「邪魔だよ、アンタ達!!」
「でやああ!!」

魅音とガーネットが僅か1秒以内に計数百の魔力弾を形成し、撃ち出す。無論敵は全滅。
更にあれだけの魔力弾を形成しながら建物にそれ以上の僅かな破損を与えない正確すぎる誘導技術。
本当に頼もしい限りだ。

「さて・・・アタシも見てばかりじゃつまらないっスね」
「だな」

貴輔とロックは何かを申し合わせると同時に瞬動をかけ、前方にいる敵の群れに突っ込む。

「カリーシュダイヴッ!!」
くれないのつめ
「紅ノ爪」

蟻に対する巨像の一撃の如く、桁違いの破壊力を込めた一撃を叩き込んでいく。

「ひゅーっやるねえ」
「まだまだっスよ」

そんな無駄口を叩きながらみるみる内に敵を潰してゆく。そしてあらかた倒したところで、私達は広場に着いた。

「ふうっ!大したことなかったね」
「そろそろ管理局に連絡入れた方がいいんじゃないかな?」

ガーネットの言葉に応じ、私は端末を呼び出し本局に繋ごうとする。

「あれ．．．？」

「どうしたっスか？」

私の間抜けな声に貴輔が聞き返す。

「本局に通信が繋がらない．．．」

「うそお？見せて」

半ば信じていない魅音が貴輔を押し退け私の端末を覗く。しばしそれを見つめてから、

「確かに繋がってないねえ．．．」

と、呟く。今の時代ならAIがそういうのを管理してくれるが、この時代は本当に魔力を行使するための媒体．．．例えるなら某子供魔法先生の指輪みたいな機能しか果たさないのだ。

昔の魔導師が反則気味に強い人には、自分自身がデバイス並の演算能力を備えている所以だ。

ちなみに、今のAI管制システムを確立したのはこれから10年先の貴輔である。

「どうしてやる．．．」

などとあれこれ議論する。

私はちよつと焦るけれど、多分管制システムの異常か何かだろう。そんなのんきなことを考えていた私に、昼間のあのさつきを再び感じる。

「ッ!」

「か、奏!？」

「かなでっちゃん!？」

異様な冷たい殺気にあてられ、私は昏倒しそうになる。

この前よりも殺気が近い。

しかも．．．近づいてきている．．．!!

これはヤバイ。危険だ。逃げさせなきゃ。

頭の中で警鐘がやかましく鳴り響く。しかし、声に出せない。

周りのみんなは気づいていない。いや、”私にわからないようにしている”のかもしれない。

「まさか、五人とも居たなんてね。まあ、いいや。皆、消えてもらうから」

はつきりと声が聞こえ、全員がそちらを向く。

そこには、私達と同じくらいの大きさの詰め襟を着た子供と、その従者であろう桁違いの魔力を持つ魔物が三体居た。

よく見ると、少年の頬にはそれっぽい紋様が入っていた。こいつも魔物なんだろう。

「」

「一人は殺気だけで立ち上がれないか．．．じゃあ、邪魔な方から」

そう言つて、少年は右手の人差し指を私に向ける。その刹那、魅音が割って入りシールドを展開した。

そのまた刹那、大きな爆発が巻き起こる。

「残念だったね。見えてたよ」

魅音は口の橋を釣り上げて笑った。

状況についていけなかった他の三人もようやく我に帰り、デバイスを構える。

「通信妨害してるのは君だね？」

「そんなことが気になるのかい？それより自分達の心配をするといい」

そして再び魔力弾。今度はロックが魔力弾で弾き、別の場所に落とす。

「なんだ、大したことじゃないな」

「落ちた場所を見るといい」

そう言つて少年が指差した先・・・魔力弾が落ちた場所が完全に石化していた。

「これは・・・」

「確かに自分の心配をしなきゃいけませんね・・・」

ロックと貴輔は少し顔を引きつらせる。

「まあいいじゃない。とりあえずぶっ飛ばしましょ」

その自信はどこからくるんだか。その間に何とか和らいだ私は立ち上がり、ハンドソニックを構える。

「いくよ、皆」
「「「「っしゃあ!」」」」

死闘が、始まる。

R e w r i t e 7 : 奏の記憶 前編（後書き）

京谷「どうでもいいがなんかEXランクのやついっぱい出てこなかったか・・・？」

作者「仕様です・・・というのは冗談で、すこおーーーーーしだけ、ネタバレすると。京谷達を出すにあたってこの展開はすでに考えてました。ツバサ・クロニクル風に言うなら”干渉させたことで道筋が変わった”みたいな」

京谷「あ、ああー・・・なるほど」

作者「それでは読んでくれた方に無上の感謝を。では！！」

R e w r i t e : 8 奏の記憶 後編（前書き）

作者「えー・・・泊まり仕事だったので更新できませんでした。明日からは旅行なので、できる限り更新していきたいと思います。では、後半始まります」

R e w r i t e : 8 奏の記憶 後編

戦闘開始から約一時間が経過した。お互い大きな口を叩きながら、かなり消耗していた。

「っ!」

魅音は少年の攻撃を大きく避け、魔力弾を数発撃ち込む。次いで、ザンバーをスカーレットに変え斬りかかる。

「...っ」

少年は無言で受け止めるが、さすがに重いのか歯軋りしている。その膠着状態を破ったのは魅音だった。

「...何をしている?」

少年は魅音の行動に疑問を投げ掛ける。魅音は、少年の腹に手を当てていたからだ。

「なあに、すぐわかるよ」

その言葉を言い終わらない内に、少年の体に形容しがたい程の強烈な衝撃が走る。

「カハッ...!」

少年は体をくの字に曲げながら絶息する。

「はあっ!!」

さらに回し蹴りでぶっ飛ばし、さらに背後に回り込んで待ち構える。

「エメト・・・アッシャー!!」

そして砲撃。これは大ダメージを与える一撃だ。案の定、少年はロボロの姿となる。

「・・・っ」

少年はたじろぐ。そして、右手に魔力を収束させ始めた。魅音はスプリガンを構え直す。

「ブレイクバスター・・・シュート」

少年の砲撃。威力的には魅音のエメトアッシャー程度だろう。砲撃は真っ直ぐ魅音へ向かう。

「はっ、あたるはずないわよ!!」

魅音は余裕を持って、飛び上がって回避する。だが、少年は鼻で笑った。

「避けたつもりかい」

そう言つて、手掌を魅音へ振る。すると、着弾した場所から小さな魔力弾が飛び出して魅音へ向かっていく。

「っ!?!」

魅音は予想していなかったのか、回避行動に僅かに遅れが出る。それでもなんとかかわしていく。しかしその内の一発が魅音のマントに触れ、マントが石化していく。

「なんの！！」

だが、魅音は判断が速い。即座にマントを脱ぎ捨て、さらに残りの魔力弾に対する防御として使用した。

「なかなかやるね。さすがに僕も判断できなかったよ」

「悪かったわね。けど・・・これで終わりだよ」

魅音はスプリガンを構え直し、ザンバーモードにする。次いでザンバーをスカーレットに変え、瞬動で背後に回り込む。

「やあ！！」

袈裟懸けに降り下ろす一撃。確実にヒットさせたが、少年の体は石のように砕ける。

「な・・・」

そう思ったときには、少年は背後から先程の魔力弾を形成して撃ち込もうとしていた。

「ガードスキル、ソニックムーブ」

それを私がソニックムーブによる衝撃波で、すべて叩き落とす。さらに接近してのハイキック。

「奏ッ！！だめえ！！」

魅音が叫ぶ。私はその声に僅かに気を取られてしまった。

「甘いね」

「くっ！！」

魅音が私にタックルする。私は飛ばされ、私が居た場所には魅音が居た。しかし。

「自分から石になるなんてね・・・」

「あはは・・・だけど、奏ちゃんが石になるより私が石になったほうが都合がいいんだ」

「魅音っ！！」

魅音の体が少しずつ石に変わっていく。だけど魅音はたじろいだ様子がない。むしろ笑っているような・・・。

「ねえ、どうして私が冥界の女王って呼ばれているか知ってる？」

「君の技能である闇変換からだよ。それをこちらがわからないと？」
「分かってないねえ」

魅音はため息をつきながら首を振る。同時に、顔の前に自分の手を翳した。

「私が冥界の女王と呼ばれてるのは・・・」

そして、その手をスッと降ろす。そこには、”魅音”はいなかった。

「冥界の女王の能力が有るからだよッ!!」
ハデス・クイーン

魅音の全身に幾何学的な紋様が淡く浮かび上がる。そして魅音の体に憑依し、魔力が爆発的に上昇した。

「ばかな・・・」

少年はたじろいだ。無理もないだろう、詰んだと思えばこれほどの隠し玉を持っていたのだから。

魅音の体を蝕んでいた石化は既に解け、石化した部分も元通りに戻っていた。

「はぁ!!」

魅音の横薙ぎの一撃。少年は紙一重でかわし、飛び上がる。

「っ!?!」

少年がもと居た場所を見ると、それでもかというほど強烈な衝撃が打ち付けられたかの如く破壊されていた。

その爆煙の中から魅音がガンスレイヴを携えて飛び上がってくる。

「奔れ!!」

魅音の合図で一斉にガンスレイヴが少年に襲いかかる。あるものは射撃、あるものはスパイクに、と変幻自在の攻撃で少年を苦しめていく。

しばらく猛攻が続き、やがてその一発が少年に当たり少年はバランスを崩した。

「貰った！」

そこへすかさず踵落としを叩き込む。少年の後頭部に直撃し、少年は落下する。

だが、まだ魅音の猛攻は終わらない。魅音はガンスレイヴを纏めると、魔力の収束を開始した。

「面倒だから消えて貰うわ。スレイヴランチャー．．．シュート」

ガンスレイヴの放つ魔力が臨界に達し、少年に向けて放たれる。高濃度に圧縮された魔力は、少年を消すのにはあまりに強すぎた。ほどなく着弾し、その衝撃波で周りの建物すら呑み込んでいったからだ。

少年を葬った魅音は、私の元へ降り立つ。

「ちょっと強すぎたかな？」

未だ冥界の女王モードの魅音はあっはっはっ、と笑う。超然とした威圧感を放っているがとはいえず、あれから戦闘を呆然と眺めていた私はなんだかおかしくなって笑ってしまった。

「あ、そっちも終わった？」

「勝ちましたよ」

「なんとかな」

「ちよつと無理したけど．．．」

他の三人も傷付きながら、携えていた魔物を葬ったようだ。しかし通信は未だ繋がらないでいた。

「まだ繋がらない?」

「うん・・・」

「となると、外部操作ツスかねえ・・・」

貴輔は顎に拳をあてながら呟く。

いろいろ弄ってみたけれど、やはりどうにもならない。時間が経つか管理局が見つけてくれるのを待つしかないと思い始めていた頃、今度は別の魔力の奔流が来るのを感じた。

「なっ、まだ来るのかよ!」

「知らないっスよ!?!」

「・・・来る!?!」

ガーネットが指差した先で、転移魔法が発動していた。やがて空が歪み、その中から夥しい数の魔物が現れる。

「こ・・・これは・・・」

「なんなの・・・この数・・・!」

私たちはその数に戦慄する。パツと見ただけでも万は軽く居るだろう。

「ど、どうするのよ!!さすがに消耗した状態じゃ・・・!!」

「・・・魔法で逃げる」

「「「!?!」」」

私の提案に全員が振り替える。全員が呆然としていたが、やがて我に帰ったガーネットが反論してきた。

「な、なに言ってるのよ！？通信が繋がらないのに・・・！」

「魔法で入ってこれるなら、魔法で逃げられる筈。さすがに転送先が観測世界や管理世界になる可能性は高くないけれど、それ以外の世界でも休憩さえ取れば跳躍できる」

自分でも驚くほどの饒舌で、作戦を伝える。みんな半ば信用していない目だったが、程無く真剣のそれと変わらなくなった。

「成る程ね、確かにやる価値はある。けど五人同時の転送だと少し時間掛かるよ」

「それは私のガードスキルで防ぐ。転送魔法はたくさん魔力使うけど、五人の魔力があれば問題ない」

「・・・奏っちゃんがそういうならやりましょ。すぐに円陣と術式に」

「うんっ」

私は二、三步離れるとハンドソニックをクロスさせ、魔法陣を展開させる。そして私の魔力が噴き上がり、やがて大きな竜巻へと変貌していく。

「ガードスキル・・・フェザーストーム」

私は解号を唱え、風の結界を展開した。これで2分は最低でも持つ筈だ。

「さて・・・行くよ」

時間は残っていない。結界の完成を確認すると、ガーネットを中心に円になった。

「

」

ガーネットが転移の始動キーを唱え、私たちの魔法陣の周りに幾何学的な文字が浮かび上がった。そして、ガーネットの儀式は続く。

「魔力を込めて」

私はタイミングを見計らい、全員に指示を出して魔力を解放させる。ここまではよかった。

「．．．嘘!？」

ガーネットが突然詠唱を中断した。

「どうしたの!？」

「全員を転送するだけの．．．魔力がない．．．」

「「「なっ!？」」」

なんということだ。私達の間には戦慄が走った。

「じ、じゃあどうすればっ」

「誰か一人居なくなればなんとか．．．でも!!!」

皆がそんな簡単に自分の仲間を見捨てられるものか。ガーネットはそう言いたいのだろう。だけど、結界が持たない以上早くしなければならぬ。

「・・・私が残る」

そんな中、均衡を破ったのは魅音だった。

「そんな無茶だよ!!」

「そうだよ、俺が残るから!!」

みんなが制止するも、魅音はまるで聞いていない。やがてふう、と息をついてから口を開いた。

「なに言ってるの、こんなかじや私が一番強いでしょ」

「だからってそんな・・・!!」

「あー、はいはい」

ガーネットの反論を軽く聞き流してから、私を見据えて魅音は言った。

「皆の事・・・頼んだよ。大丈夫、私は強いから心配しないで」

そう言つて魅音は魔法陣から離れた。と、同時に転移魔法が発動し、結界が綻び始めた。

「魅音！魅音！」

私は涙を流しながら、彼女の名前を呼び続ける。そんな私の瞳に映る魅音は・・・

死ぬ覚悟を決めた英雄の眼差しをしていた。

「みお・・・」

私の呼ぶ声が終わらない内に、私達の体はこの世界から弾き出された。

「ん・・・」

あれからどれ程時間がたったのだろうか。何も分からない。

「起きた・・・？」

「ガーネット・・・？貴輔にロックも・・・って！！」

私は起き上がって周りを見渡す。だが360°真つ暗闇。いや、こうして足を留めているということは、地面もある筈。ために軽く歩いたが、大理石の廊下を歩いているような感覚がした。

「ここは・・・?」

「分からない。けど、少なくともここが私たちが飛ばされた場所みたい」

ガーネットもあたりを見回しながら答えた。しかし、最悪砂漠の世界や無法地帯を予想していたがまさか何もないとは。

「アタシの技術で調べても、ここがなんたるかは分からなかったっス」

貴輔もお手上げと言った風だった。

と、突然何かが壊れるような音がし、辺りにヒビが入り始める。

「くそっ、今度はなんだよ!？」

「世界の・・・崩壊!？」

『違うよ』

ガーネットの言葉を誰かが否定した。ガーネットははっとしてあたりを見回す。

「どうしたの、ガーネットっ」

「いや、誰かの声が聞こえた気が・・・」

『成程、この世界にいるということは無理矢理脱出したらしい』

今度は私にも聞こえた。このしゃべり方は・・・さっき魅音に倒された少年だ。恐らく相手にも話は伝わると思うので、ためしに台詞

を返してみた。

「貴方の仕業？」

『違うよ、あくまで僕は”もし、君たちがこの世界に来たときに導くための案内役”^{ナビゲート}に過ぎない。主犯格は、色々な世界を股にかけた魔物の組織だよ』

「なるほど．．．ならば、アナタたちの目的は？」

貴輔の問いに少年は答える。なんだかんだで律儀な性格をしているみたいだ。

『さあ、僕は雇われた身だし君の仲間^に倒されたのも僕の人形に過ぎない。僕はあくまでこの虚無の世界の管理人だ』

少年の口調はあくまで淡々としていた。続いてガーネットが質問をする。

「じゃあ、私たちが狙ったのは？」

『それも僕は知らないよ。少なくとも、残った君たちの仲間^に用があるみたいだ。まあ．．．何故かは興味がないところだけだね。さて．．．流石に彼女も疲弊して囚われただろう。君たちも覚悟を決めなければならぬ』

「「「「っ！」「」「」

少年の言葉に、私たちは身構えた。これ以上何をする気なのだろうか。

『別に戦う訳じゃない。それに刃を向けても正体を見せない僕に刃は届かない。君達がこの世界から抜け出すための代価．．．つまり自らに科す呪いを決めなければならない。そうだね、君の仲間は二

度と成長しなくなるから、それと同等の呪いを受けて貰おう』

「なっ．．．それはどう言う．．．」

『言い訳は聞かないよ』

そう少年が告げた言葉を聞いて、私たちは再び意識を失うのだった。

「．．．と言う訳よ」

「待て待て待て待て」

あー終わった終わったと言う風に息をついて、話を終わらせようとする奏を京谷が制止する。

「食らった呪いは？」

「ちゃんと言ったよ、体の成長が止まる呪いって」

「局長自身が言っていないでしょうが！？」

「確かに話から想像できますわよ」

納得がいかない京谷の横でスノウがふむ、と頷く。

「分からなかった？」

と、本気で驚いた表情の奏。京谷は啞然としていたがやがて、

「．．．だいたい言いたいことは解った」

と、身を引いた。しかし、直ぐに目付きを厳しくして問いかける。

「局長らの見た目に反した年齢については解った。それで、魅音はどこへ向かったんだ？」

京谷の問いに、奏に変わって貴輔が答えた。

「恐らく、もう一度アタシたちが魔物にやられた世界に向かったのではないだろうか」

「どういう事？」

セレナが口を挟む。貴輔は一つ頷いて続けた。

「そつス。魅音サン単体に成長などのストップをかけるのは非常に難しい。精密な対象座標の調整等がある上に魅音サンの魔力耐性も異常ですから。ならばどうするか？」世界自体の凍結”です」

「「「え？」」」

余りに突飛な発想に全員が間抜けな声を出した。

「そ、そんなことが可能なの？」

なのはがおろおろしながら貴輔に聞いた。貴輔はもちろん、と頷いてから続けた。

「まあ、それはそれで莫大な魔力が必要っスけどね。今のアタシ達全員の魔力をフル稼働させてようやく、といったとこっス」

「まさかとは思いますが・・・」

「大丈夫、一人では流石に天界の上位の者や神界の中位以上の者くらいの力がないと出来ない。もちろん、敵にいないとは限らないけれど・・・」

「でも、それくらいの力があれば単独で完殺出来ますよね」

と、フェイト。

「じゃあ、敵には少なくとも奏さんや浦原さんクラスの奴が居るってことか・・・」

俺はそれまでの話を冷静に分析した。となると、結構準備がいるのではないか。

「まあ全員で突撃すりゃなんとかなるかもしれないけど、流石にそれは出払っている間に襲われちゃ話にならねえな。どうするか・・・」

「あ、私付いていつてええやるか」

「はやてが？」

はやての言葉に俺は聞き返した。はやてはうん、と頷きながら言った。

「よう分からんけど、私行った方がエエかもしれん。・・・もしかしたら、”月詠の書”についてなんか分かるかも」

はやては手元に自身が回収した月詠の書を取り出した。

月詠の書は、どんなに調査しても創られた意図が分からない謎の書物だ。もしかしたらなにかあるかも、といつも持ち歩いていると言うのははやての弁。

「いや、それはないだろ」

「可能性は考えられるやん!？」

はやてが一所懸命反論する。

「まあどちらにせよ、分け方は考えなきゃならない。さて．．．どうするよ」

「俺に聞くのかよ」

「お前に任せてみるのも面白そうだ」

お前隊長だろうが。

「まあいいや。取り合えず分けるとして．．．魅音を追いかける組は俺とはやてに京谷、カルト、命で後は居残り。どうよ？」

「ん、守護騎士はどうする」

「ラウンズの権限で連れてくことも出来るけど、ヴォルケNZはヴオルケNZで仕事あると思うからわざわざ引き抜かなくてもいいだろう」

「ああ、と言うわけだみんな。居ないやつには俺が連絡する。以上解散っ」

「．．．了解っ」

これである程度の方向性は決まり、一旦解散となる。少しアルルにヒーリングして貰おうかと思っていた時、後ろから奏に声を掛けられた。

「どうかしましたか？」

「私も付いていく」

「そんな、局長としての仕事もあるのに」

「大丈夫、それに私が居ないと座標に行けない」

「はあ．．．成程、分かりました。無理はしないでくださいね」

「．．．うん」

そう言つて微笑んだ奏は見た目らしさと壮年らしさを兼ね備えた雰
囲気を醸し出していた。

- side ??? -

「どうやら、奴が還ってくるようです」

「ん、そうかい。二年探してようやく見つけたと思つたら・・・」

ここは、誰にも知られていない管理世界。いや、正しくは”棄てら
れた世界”だ。何らかの理由で管理する必要がなくなった際に押さ
れるEXWの刻印が世界の中心に浮かび上がっているのが証だ。
最も、それを刻印する理由はないに等しいのだが。

「まあいいか。君がご執心の”彼ら”も来るみたいだし一石二鳥だ
ね」

集まりのボスであるらしい男はあくまで明るく喋る。付き人の壮年
の魔物・・・人型だが・・・は一つ頷く。

「ええ、若の力を持つてすれば容易いかと」

「あはは、謙遜だよ。僕はあいつらと真つ正面から戦う力は流石に
ない・・・ま、この”時間跳躍”があれば余裕だけだね。けど、
君達が嫌だろう？だから、あいつらがここに来たら殺っちゃってい
いから」

「了解」「」

「ナイツオブブラウズ・・・がっかりさせないでくれよ。僕を楽しませてくれ」

そう言って、少年はニヤリと笑った。

Rewrite 9：龍牙天斬

話が終わって、奏や京谷たちが本局に帰り、旅行組はこれからどうしようかと考えていた。

「．．．やっぱり旅行は中止だな」

「「「えー．．．」」」

俺の決定に旅行組は非常に嫌そうな顔をする。無理もない、折角の旅行が訳の分からない魔物の襲撃で台無しにされたあげく旅行が打ち切りになったのだから。

その悲しさや切なさ俺もよく分かる。だけど、

「こんだけめつこめこになった大分の何処に観光できる場所があるんだよ．．．」

「確かに．．．」

フェイトが深く頷く。ヴォヌス亜種が湯布院をきれいさっぱり壊してしまったから正直湯布院には行けない。

かといって他の場所にいくのも少しアレだなあ．．．とも思う。

「そっぴやまだ別府は大丈夫なのかな？」

と、なのは。

「いやいや、ヴォヌス亜種がめつこめこにしたでしょ．．．」

「そっぴやね．．．」

みんなしてはあ．．．とため息をつく。

まあそればかりはな．．。

「一騎サン一騎サン」

と、後ろから貴輔に声をかけられた。

「ん？どうしたんですか？」

「今夜は大丈夫っスか？」

「まあ今夜くらいは．．。」

「それなら、アタシの店に来ませんか？モチロンみんなで」

「．．．は？」

「大丈夫っスよ、部屋はありますから。それに地下には運動施設や温泉もあります」

「「「温泉！！？」」「」」

貴輔のセリフに萎えていた全員が目の色を変える。どんだけ地獄耳なんだ。

「え！？あの温泉だよね！？」

「天然！？天然なの！？」

「はい、天然温泉っすよお」

「「「ひやつほーいっ！！」」「」」

「じ、じゃあ！！電気風呂やサウナとか．．！！」

「フルーツ牛乳！！」

「あるっすよお」

「「「貴輔さんばんざーいっ！！」」「」」

．．これが俗に言うキャラ崩壊か．．。余程旅行中止と見せかけてのサプライズ温泉がよっぽど嬉しかったんだな。さっきまでの戦士の眼差しは何処へやら、みんなして少年少女の瞳に戻っていた。

．．．と、希来は愛想笑い浮かべてるな。

「で、皆さん温泉待ちっスよ」

「．．．わかりましたよ、行きます」

「ではっ、アタシの転送魔法でちよいちよいっと」

貴輔の言葉に呼応して、いつの間にか入ってきていた鉄斎、タツキ、雨音が術式に入っていた。すごく手際がいいな．．．って！！

「あんた有無を言わず連れていく気だったる！？」

「え？何の話ですか？」

「シラを切るなって希来分かってたろ！？」

「確証はなかったけどね．．．」

どうやら希来にはすべてお見通しだったようだ。まんまと嵌められたと思いながら、俺達は浦原雑貨店に転送された。

I v i e w s e r e n a l

いやぁ、貴輔さん太っ腹だね。晩御飯だけでなく、お風呂もタダ提供だなんて。戦った甲斐あったわぁ。

ちなみにここは地下の温泉室だ。男女別浴で、一騎らは隣の露天風呂を使用しているはずだ。というか地下で露天ってなんなのよ。確かに地下の閉塞感を緩和するペイントがあるけどさ。

「でも疲れたよねえ」

なのは服を脱ぎながらはあとため息をつく。一番活躍できてないのに何を言うか。

「あはは、私やなのはちゃんの攻撃全然食らわなかったもん。なんや情けないなあ」

「戦う相手が悪かったよ。はやてやなのはのせいじゃないよ」

「そうそう、お兄ちゃんや貴輔さんがやっとこさ倒せるくらいだから非はないよ」

「．．．でも一騎は、はやてとランク一緒なんだよね．．．」

「ランクが同じであの攻撃力の差．．．羨えるわ」

一連の会話ではやてが一騎との差に意気消沈したようだ。

でもそれは仕方ない部分がある。一騎とはやてじゃ基礎的な攻撃力はもちろん、一騎の武器はデバイスではなく魔力がある刀二本だから魔力攻撃オンリーのはやてら魔導師が勝てるはずがない。ついでにえば身体能力も一騎は圧倒的に高く、吸血鬼である命に追いつく勢いだ。

「．．．京谷より一騎の方が化け物かも」

「どうしたの、セレナ？」

私のため息を聞き付けて、命が近づいてくる。既に服を脱ぎ終えるみたいで、脇には銭湯セットを抱えていた。まあ堂々とするものだから、命の年齢に反したでかい胸がバッチリ見えていて、それをなのはが自分の胸を押さえながら羨ましそうに見ていた。

．．．実は私も羨ましい。

「命ちゃん胸おっきいよね．．．」

「ん？そう？」

「うん．．．まだ私小さいし」

「えー？羨ましいかな？F Aの私は正直邪魔くさいんだけどってセレナ目が怖いよ！？」

氷漬けにするぞ即席ホルスタイン。

「セレナさん、私は気持ち分かりますから．．．」

必死に私を宥めようとする優希。

「お前もでかいだろうがああ！！」

「ああ！？セレナキレないで！？」

「フエイトちゃん優希ちゃんを安全なところに！！」

「う、うん！！」

「離して命！！あの天然ボケにないやつの辛さ分かせてやるんだ！！」

「だからそれがダメなのー！！」

- v i e w k a z u k i -

「．．．なにやってんだ？」

「さあ．．．」

俺と希来は隣の女性陣のどたばた騒ぎを耳にしながら、脱衣していた。まったく、元気な連中だな。

「あはは．．．元気があるのは良い事だよ」

「限度つてのがあるだろうが．．．」

「そりゃそうだね」

と、さらにヒートアップしたらしい喧騒を背に俺達は浴室に出る。
露天風呂と言えば露天風呂だが、ここを地下だと思つと無駄に綺麗な空のペイントも台無しだ。
つか、殺風景すぎる。勉強部屋というらしいが・・・いったいなんの勉強なんだろう。

「ほら、早く入ろ？」
「ん、ああ」

希来に急かされて、いそいそと湯船に体を沈める。地下温泉らしく、僅かにぬるつとした感触が妙に心地よい。また、絶妙な湯温もグツドである。

ちなみに温泉を飲んではいけないのは弱アルカリ性だからと思う。実際は知らん。

「んー、いい湯だね」
「まったくだ」

二人してほくほくしながら湯船に肩まで湯をつける。今思えばおっさんみたいだな・・・俺達。

「あれ・・・？」

希来が抜けた声をあげる。

「どうした？」
「なんか魔力とか傷が回復してるんだけど」
「って本当だ！？道理で痛くないと思つたら！！」

「ほんとだー」

「ってアルル！！突然現れるな／／！！心臓とかいろいろ悪いから／／！！」

「？」

「あはは．．．」

よりによって大人モードかよ．．．！！たわわに実った胸がアルルの存在感を強調し、つい目がいつてしまう。

「だって私と一騎は一心同体だよ．．．一緒にいて当たり前」

「さすがに風呂まで一緒はないだろ！？」

「離れていたときに敵襲があつたら危険だし．．．」

「いやいやいやいや．．．つかいくらユニゾンデバイスつってもお前は女の子だろうが」

「．．．役得痛つたあああああ！！なんで蹴るの！？」

「アホか！！俺たちだから良いものの他の男達から舐めるように見られていいのかよ！？」

何気なくいい体しているから余計にまずい。

「その時は．．．マスターが助けってくれるでしょ？」

アルルは大人びた顔らしくない可愛らしい笑顔を俺に向けた。普段のキリッとした顔を見慣れた俺はついドキッとしてしまう。

「どうしたの？顔が赤いよ？」

「うつせ．．．まあいいか」

「一騎優しいね」

「そうか？」

希来の言葉に俺は聞き返す。そう言えば昨日の朝あいつらからも俺は優しいと言われた気がする。．．正直、ピンと来ないのが実情だ。

「朝にも言われていた、って？」

「覚えていたのか．．．」

「まあね。自分でも気づいていないかもしれないけど、一騎は女の子が喜ぶこと自然に出来てるんだよ」

「それが全くピンと来ないんだが」

さっきのように命やセレナらがボケたときはキレツツコミだし、たまに手が出る。まあ料理とかなんやらは京谷がなぜか俺に一任させてくるからきつとそのせいだろう。

「一騎らしいね」

そう言っただけ希来はアンニユイな表情を浮かべた。その間にアルルがすすす、と寄ってきて俺の腕を取る。ちよつと待て、胸が当たってる。

「この温泉って疲れ凄く取れるね」

「そうだね、成分何で出来てるんだろう．．．」

「ここら、胸を押し当てるな」

「別に構わないじゃない、私はユニゾンデバイスだし」

．．．放置するか。頭のキレじゃアルルには勝てない。

「んー．．．」

そしてしばらく俺は考え込む。

それはもちろん龍牙天斬の事だ。たぶんあの斬撃を自在に撃てなければこれから先、戦っていけないかもしれない。」

「一騎、一騎っ」

「ぬあっ!？」

アルルの呼ぶ声で我に返る。どうやら結構な時間考え込んでいたみたいだ。

「もう、何度呼んでも返事しないんだから。早く出るよ」

「あ、ああ」

そうして、アルルに連れられ風呂を出るのだった。

それから食事も終え、なのはらはタツキ、雨音を交えて再びスマブラ大会に花を咲かせていたところ、俺は雑貨店の屋根の上にいた。
．．．まあ貴輔に呼び出しを食らった所以だが。

「来ましたか」

その声がした方を、俺は見やる。すると、いつもの下駄帽子姿だ。

「他の皆サンは？」

「浦原の子供も交えてゲームしてるよ。昨日の続きだろうな」

昨日はわざと負けてさっさと寝たからどんな試合だったかは知らないが、かなり盛り上がったらしい。

湯布院に向かう列車の中で命らがテンション高く語っていたから、余程楽しかったことが想像できる。

「そうですか．．．迷惑かけますね」

「命らからしたらいいカモ見つけたって感じだろうけど」

「はい？」

『だーッ！！また負けた！！』

『あははっタツキくん弱いねー』

『くっそ姉ちゃん無茶苦茶上手いじゃないか！！』

『そらあ勤務時間もゲームしてるくらいやからなあ．．．』

『ギクッ』

『あはは．．．』

．．．。

「．．．大丈夫なんスか？ ナイツオブブラウズともあるう者がサボりって．．．」

「．．．あんなだが、やることはやるから京谷も文句言わないんだ」

命はなんだかんだで頭がいい。なので要領よく物事を進める力を持っているが、それがいい方向に使われた試しはない。

ゲームが強いのはそのためだ。

「それで．．．どうして俺を呼んだんだ？」

「ああ、忘れてました」

そう言つて、貴輔は自分の武器．．．剣先が斜めに折ったような切っ先をしている刀を取り出した。

「アタシが呼び出したのは、龍牙天斬についてっス」

それは俺もどうかしなきゃと思っていたところだ。貴輔は続ける。

「一騎サン、アナタの戦闘能力はS+を遥かに凌駕しています。同ランク．．．まあカルトサンやスノウサンは兎も角、高町サンやフエイトサン程度なら圧勝も可能でしょう。ですが、それはあくまで魔導師間での話」

？話が少しずれているような気もする。だが、一応聞くことに徹した。

「今回戦ってみて分かったと思いますが、アナタの竜王刃は通用しなかった。一撃目がダメージを与えるまでになったのは奇跡です。これからアナタ達が相手する敵はそういう集まりです。だからこそ、ある剣は必ず自らの意思で撃てるようにしなければならぬ。．．．なにか分かりますか？」

「．．．龍牙天斬」

「ご明察」

貴輔は何処からともなく扇子を取り出し、広げた。それで自らに扇ぎながら話を続けた。

「アタシが見たところ、アナタは龍牙天斬を自らの意思で撃てているようには見えない。そうですね、必要以上の恐怖や怯え等はアナタからは感じませんし．．．なにか心の変化がトリガーになっているとアタシは見ました。ですので、その時の気持ちを思い出してもらおうかと。思い出せますか？」

「いやまったく」

「．．．まあそりゃあそうですねえ」

貴輔は分かっていたかのような素振りを見せ、空を見上げる。しばらくして、顔を再び俺に向けた。

「では、龍牙天斬を意のままに撃てる練習をしましょう。さすがにここではマズイので、上空で。アタシが先に行きますから、一騎サンはバリアジャケットに着替えてから来てくださいね」

貴輔は自らの刀を持ち直すと、慣れた動きで飛翔した。

俺は、セトアップの後白龍を取り出してから貴輔の後に続く。ある程度飛び上がると、上で貴輔が待ち構えているのが見えた。下を見やると、どうやら上空1300メートルくらいだろうか。ヴォヌス亜種が暴れた場所や、俺達が戦った場所が小さく全体に渡って見える。むしろ、大分全域が軽く見渡せそうだ。

「どおです？高いでしょう」

「ああ・・・全体が見渡せるとはな」

「でしょう？アレとか見えますよ」

貴輔が指差した方角をつられて見る。その先には噴煙を元氣よくあげる山が見えた。

「あれは？」

「阿蘇山っスね。九州じゃ有名な活火山っス。ヴォヌス亜種が出てきたのはそっから東に5キロの地点っス」

そこから軽く視点を移すと、そこには大きなクレーターのようなものが形成されていた。さすが巨大生物、残す傷痕も半端ではないな。

「さて・・・では、始めましょうか。一騎サン、その時の斬撃のイ

メージをしながら同じようにやってみてください」

そう言われて、俺はその時の龍牙天斬を撃った時のイメージを思い出す。たしか・・・刀を右に突き出したはずだ。そして多分魔力込めた。えーと・・・こんくらいか。これで・・・！

「龍牙、天斬ッ！！」

掛け声と共に瞬動で一気に貴輔の近くまで迫る。すでに貴輔はシールドを張っていた。僅かなテイクバックで一気に踏み込み、突きを繰り出す。

「・・・」

「・・・」

確かにそれっぽいのは出た。それっぽいのは。だが、そのそれっぽいのは・・・猫だった。

その猫は、てことと貴輔のシールドまで歩いてゆく。頭が触れるか否かくらいで・・・

きゅぽっ

可愛らしい効果音と共に爆発。猫が消えて数秒の後、貴輔のシールドが粉々に砕けた。

「．．．．．」

「一騎サン、座り込んでさめざめと泣かないでください」

非常に情けなくて仕方がなかった。あんなものが龍牙天斬だと知れたら爆笑ものだ。

「一騎サン、一騎サンはあの技を撃つときどんな事を考えていましたか？」

唐突な貴輔の質問。一瞬意味の理解ができなかった。どういう事だ？

「分かりやすく言いましょうか。新しい力に目覚めるとき、使用者には必ず明確な意思があるものなんス。例えば、敵をこの手で確実に討ちたい、大切な人たちを守りたいとか」

その言葉を聞いた瞬間、俺の胸で何かがざわつき始める。それは少しずつ大きくなり、やがてひとつのなにかに変わった。

「．．．分かりましたか？」

「悪い、浦原。巧く避けてくれよ」

「はい？」

「多分、手加減できない」

貴輔の言葉で、ひとつの確信が出来た。俺はそれを確かめるために、貴輔に警告し直ぐに刀を右へ突き出した。

イメージは．．．龍が牙を剥いて敵と対峙する。魔力を限界まで練り、そして込めた。すると、夕方に放った龍が同じように淡く形成

された。

「ッ!」

貴輔はヤバイと感じたか、すかさずシールドを展開した。

形成し終わるのと、俺が再び貴輔に突貫し始めたのはほぼ同時。さつきと同じく、僅かなテイクバックで一気に踏み込み、突きを繰り出す。

そして、”龍”が撃ち出される。龍は咆哮を上げ、貴輔のシールドに衝突する。が、数瞬して少しずつヒビが入り始めた。

「ッ!」

シールドが破られる方が先だと判断した貴輔は、刀を握った手を引き、魔力を装填する。

そしてシールドが破れた瞬間に、右足を踏み込み刀を振り抜く。そこから緋色の剣撃が撃ち出され、龍となんとか相殺させた。

「さすがっスね・・・アレだけでコツを掴むとは・・・」
「・・・」

正直なところ、まだ実感は沸かない。が、使うイメージはしっかり掴めた。

「龍牙天斬・・・咆哮を上げる龍のイメージ・・・か。やれやれ、殺意がトリガーとはな」

俺としてはちょっと大人げない気もするが・・・まあ僅かな時間で

コツを掴めたのは大きい。

「一騎サン．．．アナタは恐ろしい子供だ。後5、6年もすれば或いは京谷サンと渡り合えるかも知れませんか」

「？なんか言ったか？」

「いいえ、老いぼれの戯れ言っスよ」

「というか20代前半の身なりで52歳ってどうなんだ．．．」

「アタシは変身魔法使ってるっス。こっちの姿の方が割と便利なんスよ。他は見た目通りっスよ、あのままで成長が止まってる」

貴輔にもなにか思い入れがあるらしい。それを語る顔は殊勝めいていた。

「さ、用は終わりましたからとっとと降りましょう。皆さんが心配です」

「それは言えてるな．．．鉄斎が見てるんじゃないのか？」

「鉄斎は早寝っスから．．．」

「マジか．．．」

あらかた降りてくると、雑貨店の屋根が見えてくる。すると、なにやらリビングにあたる場所から喧騒が聞こえてくる。

『アホーッ！！ブラゼル打たんかいッ！！』

『しゃあ！！越智が抑えたぞ！！』

『あわわわ．．．はよてちゃんのテンションがああ．．．』

『はよてっ！大丈夫、新井が打つよ！！』

『せやな、ジャイアンツなんか即KOや！！』

『ああ！？ジャイアンツのほうが強いんだよ！！』

『落ちちゅいてくだひゃあい．．．』

「．．．」

訳の分からないトークに二人して絶句する。

「これはこれは．．．」

「早く行った方がいいな．．．」

妙な不安を抱えながら足早に着地、通常形態にしてから直ぐ様中に掛け上がる。声がする方へダッシュで向かい、一番やかましいと思われる部屋を思いっきり開けた。そこには．．．。

「じゃあ！！阪神のサヨナラ勝ちい！！」

「いやっほーっアニキサイコー！！」

再び甘酒とつまみ．．．さきいかやらなんやら．．．を片手に阪神のタオルを首に掛けなぜか上半身ブラのみ、下はタンクトップというどこぞの姉御みたいなはやて& amp・命と。

「クルーン！！」

と、近所迷惑よろしく雄叫びを上げるタツキ。

「はやてちゃん落ち着いてえ！」

「二人とも服を着てくださいっ！後タツキくんも静かに！」

と、テンションが上がる三人を宥めて回る希来とフェイト。

「うっう．．．私の立ち位置い．．．」

「お酒足りないよお！」

と、甘酒でバツチり酔ってしまい悪態をつくキャラ崩壊したなのはとMキャラとしての自分の立ち位置にさめざめと泣く優希。

「すう．．．すう．．．」

「．．．」

そして、我関せずで寝ている雨音とこれ幸いと黙々とつまみやらお菓子やらを食べるセレナがいた。

「．．．セレナ」

「あ、おかえり」

「この状況を簡潔に説明してくれ」

「スマブラしてたら、たまたま優希がリモコン蹴ってチャンネル変わってさ。そのチャンネルが阪神対巨人戦だったから一転して野球観戦に変わったんだよ」

「この大量のお菓子とつまみ、んで甘酒の説明は？」

「はやてがこの店からパクった。もちろん割り勘で鉄斎さんに払ったよ」

「あー．．．どうりでその辺ががっばりないなあと思えば．．．」

貴輔は納得したような表情を浮かべた。あの間にチェックしてしまふとは伊達に店をやっていた訳じゃないらしい。

「「はーんしーんたいがーす！！ふれーふれっふれっふれー！！」」

さらにテンションが上がったのか命とはやては六項おろしを歌い出す。タツキはorz な状態だ。

「あうあう．．．」

「一騎っ見てくるくらいなら止めてよ！？」

「あ、ああっ」

希来の声にはつと我に返り、制止作業に入った。
酔っぱらいの癖に無駄にすばしっこく、ようやく全員を完全に眠ら
せたのは午前二時を回った頃だった。

R e w r i t e 1 0 : 時の進まない世界

翌朝。

激闘の湯布院防衛戦．．．まあ湯布院は壊滅したが．．．、夜には俺は龍牙天斬の会得、それ以外は野球観戦とスマブラに明け暮れた昨日を思い出しながら俺は目を覚ます。

体を起こし、回りを見渡すとどうやら俺が一番最後らしく部屋には俺一人だけだった。携帯を見てもすでに10:00を回っており、ちょうどいい時間でもある。

「あ、起きた？」

ちようどなのはが俺を起こしに来た。さりげなく口許にごはん粒がついているということは皆は朝飯だろうか。

「ああ、おはよ」

「うん、おはよ。みんなご飯食べてるよ」

「わかった、すぐ行く」

面倒なので、寝巻きのまま向かうことにする。そしてなのはと二人並んで廊下を歩いていく。程なくなのはが話しかけてきた。

「ごめんねえ、昨日手を煩わせて．．．」

開口一番謝ってくる。おそらく昨日の騒ぎの事だ。

「つつてもなのはは悪態突いていただけだな。謝るべきなのははやてと命だろ．．．」

「すごい騒いでいたんだよね．．．恥ずかしいなあ．．．」

恥ずかしそうな表情をするのは。あれは仕事に不満があるサラリーマンよろしくだった。魔王ネタや”少し・・・頭冷やそうか”等あらゆるネタに使われるエースも悩むべきことがあるのだな、と思う。

「というかみんな起きたときに起こしてくれても良かったのに」「そうしても良かったんだけど、お詫びも兼ねてゆっくり寝かせてあげようって命ちゃんが」

なるほど、命の差し金か。命の癖に気を使うのだな。

「まあ皆がいるとこなら一騎くんもキレイないよねーってはやてちゃんと二人で話してたけど」

前言撤回。後でぶつとばす。

そんな感じの会話をしながら歩いていると、昨日奏が昔話を語った大部屋につく。襖を開けると食事を摂り終えた旅行組と貴輔達、そして魅音を追いかける組である京谷、カルト、奏がいた。

「って俺の飯は」

「作ってないよ。代わりに朝ご飯用の弁当入れたんだよ」

俺の問いにセレナが答えた。俺はなるほどと答え、京谷達の方を見た。

「おはようさん。ちゃんと覚えられたのか？」

京谷の言う”ちゃんと覚えられたのか？”は龍牙天斬の事だろう。

「ああ」

「よし、じゃあ言うことはないな。はやて、命、カルト、局長」

そう言つて京谷は立ち上がり、呼ばれた全員も立ち上がった。それに続いて俺も立ち上がる。

「ねえ京谷くん。私たちは？」

と、なのは。

「あー．．．そうか。空港もこの騒ぎじゃお釈迦だろうなあ．．．」

京谷はそれを考慮してなかったようだ。しばし考え込む。

「それなら、私達が行く前に私が転送させる」

「局長が？」

「うん、私の転送魔法は管理局直通の術式を組んだからそんなに魔力を食わない」

奏がこつちに来たときは、次元に縦の裂け目を加えてこちらに来ていた。それはそれで、次元の狭間に落としてしまわないような制御が必要なため、精神的にしんどい気もするのだが。

「じゃあ局長、頼みました」

「うん、頼まれた」

握り拳をグツと握り、決意を固める奏。

これだけを見ると、年頃の少女らしいなと思う。中身は凶悪な魔導師だが。

「そんじゃ、地下に降りましょう」

貴輔の号令で、店の店主席の畳を開けると現れる勉強部屋への階段から、地下の勉強部屋に向かう。全員が降り立つと、そこには鉄斎が居り、なにやら転移するための魔法を組むための準備をしていた。

「てっさーい、準備はどんな感じっすか？」

「はい、現在でだいたい90%程です。後10分もあれば準備は完了です」

「10分・・・奏サンが帰宅組全員を転送すればちょうど良い時間じゃないですか？」

貴輔は奏に確認をとる。それを聞いた奏はこくりと頷いた。

「うん。じゃあなのは、フェイト、優希、希来、セレナ」

奏は帰宅組の名前を呼び、一ヶ所に集める。

「じゃあ転送するからそこに居て」

奏は胸ポケットから自らのデバイスの待機モードであるマグライトを取り出すと、セットアップを唱えた。

すると、局長正装から程なく自分の武器”ハンドソニック”を両腕に取り付け、40年前の最強のエースの証”SSS”の紋様が入った制服姿に変わった。奏曰く、”学生ブレザーの方が動きやすかった”とのこと。ちなみに貴輔が古くさい服に身を包んで戦闘するのも同様の理由らしい。

「

」

奏は天使の翼を広げると、術式に入った。すると、なのはらの周り

に風の渦が生じ、その正面ではメスでスツと切り傷を入れたかのように縦に次元の裂け目が生じた。

「局長」

「なに？」

術式の途中の奏に京谷が話しかける。

「転送先は大丈夫なのか？」

「うん、ガーネット呼んでるから」

「そうか・・・」

それっきり会話が終わる。なんの意味があつたのだろう。

「大丈夫、入って」

奏の声で、一人ずつ裂け目の中に入って行く。やがて最後の一人であるフェイトが入り、裂け目は再び閉じた。

「うん、これで転送は終わり」

やれやれといった表情を浮かべながら、奏は語る。それを見届けた貴輔は鉄斎の方を見た。

あちらもちょうど終わったようで、鉄斎は立ち上がってゆっくりと頷いた。

「魔法陣の固定、完了しました」

「ん、了解。じゃあ皆さん集まってください。アタシと奏サンから緒注意があります」

貴輔は全員を集めた。そして奏が前に出る。

「じゃあアタシから説明しますね。これからアナタ達が転送される先は第6元管理世界”ジエネシス”っス」

「元管理世界？」

聞きなれない単語にはやてが聞き返す。

「どうしようもねえ理由で管理が不可能になったとき、管理局が管理を放棄した．．つまり”棄てられた”世界の事だ。俗にエクスワールドとか呼ばれてンじゃねえか」

それに対し、カルトが口を挟む。伊達にラウンズ最高の頭脳をしているわけではない。

「そっス。この場合は時間の凍結が理由っスね。（まあ管理局が世界を捨てるなんてあり得ないっスから、魅音サンを使えなくするために世界ひとつダメにしたようなもんっスねえ）」

「なんか言ったか？」

「いえ、何も。それで本題ですが、そういった棄てられた世界は一般的に悪の組織や魔物、あるいは犯罪者の隠れ場になりやすいものっス。それはつまり、”非常に高ランクの魔物”がいる可能性もあります」

その言葉に、はやて、命は息を飲む。

「つつても一度目を通した世界なら、高ランク魔物が出たら一応チエックされるだろ」

と、京谷。

「ええ。ですが、この場合はその限りではありません。ジエネシスは時間が止まっていますから」

「なるほど．．．置き去りにされた、ってことか」

京谷は納得した表情を浮かべた。続いて貴輔に代わり、奏が喋り始める。

「要約すると、ジエネシスの敵は強い。下手したら痛手を負つかもしれない。だから、これはあくまで深追いはしない。私が京谷が不可能と判断した時点で私の転送魔法で管理局に戻る」

「ほな、不可能やなかったらどないするんですか？」

「それでも、この戦力じゃきつと倒せないから多分キリがいいところで引き上げる」

「了解や」

とりあえず、目的は簡単に理解した。一つは戦力の調査。二つ目は魅音の追跡。

「よし、行くぞ」

「．．．おおっ！．．．」

京谷を筆頭に魔法陣に全員が入る。

「じゃあ発動させるっすよ」

貴輔は印を結び、魔法陣が淡く光を帯びる。

そこから魔力の奔流が走り、俺達を風が包み込む。

「気を付けてくださいね．．．ラウンズの皆さん．．．」

貴輔の身を案じる言葉を背に、俺達は魅音らの終わりの世界、ジェネシスへ転送された。

「着いたよ」

奏の言葉を聞いて、全員が目を開ける。

そこには別段何かあった様子もなく、何気ない日常を過ごす小さな村が広がっていた。

が、それはあくまで生活だけで満月が中天から欠片も動く気配がない。むしろ、ほとんどの自然現象が停止しているようだった。

「これは・・・」

「この辺りは効果が少し薄い。魔法陣の中心付近まで行けば人すら止まってるよ」

「こここの奴等は気付いているのか？」

「ううん、この人達は後で全員記憶を改竄されているから・・・。
いうなればここに住んでいる人間はNPCって事」

「NPC・・・」

京谷は奏の言葉を反芻する。奏の言葉を要約すると、この世界の生物は定められた行動パターンに従って動いているという事だ。

「それやったらまるで・・・人形と同じやん・・・」

「・・・そうだな」

「それじゃあ、行こ？」

「了解だ」

「ああ」

「はいっ」

「オウ」

「うん．．．」

五者五様の返事を返して、俺達は奏を先頭に魔力反応が強い点．．．つまり奏たちが戦闘した都市へ向かって飛ぶ。夜らしく風も強いため、僅かに寒い。

しばらくして、俺の隣を飛んでいた命が話しかけてきた。

「そういえば夜だねえ」

「それがどうかしたのかよ」

「ほら、私吸血鬼でしょ？だからいつもより魔力が強くなるんだ」

命が少しだけうきうきしながら話す。思えばこいつは吸血鬼の亜種だったな。月が満月になると、吸血鬼は魔力が膨れ上がるらしい。逆に新月になると魔力が薄れてくる。

紫苑のように圧倒的な強さになったらそこまで意識されないが、力の力はまだ発展途上。なので、力の増減の量は非常に幅がある。ちなみに、命の魔力ランクは新月時のもので判定されているので、敵からは最低の実力を見ていることになる。

「ふふふ、久しぶりにアレが使えるかな．．．」

「あまり乱用するなよ？アレは特に桜の制御が．．．」

「何の話だ？」

そこへ京谷が口を挟む。

「うん、私の新しい技．．．というか本当の必殺技が使えるそうだね」

「ラスオブツウェイじゃなくてか？」

「アレは本家の紛い物だよ。新月の日でもそれなりのラッシュが出来るように改良したんだよ」

「なるほど．．．つか命の技は竜剣やラスオブツウェイくらいしか見てないな．．．」

「なにいつてんだ京谷ア。俺と月城が仕合った時にストリーム使ってたじゃねえか」

「そうだっけか？」

ストリームは命が自らの体に風の魔力を乗せ、機動力を上げて戦う身体強化系の技だ。身体強化を嫌う命自身は突攻時にしか使っていないため、ストリームという魔法自体が命の竜技名として成り立っている。

「妙なところで記憶力が悪いねえ、京谷くんは」

「悪い悪い、お詫びになんか教えてやるから」

「．．．」

「むっっちゃ嫌そうだな」

「チートキャラになるのが嫌なんじゃね？」

「さっすが一騎！分かってるじゃん」

「デメエ！」

「まあまあ京谷くん。お詫びに私達の入浴写真上げるから」

「え？マジでつてはやて蹴るな！！なんか異様に痛いから！！つかはやて目が据わってるぞ！？」

「京谷がいいようにやられてる．．．」

今までの顛末を見て、ぼつりと奏が感想を漏らす。

「姉御肌の奴には敵わないんだよ、京谷は」

「一騎は．．大人しいけど、ここ一番で大胆な子に弱い」
「そうかあ？」

奏の言葉に俺は疑念を抱く。

「うん。私はちゃんと見てた」

ちゃんと見てた。ますます意味がわからない。それを聞き返そうとしたとき、

「散開ッ！！」

カルトの怒声で霧散した。全員がハツとしたように各々の方向に散開した。その直後、幾条の光の矢が飛んでくる。

「魔物が．．．」

京谷が呟く。そして京谷は体内からフィオネを呼び出す。

「って京谷くん連れてきとったん！？」

「そりゃあ京谷は私のマスターなんだからついてくるでしょ？」

フィオネはさも当然のように言う。

「まあそれはいいからフィオネ、あいつらの能力を看破してくれ」
「了解、我が主（イエス、マイロード）」

フィオネはすぐさまライブラを展開して敵の能力を看破し、データを構築して全員のデバイスに転送した。ちなみにその間2・5秒。

「ガーゴイル．．．ちょっと厄介」

奏はそつと呟いた。石化を操る敵だからこそその見解だろう。だが京谷は。

「よし、焼き払うか」

「「「な!?!」」」

あまりの大仰な発言に全員が京谷の方を向く。

「な、なにゆうてんのん!?京谷くんの力でもアレは．．．!」

「まかせとけて。ほら、下がりな」

京谷は全員を安全圏まで下げると、ガーゴイルの軍勢の前に向き合った。そして印を結び、術式を唱え始めた。

「ゴッドテイル デストラクション マギステル。契約に従い 我に従え炎の霸王。来れ浄化の炎 燃え盛る大剣」

京谷が詠唱を始めると、京谷が自前で組んだという魔法陣が現れ、魔力の奔流が走る。この言霊は．．．。

「全員もつと下がれ!!こいつは”燃える天空”だ!!」

いち早くそれに気づいた俺は全員をもつと後ろに下げる。ガーゴイルの軍勢はその間も近づいてくる。

「ほどばしれよソドムを焼きし、火と硫黄 罪ありし者を死の塵に!!」

そこまで言い切り、京谷はガーゴイル達の元へ飛翔する。そのまま流れるように、開いた右手をガーゴイル達の前に突きだした。

「燃える天空” ツ!!」

唱えられた瞬間、ガーゴイル達に一条の光が走る。数瞬遅れ、先頭のガーゴイルを爆心地として巨大な爆発を巻き起こした。

「ひゃっ!？」

「おっと」

俺は気を抜いて飛ばされそうになったたはやてを受け止めた。

「あ、ありがとな・・・」

「しかし・・・見れば見るほど反則だよなあ」

「全くだね」

魔力の残滓の残る爆発跡を見ながらの呟きにフィオネが大きく賛同する。

”燃える天空”。

燃える天空。炎属性の魔法ではほぼ最上級とっていい魔法だ。さらに京谷の場合は反則的な量の魔力を体に蓄えているため、従来のそれより遥かに効果範囲は大きく、かつ破壊力がある。

そんなわけできれいさっぱりガーゴイル達は消え去っていた。

「ちょっと強すぎたか？」

一瞬で片付いたため、余裕の笑みを浮かべる京谷。

「京谷．．少しは自重して」

「なんでだよ？」

「ほら、あんな目立つの撃ったから番人が気づいた」

奏が指差す方向を俺達は見る。すると、そこには一匹の竜種がいた。

「ミラーフォースかよ．．厄介だな」

ミラーフォースドラゴン。正確には竜種ではなく、アーマーズドラゴン機巧龍にカテゴ
リーされる。主に飼われた龍が命を失う前に機巧化される場合が常
で、量産型や自然発生は物理学的に有り得ない。

その中でミラーフォースドラゴンは幼龍を改造されたため大きさこ
そ2〜3m程だが、強さは破格である。京谷以外ならスノウやカル
トでも苦戦するだろう。

「よし、もう一発俺が私がやるよ」なっ！？」

意気込んで向かおうとした京谷を制止して、命が名乗り出る。

「お前の魔力でなんとかなるのか？」

「ふっふっふっ、京谷くんアレを見たまえ」

命は上機嫌で中点の満月を指差す。

「満月がどうかしたのか？」

「分かってないねえ。一騎、答えは？」

俺に振るな。

「吸血鬼は満月の時に魔力が強くなる」

「と、ゆー事」

「だけどAA程度で・・・」

「京谷、月城のAAの魔力は新月ン時だ」

「マジかよ!？」

おーっと命さん京谷に秘密にしていたようだ。

「まあそういうわけだから私に任せて」

「だが・・・」

「んなら、俺がついていつてやる。なら文句ねえだろ京谷」

「・・・ああ」

カルトが付いていくということで京谷も納得したようだ。

「じゃあ私達は先に行こ？」

奏が口を挟む。それを聞いて頷いた京谷は俺達を呼んだ。

「先に行くぞ」

「ああ」

「せやけど・・・」

はやてはいまいち心配なようであろをチラチラ見る。

「大丈夫だ、二人に任せときな」

「一騎くんがそう言うなら・・・」

そんなわけで、俺達は命らを残して先に進むこととなった。

- view mikoto -

さて、先に行かせたはいいけど。

「さてどうやるかなあ．．．」

「策無しかよ」

カルトさんからの厳しい突っ込みが入る。私は言い返せない。

「まあ．．．ねえ。けど今の魔力なら力押しでもなんとかなりそうかな？」

「そうか．．．俺ア死にそうになるまでは手え出さねえからな」

「うん、分かったよ」

そう言葉を切り、私はミラーフォースの元に降り立った。それに氣付いたミラーフォースは咆哮をあげ、直ぐ様突進してきた。

「やあああ!!」

私は瞬動をかけて一気に迫る。そしてすり抜け様に腹に一撃を加える。

「ガアア!!」

敵は吼えるが、まるで効いているわけではない。さらに私はオベリスクを構え直し、身体強化”ストリーム”を掛けた。これは私の十八番だ。再び瞬動を掛け、オベリスクで縦に斬り伏せる。しかしこ

れは右腕の大剣で止められてしまった。

だが、それは予想の範疇。私は直ぐ様左手に風の魔力弾を形成し、敵の腹に撃ち込む。

私の魔力は満月に強まり、新月に弱くなる。だが、それを私は考慮して魔力ランクは新月時に取るようにしている。なので、普段から魔力ランク以上の活躍をすることが出来る。逆に言えば敵からは侮ってみられやすいということだ。さらに満月時の魔力量は単純計算でもSSは裕に行く。

そのSSランクの一撃を至近距離で叩き込んでいたくないはずがない。私はミラーフォースを思いきり吹き飛ばすことに成功した。

吹き飛ばされたミラーフォースはそのまま後ろの廃墟ビルに突っ込み、上から支えを失いバランスを崩したビルが音を立ててミラーフォースに降り注ぐ。

私の稀少技能”風変換”では殺傷能力に非常にバラツキがあるが、こういった間合い取りや戦闘では鳥族や空を飛ぶものに対し非常に有利だ。しかし。

「まあそんなに効いちゃいないよね・・・」

私はぽつりと毒づく。大きな山になった瓦礫を押し退け、中からそこそこ汚れたミラーフォースが姿を見せた。外傷はほとんど見てとれない辺り、非常に硬いということだろうか。

私はゆっくりとオベリスクを構え直し、カートリッジをひとつ撃ち込む。

「風雷逆巻け、風蓮”かざつれ”」

すると、オベリスクの刃の部分を中心に竜巻が巻き起こりだす。私がミラーフォースに突撃したのとミラーフォースが起き上がったのは同時だ。私は竜巻によって巻き込んだ小石を孕ませた一撃を左薙ぎに叩き込む。しかし、踏み込みが甘かったのか決定打にはならなかった。そして、ミラーフォースの縦の一閃を受け止める。

「ウゴア、ア、ア、！！」

ミラーフォースが吼え、剣に炎が纏われていく。さすがに柄では受けきれないので払いと瞬動を同時に使い、脱出する。が、かわした方向に炎の奔流が伸びてくる。

「くっ！」

が、払った反動と風蓮があるため私は難なく振り払う。さらにその炎をも巻き込み、オベリスクに纏われた竜巻はさらに威力をあげる。

「でえやあああ！！」

そして瞬動で敵の胸元に迫り、インファイトに持ち込む。まあお互い長物だから私も不利だが、ここは炎を纏わせた斬撃を受けないようにするのが優先だ。

まずは顔を狙う一閃。しかしさすがアーマードドラゴン、見事にかわした。そして飛び上がり敵の背後に着地、同時に逆手に一撃を加える。今度はしっかり当てた。私はまだ攻撃の手を緩めない。

私は反転して、オベリスクの切っ先を敵の背中にあてがい、解号を唱えた。

「風雷撫で巻けッ！！」

実は風蓮はただ風の刃を纏わせ、あらゆるものを巻き込んで刃とするだけではなく、それを解放して敵に打ち出すこともできる。むしろ、風を纏わせる”風雷逆巻け”から纏わせたモノを弾き出す”風雷撫で巻け”までの一連の行動こそが、風蓮という技の真髄だ。

そして、ミラーフォースは風の刃で身を裂かれ、巻き上げた瓦礫や炎に削がれて焼かれ、大きな痛手を受け悲痛の叫びをあげた。

「ッ！？」

咆哮につられるように大地が割れ、隆起する。さらに私の立っていた場所が隆起したため、私はバランスを崩す。そしてその矢先に、再び炎の奔流が私に襲いかかった。

「風車ッ！！」

カートリッジを撃ち込みつつすぐさま跳躍し、片手でオベリスクを回す。

風車は優希のクロスジャベリンを使ったボタン防御に似た、風の近接防御魔法だ。それで何とか振り払い、事なきを得る。

私は後手に回らまいと、手頃な瓦礫を踏み台に瞬動を掛けた竜剣でミラーフォースの鎧を砕く。その与えたダメージは私の魔力に変わったが、大したダメージではなく思ったほど癒えなかった。しかし、そこで敵は僅かにぐらついた。

今だ！！

すぐに風を全身に纏わせ、私のいつもの突撃の体勢を作り、ラスオブツウエイを仕掛ける。風の5連突きは、さらに大きなダメージを

与える。

しかし、最後の一撃を剣で止められた。

「!？」

「ヴガヴッ!!」

そのまま、敵は思いつきり剣を振り払う。剣の腹で叩きつけられた私は私がミラーフォースにしたのと同じように瓦礫に突っ込む。飛ばされつつ目の端で敵を捉えると、更に追撃をかけようとしていた。

「火這大蛇” ひばいだいじゃ” ツ!!」

そこへカルトさんの援護。放たれた炎を纏うロンギヌスが地面に突き刺さり、炎が地中に撃ち込まれる。それは大地を這う大蛇のようにミラーフォースの元まで向かい、直下で火柱を上げた。

「いくら火属性でも、あれを食らえばしばらくは動けねエ」

そう言いながらカルトさんがロンギヌスを回収しに降りてくる。さすがラウンズ03、破格の戦闘能力だ。

「変われ、俺が殺る」

「・・・大丈夫です」

その願いを遮り、私は立ち上がる。

・・・痛た、肋やつちやつたかな。ちよつと痛い。

「怪我してんだろ」

「吸血鬼だから大丈夫です」

「・・・じゃあ、あいつを倒す隠し球でもあンのか」
「・・・もちろん！」

そう言つて、私はオベリスクを一回ししてカルトさんの前に出た。
私の隠し球はひとつ。そう、今の魔力では満月の夜にしか出せない
必殺兵器。
やがて火柱が収まり、ミラーフォースは先ほどのダメージを忘れて
一目散に突撃してきた。

「来るぞ！！」

そんなカルトさんの檄を背に私は仁王立ちする。そして、剣を降り
下ろしたのと同時に、

「ガッ！？」

敵の背後に縮地で回り込んでいた。

縮地は高速歩術のひとつ、瞬動の上位種で極意は動きを悟らせない
部分にある。

「ガウッ！！」

敵は振り返り、私がいた辺りを薙ぎ払う。無論、振り返った頃には
再び背後を取っているわけだが。

「桜・・・！？」

カルトさんがそこでようやく私の変化に気づく。そう、私が立ち上
がり私が通過した場所には僅かずつ、桜の花びらが・・・正確には

私の魔力で生成された桜色の魔力の集合体だが．．．舞っていたのだ。
そして私が今いる場所では、桜がより多く、ひらひらと舞い落ちて
ている。

「私はさ、まだまだ未熟だから満月の時は自分の力を制御できない
の。だからこうして余剰魔力を桜の花弁にして舞わせてるのよね。
．．これなら、いくらがさつな私でもさ．．綺麗になれるでしょ
？」

私はそんなどうでもよい事を理性を持たないミラーフォースに語っ
ていた。無論．．カルトさんの存在など頭から飛んでいた。

「少しでもしおらしく．．儚く見えるようにした結果が、この技。
．．でも、私には儚さは似合わないみたいでさ．．」

私の体の周りで、桜が吹雪く。やがて、それは次第に殺傷能力を持
ち出し、辺りの地面や瓦礫を切り始める。

「．．．桜華狂咲」
おうかくるいさき

すぐさま瞬動をかけ、背後を取る。オベリスクを振りかざすと、そ
の軌跡に追隨して数多の桜の刃がミラーフォースの身を裂いていく。
さらに敵の左足を斬りつけながら、その後ろへ回り込みつつ片手で
オベリスクを逆回しし縦に体を斬った。そこから敵の鮮血が勢いよ
く吹き出し、敵は咆哮する。私はその返り血を浴びながらも、攻撃
の勢いは加速、さらに纏う桜も次第に増えていく。

「おいおい．．暴走じゃねえのか」

そんなカルトさんの嘆息も聞こえない。むしろ意のままに操れ過ぎるのが怖い。これは目の前の敵に集中できているからだだろうか。

「しっ！！」

今度は敵に刃ではない方を向け、そのまま顎へ向け突き上げる。クリンヒットしたようで、思いきり仰け反った。

次いでその勢いをそのままに敵の腹を踏み台に瞬動で飛び上がり、再び刃を敵に向けた。同時にそれまで私の周りを舞っていた桜を全てオベリスクに纏わせた。

狙いは・・・心臓”コア”。

私は狙いを定めた。

「いつけえええええッ！！」

そしてそのまま投擲した。14歳の私でも、吸血鬼真祖の亜種だとしても、身体能力は成人男性の数倍に匹敵する。更に桜の刃を纏わせた状態だ。無論、ダメージが蓄積した敵が避けられるはずもなく、放たれた槍はコアを貫通した。

R e w r i t e 1 1 : 時の進まない世界2

- v i e w k a z u k i -

命とカルトが残り命が死闘を繰り広げている頃、俺達は魔法陣の中心近くのビルに来ていた。

奏曰く、”魔法陣の中心には誰もそのままいけない”らしい。なのでこの近くのビルにある洞窟を使うそうだ。

「といつかなぜその事を？」

「昔、みんなで一回来たことあったから・・・」

「みんなで？」

「うん、貴輔やロック、ガーネットで休みの時にね。かなりボロボロにされた挙げ句に何も手がかりはなし」

「ええ！？局長が！？」

はやてがたじろぐ。やはりあれ程の術式が使える人がコテンパンにされるのは、俺でも想像付きにくい。

「でも事実だよ。敵組織の幹部に当たる人は非常に強いから・・・」
「マジか」

「うん、本当。私でも何回も痛手を受けた。けど・・・それでもあらかた倒してるから、昔ほどの敵はいないと信じたい」

そんな事を言いながら散策する俺たち。すると、はやてが地下への入り口らしき場所を見つける。

「あ、あれやない？」

「うし、じゃあ行ってみるか」

「待つて」

奏が駆け出そうとした京谷とはやてを制した。俺は直ぐ様入り口の先を見やる。

「．．．魔物！！」

見たところ数は四。タイプはアンデットだろうか。だが、アンデットにしては動きが機敏だ。

「気をつける！！そいつぁ人間だ！！」

「な！？」

京谷の叫びにはつとする。よく見れば目は虚ろだし、包帯やら壊れかかった鎧を着けているが確かに人間だ。

「やりにくいな．．．アルル！！」

『うん！！』

来る前に予めユニゾンしていたため、普段よりは機敏に動ける。素早く黒龍を取り出し、敵の一撃を刀の腹で受ける。

「遅え！！」

それを払い、兜割りで切り捨てる。左右に別れた半身から、勢いよく鮮血が吹き出す。

「ひ．．．っ」

本場の殺人を生で見たためか、はやては小さく悲鳴を上げる。対照

に京谷はかなり苛立たしくしている。

「なんで斬りやがった!？」

「はあ!？」

他の攻撃をいなしつつ、場違いな怒りを向ける京谷に俺はまともな答えを返せない。

その間にも、左右から穿ってくる一撃をかわして間合いを取り、剣に魔力を込める。

「破魔・・・竜王陣!!」

固まっていた箇所範囲攻撃を撃ち込み、決着をつけた。敵の無力化を確認してから刀についた返り血や脂を振り払い、鞘に納めて振り返った瞬間。

パアンツ

乾いた張り手の音が訝した。

「デメエ・・・今自分がなにしたか分かってんのか!？」

「見て分からないのかよ」

「なにがって、お前は罪がない人間を殺したんだぞ!？」

そこでようやく意味を理解した。

京谷が怒りを露にした理由。それは、いくら刃を向けてこようと自らの真の意味でないなら殺めないという己の信条からだろう。

「罪があろうとなかろうと、刃を握って現れた以上はそれは等しく戦士だ！刃を握り、殺めようとして来る奴を斬って何が悪いんだ！？」

対照に俺は、”義一文字”を信条にしている。

これは、”自らが正しいと思う道を自らの戒めとせよ”という意味を持たせている。

なのでたまにみんなと思いきり意見が違える。

「だが！！」

「そこまでよ」

奏が京谷を制した。さすが局長、貫禄のある行動だ。

「京谷・・・確かにいきなり殺すのは少しは芳しくないかもしれない。けれど、その不殺の信念は今回は捨てなさい。殺れるときに殺れる勇気がなければ、幾ら貴方でも死ぬ」

「・・・分かりました」

渋々京谷も奏の言葉に従った。恐らく、管理局の中で京谷を説得したり止められる上司は奏くらいであろう。その奏はふう、とため息をついてから俺の元に歩み寄る。

「まあお互い相反してる考えだからぶつかるのは仕方ないけど、少し位は視野をね？」

「ああ・・・分かってるよ、局長」

「うん。それじゃあ降りましょ」

「・・・はいっ」「」

そうして、俺が倒した屍を踏み越えて階段の前に立つ。軽く覗き込

んでみると、全く前が見えない。

「どっただけ続いてるんだ．．．？」

「んー．．．」

奏は俺の疑問に唇に指を当てながら、考え込む仕草をする。
数秒してから真面目な顔で、

「地下三階まで一直線」

と言った。

「「「．．．」」」

それに対し、全員が黙り込む。理由は簡単。

「なんでそないに現実的な数字やねん．．．」

「あまり長いと緊急事態に駆けつけるのがしんどいし、かといって短いと動きが分かれるから、この数字が一番いいんだって」

「なぜその事を？」

「倒した敵が雑学で．．．」

奏が倒した魔物はオッサンか。

「世の中には親切な魔物があるんやねー．．．」

「それは人間と同じで、優しい人もいれば酷い人もいる。結局は見た目程度の問題」

「まあ今回の敵は好戦的そうだな」

「なはは．．．」

とまあ、軽い無駄口を叩きながらそこそ長い階段を降りる。最後まで降りてくると、目の前には広い空間と三つの入り口があった。

「なんか．．．いかにもって感じだな」

「全くだな」

ふたりして同じ感想を述べる。しかし、そんなことよりも進み方をどうするかだ。

「局長はどうします？」

「この場合は、私と京谷と一騎がそれぞれ行くのは確定。問題ははやてをどうするか」

「私？」

奏の分析にはやては目を丸くした。なぜ呼ばれたか分かっていないらしい。

「確かになあ．．．敵の強さが分からない以上、おいそれと連れていけないよな」

「ああ、詠唱しないとほとんどの攻撃が使えないはやてを守りきるだけの戦力がいる」

「なんか酷い言われようや．．．」

「一騎は？」

「俺あ無理だ。多分自分だけでいっぱいいっぱい」

「そう．．．なら京谷がいいかな。私のハーモニクスはすごく魔力食うし、分身制御だけで一騎みたいにいっぱいいっぱいかも．．．」

「それにフィオネの存在もでかいだろ？」

「だったら一騎もアルルが居るじゃないか」

『残念ながらフィオネほど私は強くない』

3人の作戦会議中に京谷のセリフにふと、アルルがフォローを入れる。

『そうかな？やったことないから分かんないけど・・・』

『・・・やりたいとは思わない』

同じくユニゾン状態のフィオネからアルルに念話で話しかけたが、アルルは正直やりたくなさそうだ。

「つか手数豊富さから言えば、京谷に任せるのが一番いいだろ」
「んー・・・それでいいか？はやて」

しょうがないな、と言わんばかりにはやてに聞く。

「ええ！？そ、そらあ・・・京谷くんがええなら・・・」

対するはやてはわずかにときまぎしている。それを見た俺と奏は顔を見合わせて首をかしげる。

「ま、まあ・・・私と一騎が単独、京谷がはやて連れていくので良いのよね？」

「ああ、行く扉は一騎と局長から決める」

「俺から？」

「私から？」

ふたりして疑問系で聞き返す。

「ほら、一応俺が一番強いからどん尻でな」

『・・・つまりただの自慢と（ボソッ）』

「なんか言ったかフィオネ？」

『なんでもないよ。ホラ、二人とも早く』

フィオネに急かされたので、俺はどうしようか考える。早い話どの穴選んだらいいかはさっぱりなので、勘で選ぶことにした。

「じゃあ俺左」

「私は右で・・・」

「じゃあ俺たちが真っ直ぐでいいのな」

これでどうするかが大体決まる。すると、奏がバリアジャケットのポケットを漁り出す。

「これを、みんなに」

そう言って奏が手渡してきたものは、小さい懐中時計だった。

「こいつぁ・・・カシオペアか」

「うん。これは昔の教訓を活かして私達が緊急脱出用に造ったもの。オリジナルじゃないから使い捨てだけねどね」

カシオペア。

それは時間を自由に行き来する事が出来る封印級の古代遺産である。しかし、単体使用には最低でも魔力ランクSSSの魔力を必要とするため、戦略的には使いづらいものだ。

奏はかつて、この古代遺産の回収任務の折に解析し、このような簡易タイプを貴輔が造った。

さて、この簡易タイプは管理局の魔力充填施設により一回分の跳躍に必要な量を充填し、さらに行き先と跳躍時間を完全に設定させることで、簡単にしている。

さらに便利なことに、10人までの生体反応を記録することで、その者を同時に跳躍させる機能も内包している。

「これを誰かがピンチになったときに使えば、私達は強制的に管理局に飛ばされる．．．だからどうしようもなくなったときは起動させて」

「だがAMF敷かれてたらどうするんだ？」

「大丈夫．．．これに充填された魔力は少し特殊なものだから．．．」

特殊なものと言われても．．．と思う。

「とにかく大丈夫だから安心して使って？」

「ああ、了解だ。んじゃ．．．行ってくる」

俺はそう告げると、左の通路を一直線に駆け出した。

- view mikoto -

「ん．．．」

「起きたか」

「なんとか．．．って私気を失ってたのね．．．」

少々情けない思いながら、私は軽く体を動かして立ち上がる。

カルトさんの話によると、私は桜華狂咲を使った後着地に失敗して頭を強打、しばらく気絶していたそうだ。

ちよつと痛みは残るがたいした外傷もないし、吸血鬼ならではの治

癒能力もあるので私には問題はない。

「しっかしテメエもテメエだ。あんなえげつない技をよく思い付いたもんだ」

「なはは．．．」

私はポリポリと頬を掻いた。さっきのはほとんど勢いで使っていたから所々記憶がない。

そしてしばらく無言の時間が続く。その均衡を破ったのはカルトさんだった。

「月城．．．テメエは覚えていないかも知れねえが、桜華狂咲は”自らを夢く見せるための技” つつてたよな」

「え．．．私そんなことを？」

「やつぱり覚えちゃいねえか。とにかく、そう言うことをテメエは言った。それになんか理由はあンのか」

そう問われて、私はしばらく考え込む。そして、口を開いた。

「はい．．．一応」

「そうか」

え、そんだけ？

「別に過去を聞きてえ訳じゃねえよ。それにどいう経緯であんな危険な技を思い付いたのかもな」

カルトさんの言葉に私は黙り込む。それをよそに、カルトさんはまだ話を続けた。

「力を身に付けるつつうのは、それ相応の代価があることくらい分かる。月城がその技を使うに当たって”何を望んだのか”は知らねえが・・・」

そこでカルトさんは立ち上がり、私にあるうことかロンギヌスを向けた。

「もう少し回りを見る。お前が思ってるほどあいつらは無関心じゃねえよ」

「・・・」

「今の桜井はともかく、京谷は異常に強い。強いからこそ脆い。あいつら二人とも、辛いことを抱え込んで俺達に見せようとしねえかな」

「・・・なにが言いたいんですか？」

「要するに、気を向かせるんじゃないやなくて向けてやれってこつた。．．

．追いかけんぞ」

「・・・はいっ」

いつの間にかロンギヌスを担ぎ直し、京谷くん達が飛んでいった場所歩いていくカルトさんの背中を追いかける。

「恋はまだ私には分からないけど・・・”槍使い”としての憧れは、カルトさんですよ？」

「やめろ、気色悪い」

「えー」

「セレナでも良いだろうが」

「短槍と長槍じゃまた扱いが・・・」

「あー、はいはい」

そのカルトさんの背中を見ながら思う。

私の目標は、”カルトさんを越えること”だって。

- side ??? -

「あいつら三つに別れたな」壁に身を持たせかけて腕を組むマント姿の男は虚空に投影されたスクリーンを見ながら呟く。

「一見バカをしているようには見えますが・・・」

「分かっている。あやつら・・・特に真ん中と右に行く者は非常に驚異だ」

「対策は？」

「左にはグンドラム、中にはスレイ、右には真夜がいる。スレイは兎も角も、左と右の輩は倒せるであろう」

男は少女二人の問いに答えた。少女の一人は少し不安そうな顔をしている。

「アサキム様の計画は完璧とは言え、やはり・・・」

「大丈夫だ、アサキム様を信じる。それに迎撃だけなら・・・」

そこで言葉を切り、男は試験槽に漂う虚ろな瞳をした栗毛、長髪の少女を見ながら言った。

「黄昏の姫御子であるこの少女が居る限り、我らに敗けはない」

- v i e w k a z u k i -

あれから3分くらいが経過した。走っても走っても同じ風景だから正直眠くなってくる。ちなみに飛行魔法ではなく、自走だ。

「長いな・・・」

避難用の地下通路だからだろうか。

もうしばらく走ると視界が開け、急に大きなフロアに出た。

「ここは・・・」

辺りを見回す。巨大なホールになっているようで200メートルほど先には、その先へ進む道があった。

「先に進むか・・・」

そう呟いて、歩を進めようとしたその矢先。

「デメエが侵入者か？」

突然、後ろから異常な威圧感を感じた。今まで生きてきた中でもこれほどまでの威圧感を感じたことはない。

「返事なしか・・・んなら」

そして、何かを投げてきた。俺はハッと我に返り瞬動で一気に避けた。俺が離れた瞬間、俺が居た場所には戦斧”ハルバード”が突き

刺さっていた。

「……………!!」

俺は背中に悪寒が走るのを感じた。あと一呼吸遅れていたら、間違
いなく俺は死んでいた。

体勢を建て直し、俺は投擲した男を見やる。

「な……」

「顔の事なら黙ってな。この顔の感想なんざとうに聞き飽きた」

そう言つて、狼の顔をと風体をした大男は投げたハルバードを回収
しながら呟いた。さらにもう一方にはバトルアックスを握っている。
よもやあの二本を片手ずつで扱うとは尋常ではない腕力である。

「さあ、テメエがここに来たつつうことは俺たちの目論見を潰すた
めだろ？」

「目論見？」

俺達の目的はあくまで敵戦力の調査と魅音の追跡だ。狼男は激しく
驚く。

「なにも知らずに来たのかよ!？」

「いや、お前らが何かは知らねえし」

「じゃあテメエはなんでここに来た!？」

「魅音の追跡だ」

一応目的だし、知られたところでどうと言うわけでもないので真面
目に答えた。しかし、狼男は気になる一言を言ったな。

「つか目論見ってなんだよ」

「言うわけねえだろうが小僧が」

「じゃあお前に勝てば教えてくれるか？」

「俺にか？わはははは！！このグンドラム様に勝とうとするなんてな！！」

なんか高飛車だなこいつ。グンドラムと名乗った狼男は、でかい声で笑う。そしてハルバードをひと回しすると、真面目な顔になった。

「小僧の馬鹿正直さに免じて、勝ったら俺様がいる組織について俺様が知らされている範囲で答えてやるよ。んなら、アサキムの野郎も文句はないはずだ」

また気になる単語を言う。聞くべき事がだんだん増えていくな。

「構えな、小僧」

「・・・無論だ」

俺は白龍、黒龍を共に具現し抜刀する。そしてユニゾン状態のアルルに話しかけた。

「アルル」

「なに？」

「念のためにアームモードの安全装置外しといてくれ」
セーフティ

「・・・使えるの？」

「もしかしたら使わないとマズイかもしれない」

「・・・うん」

アルルはわずかに躊躇ったが、了承した。

「行くぞ、グンドラム」

「オウ」

「……」

お互いがしばらく沈黙し、目での牽制が続く。通路内に僅かのつむじ風が舞った刹那、俺とグンドラムは互いの元へ駆けた。

「ッ！！」

バトルアックスと白龍が火花を散らした。グンドラムはすぐさま弾くとハルバードを直下に振り下ろす。俺は瞬動で間合いを取り、白龍に魔力を溜めた。

バチィッ

そして閃魔・飛光撃。閃光はグンドラムの左腕に直撃するが、まるで聞いていないようだ。

「ハッ！ 痒いなオイ！？」

グンドラムは再びハルバードを投擲した。この大仰な攻撃だ、隙は大きい。最低限の回避でグンドラムの元に駆ける。

「おう！？」

「だああ！！」

黒龍のスキルである黒炎を纏わせての右払いの一閃。その炎はグンドラムの体をわずかにだが焼く。

「珍しい刀と思っていれば古代遺産の刀とはな。道理で一発一発が重いわけだ」

「そりゃどうも」

黒龍の黒炎を纏わせてしまうと、白龍を持つのが億劫になるので白龍は自らがいつ危険に晒されてもよいように、いつでも抜ける状態にセツトしておいた。

「扱う奴も手練れなら良いんだがな」

「手練れかどうかは・・・」

俺は魔力の収束を開始した。収束中は特性上隙が出やすいものだが、俺は京谷との訓練で戦いつつでも収束する術を身に付けている。

とはいえグンドラムのバトルアックスをいなしながらの収束は集中力を非常に使う。

ほどなく収束が完了した俺は、振り下ろしの一撃を加える。さすがにバトルアックスで押し負けると思ったのか、グンドラムは瞬動で回避し距離を取った。

「破魔・・・竜王陣!!」

かわした先にすかさず叩き込む。タイミングはバッチリだ。

「ふん!!」

「な!？」

だが、グンドラムの気合いの一閃は竜王陣を見事に止めてしまった。貴輔の言った通りか・・・斬魔術が効かない。いや、”今の俺の技量では届かない”という事だ。

「はっ、まだ甘いぞ」
「!？」

気づけばすでに目の前。力任せの一撃をモロに受け止めてしまい、バランスを崩す。

「ハアッ！」

さらに下段の回転斬り。こいつを食らえば致命傷だ。

まず白龍で止める。無論片腕で止められるなら苦労しない。圧されつつ白龍の切っ先で土を掴むようなイメージで白龍を軽く押し込む。

「オウ!？」

グンドラムは驚きの声をあげる。それは驚くだろうな。基本的には高速歩術である瞬動を腕を使って行ったのだから。

「ふん、スピードは超一流ですってか。だがグンドラム様に決定打は叩き込めないようだな」

グンドラムの言う通りだ。基本的に斬魔術が俺の戦闘スタイルであるため、それが効かないとなるとかなり致命的だ。となると。

（新しい技を作るしかないのか・・・）

よもや実践の場で新しい技を作らねばならないとは。博打も甚だし

い。
（いや、いくつかは特に考えなしでも出来るな）

俺はまず一つの技を思い付いた。こいつならまあ簡単に撃てそうだ。俺は黒龍を上段に構え、気を集中させる。

「．．．？」

対するグンドラムもこちらの行動に怪訝を感じながらも攻撃に対応できるようにする。

その刹那に俺は駆けた。

「っ！？」

「雷・鳴・剣！！」

振り下ろしと共にグンドラムに落ちる極大の雷。バトルアックスに遮られたとはいえ威力は非常に高く、グンドラムに雷が直撃した瞬間土煙が巻き起こる。

「ガア！！」

これは俺の稀少技能”雷変換”を利用した一撃だ。魔力だけの雷だと威力は落ちるが、この技はたぶん外で天候が悪ければさらに威力は上がるだろう。

叩き込んだ後、俺は間合いを取るために一旦離れる。しばらくして土煙が晴れ、その先には片膝を突いたグンドラムがいた。

「ハッ．．．まさか稀少技能持ちとはな」

「．．．正直なところ思い付きだがな」

「．．．そうかい」

そう言つてグンドラムは立ち上がり、バトルアックスを捨てた。いや、獲物を”ハルバード”のみにした。

「バトルアックスは俺様にとっちゃオマケに過ぎねえ。片手斧はしっくりこねえんだ」

そう言いながら、ハルバードを自在に回す。僅かにぶれて見える辺り、その速度が伺える。

「まだ小僧には隠し球があるんだろ。俺様も本気で戦ってやろう」
「・・・ふん」

この時の俺はたぶん笑っていたはずだ。そしてそれはたぶん勝利を確信した笑みではない。例えるならなのはらが模擬戦してるときの笑みだな。

俺は、戦いを楽しんでいた。

R e w r i t e 1 2 : 時の進まない世界3

「オラッ!!」

先程からグンドラムの猛攻が続く。

大きく薙いだと思えば、流れる動作で持ち手を使った突き。縦に振り下ろしたと思えば突き上げ、さらに突ききつた後からの体術など多彩な攻撃で苦しめてくる。魔力を持ってしなくても圧倒されると言つことは想像を絶する使い手ということだろうか。

「オラどうした、怖じ氣ついたのか!？」

強烈なラッシュをかましながらもべらべら喋るグンドラム。これだけ喋りながらも隙がないのはさすがとしか言いようがない。

「ハア!!」

「う!？」

僅かな攻撃の隙を突いて竜王刃を叩き込む。グンドラムは繰り出したハルバードを強引に引き戻し距離を取った。

「く...」

「当たればダメージを与えられないわけではないみたいだな」

だが、どちまち当たりづらいのは明白だ。斬魔術より新しい剣術を生み出さなければならぬ。

（雷鳴剣はさすがにフィニッシュじゃねえと不味いが...グンドラムの動きを見る限りじゃ支障があるわけではないみたいだ）

等と考えているとグンドラムがまた突撃してきたので右に左に受け流しながら思考を巡らせる。動きを鈍らせるのを第一とした一撃。

「がら空きだぞ！」

「っ！？」

グンドラムの一撃を間一髪でかわす。危ない、後少しで真っ二つだった。

．．あ、これだ。

咄嗟に閃いた俺は、そのまま反転しつつ下段を薙ぐ。グンドラムはハルバードの柄で受け、次の動作に入った。

「うお！？」

すぐさま瞬動をかけ、グンドラムの視界から消える。

「どこだ！？」

グンドラムは辺りを見回す。その俺はどこにいるかというところ。

『ドラゴン・スレイヴ』

「上か！？」

グンドラムの上空から遠距離斬撃の十八番、ドラゴン・スレイヴを撃つ。今回はアルルの詠唱と黒龍の発火、さらに雷変換のおまけ付きだ。

そこからさらに虚空瞬動を使いグンドラムの背後に回りもう一閃ドラゴン・スレイヴを撃つ。名付けてクロスサンダー。これなら．．．！！

「甘いぞ、小僧」

だがグンドラムの方が速かった。今まさに撃とうとした矢先に回り込まれたのだ。

「しまっ
」

そう言おうとした刹那、背中を袈裟懸けに斬られた感じがした。その直後に強烈な痛みが走る。

バランスを崩した俺は振り返り、せめてもの抗いに撃とうとしていたスレイヴを叩き込む。

しかし無理矢理振るう剣撃が当たるはずもない。

為す術なく、グンドラムの続く蹴りで叩き落とされた。

「悪いな、雷には耐性があるんだよ」

「．．．だが雷鳴剣は効いた筈だ」

「まあな。ハルバード伝つて感電する分にやさすがに無理があるが」

どうやら直接撃つのは厳しいようだ。となると雷鳴剣でダメージを与えられたのは偶然と言うことなのだろう。

（．．．悔しいが、俺には何も出来やしねえな）

自分の非力さを悔やむ。となると、やはり龍牙天斬に頼るしかないのか。

(いや、ここで使うようじゃまだだ。次の一手を．．．)
『一騎!!!』

思考を巡らせる俺にアルルが話しかけてきた。

『どうした』

さすがに口は出せないので念話を選ぶ。視線はグンドラムを向いたままだ。

『傷を私に転移させて!!』

『．．．構わない。アルルは止血と鎮痛に専念してくれ』

『でも!!』

『大丈夫大丈夫』

そう言つて、俺は立ち上がった。

「ほう．．．？結構深く抉ったつもりだったんだがな」

グンドラムの一撃は確かに致命傷になりえるものだった。下手をすれば体が動かなかなくなったかもしれない。だが現にこうして立ち上がれている。

それはなぜか。

ぶっちゃけ俺にも分からん。ただ”避けなければ”と全身で感じたことは覚えている。

「．．．まだ隠し球がありそうな目だな」

俺の瞳を牽制しつつグンドラムが問う。

ああ、あるとも。俺にしか使えない一撃必殺の刃が。

「悪いが、見せてやれるのは一回だけだ」

「構わねえさ。どうせテメエはここで死ぬんだから」

「そうか、それは良かった」

俺は黒龍を右に突き出して魔力を極限まで練り、刀に込めた。ありったけの魔力を込めるので、程無く許容限界を超えた刀は余剰魔力を噴出する。

「おお．．．」

グンドラムですら簡単を上げるほどの濃い魔力。そしてそれはあの時の龍を形作った。

”龍”は咆哮を上げ、目の前の敵を喰らう時を今か今かと待ち続けている。

「すげえじゃねえか」

「これでもまだ．．．」

黒龍を両手で握り、切っ先を前へ向けた。”龍”を形作って尚、余剰な魔力は噴き出し、俺の周りでつむじ風となり荒れ狂う。

対するグンドラムも、ハルバードの切っ先を地につけた突撃の体制で構えている。

先に動いたのはグンドラムだ。巨体に似合わない機敏な動きで迫ってくる。しかし。

「遅え！！」

それより先に、俺は刀を突き出した。切っ先は至近距離まで迫っていたグンドラムの左脇腹を捉える。

「ぐおっ・・・」

「おおおお！！」

叫び声と共に、“龍”が撃ち出される。

放たれた“龍”はグンドラムを喰らい、そのまま引き摺るように翔ける。

「ぐおおお！！」

グンドラムは逃れようともがくが、簡単に逃すはずがない。“龍”はグンドラムを喰らったまま壁に思いきり突っ込んだ。

「がはっ・・・！！」

それでも尚“龍”は突き進もうとしたが、程無く魔力結合が解けて“龍”は消失した。

「やったか・・・？」

グンドラムを警戒しつつ、龍牙天斬の着弾点へ歩を進めた。土煙が晴れてくると、そこには左半身の一部を失い血まみれのグンドラムがいた。

「はっ・・・強いじゃないか」

「取り柄なんざこんなものしかないがな」

余剰魔力を解きながら答える。しかし、ざっくりやっちゃったな。

腹を貫いていたら即死か．．．。

「はっ．．．とりあえず約束だ。俺様が知る限りのことを語ってやるよ」

「それより傷は大丈夫なのか」

「心配すんな、この程度で死ぬほど俺様は弱くねえ。それでも左腕は三本目だ」

三本目。その言葉から、グンドラムも飽くなき精進を積んで強くなつたということを証明するには十分だった。

「で．．．テメエは何を聞きたいんだ？」

「そうだな．．．お前達は何者か、つてのを聞こうか」

「俺様達か．．．俺様が所属している組織の名は特にはねえ。下坂魅音の負の遺産とも、時の支配者とも呼ばれている」

「．．．それで？」

「んで、この組織．．．あー仮にこの世界の名から取ってジェネシスとするぞ。こいつは約40年くらい前に発足したらしい」

「な！？」

40年前。それはちょうど魅音達が活躍しており、さらに魅音達が携わったあの事件と関連があるということなのだろうか。

「目的は？」

「知らね。秘密の悪の組織がやることと言えば世界征服じゃね」

そんな適当でいいのか。

「まあともあれ、その組織はなんらかの一環として下坂魅音の能力に目をつけた」

「闇変換か？それとも、”冥界の女王”か」

「たぶんどつちもじゃねえか。闇変換すら、大概の魔界の連中は全
体の三割も保有していねえ」

「そうなのか？」

これは意外なことを聞いた。魔力を自然界の力に変換する技能がそ
こそこ重宝される理由が分かる気がする。

「まあそれもなんだが、こっちの方が重要だ」

急にグンドラムは真剣な瞳を寄越した。その眼差しはしっかりと俺
に向けられている。

「詳しいことは知らんが、アサキムの野郎が言うには下坂魅音の魔
力は魔物を精製するのに必要な成分が含まれているらしい」

「確かアポカリプス・・・だったか」

アポカリプス。

黙示録という和訳が示す通り、禁断の成分を指す。この世界に於け
る自然発生及び魔界の然るべき手段で精製された魔物には例外なく
この成分が含まれている。ちなみに効力は未だに分かっていない。
魔界出身の管理局員も口を揃えて”我々も分かっていない”とこの
と。

ただ試しにその魔界出身の管理局員が死んだ魔物から全てアポカリ
プスを抽出したところ、魔物の肉体結合が崩れ霧散したという実験
結果から、一応魔物を構成する上で必需成分という事が立証されて
いる。

それが立証された後、管理局は造られたアポカリプス抽出兵器によ

る掃討作戦を実行してしまつたため、一度魔界と管理局で戦争があった。その折に、質量兵器と化学兵器の使用が禁止されたそうだ。

「意外と博識じゃねえか。そうだ、そのアポカリプスが下坂魅音が保有し、かつその純度がどの魔界の個体よりも高かつた」

「つまりプラントの苗床にして、より強力な魔物を造つて自らの尖兵にしようとした．．．と。じゃあ40年前のジェネシスの作戦は成功したってことか？」

「ああ、成功した。それによつて数多の強力な魔物を産んだらしいぞ。例を上げるならヴォヌス、オズマ、アバドン、ステイルヴ．．．

」

グンドラムは手当たり次第に魔物の名を上げていった。そしてそのどれもが、管理局で倒せば追加給金が出るような大物だった。

「．．．確か管理局の記録では魅音を捕らえていた組織は壊滅したはずだ」

「ああ、今の管理局局長を筆頭とした精鋭舞台と協力者によつてなだが、管理局は下坂魅音を見つけることは出来なかつた。その間も大量に造られたみたいだな。ある者は討たれ、ある者は未だ猛威を振るう。それらの繰り返しさ」

「なるほど．．．じゃあ魅音が今自由に飛び回っているという事はなんらかの形で逃れられたのだな」

「ああ、2年前に自らの魔力を炸裂させて脱出したらしい。それから今に至るまであらゆる世界を飛び回り、自らの魔力で造られた魔物を潰して回つたんだと。だからこそ組織は再び捕らえようとしてやがる．．．まあ今の組織にや今の下坂魅音を捕らえることは出来ないだろうな．．．」

グンドラムは遠くを見るような瞳を宙に向けた。その相貌には、僅

かに哀愁が漂っているようにも見える。

「俺が組織について知ってることはこのくらいだ。他に知りたいことはあるのか」

「．．．この組織のボスの名は」

「アサキム・ドーウィン。前組織の唯一の生き残りだ」

「．．．そうか」

そう言つて俺は立ち上がった。傷はアルルの治癒魔法で既に癒えている。

「もう行くのか」

「どうやら立ち止まっている余裕はないらしい」

「．．．そうかい。じゃあ最後に忠告だ。アサキムの能力、”時間跳躍”と”黄昏の姫御子”には気を付けな」

「なに？」

扉へ歩を進めていた俺はそう言われ、ふと足を止めた。声の主、グンドラムは既に意識を闇に沈めたようだった。

俺は振り返り、再び扉の元へ歩を歩めた。

「．．．アルル」

「なに？」

「全部覚えたか？」

『うん。一騎も覚えてるんでしょ？』

「．．．ああ」

それきり会話は途切れ、廊下には歩いた音が響くばかりとなった。

「グンドラムがやられたようです」

少女の報告に、鍰無しの刀を携えた少女は僅かに目を見開いた。

「グンドラムはんが？あのツンツンの少年やりますなあ」

「他の部屋は？」

マントの男は、報告を寄越した少女に問いかけた。

「スレイは．．見事に押されてますね。真夜の部屋はなんか凄いことになってます」

「まあ他二人は手負いに出来れば良いほうか。んで、月詠。ミッドチルタ襲撃の準備は」

先ほどの刀を携えた少女．．月詠はニコニコしながら答えた。

「はい、いつでも行けますえ。あの黄昏の姫御子の状態も良好みたいですわ」

「楽しそうで何よりだ、月詠さん」

その声に全員が振り返った。報告を寄越した少女は目を輝かせる。

「アサキム様！」

「ああ、ユカリさんもおつかれさま」

ユカリと呼ばれた少女を労いながら、アサキムはマントの男の元に

歩み寄った。

「君は行かないのかい？」

「あいつらだけでは不安だ」

「相違ない」

アサキムはあくまで冷静だ。それをマントの男は微妙に感じている。姿形だけは13歳くらいでありながらそこそ良い顔しているだけあって少しもつたいないと感じている部分もある。ちなみにアサキムを呼び捨てにするのはこのマントの男だけだ。

「アサキムはどうするつもりだ」

「僕かい？僕は・・・」

アサキムはモニタを見ながら言う。

「そうだね、僕はあいつらを止めるとするよ」

「了解した。では月詠、ユカリ、フリー、アスナ」

「・・・はいっ」

ちなみに黄昏の姫御子・・・アスナは無言だった。

「ミッドチルタ襲撃作戦・・・開始だ」

- side midciruta -

「暇ですわね・・・」

「隊長がいないと仕事が回りませんから」

ミッドチルタにある時空管理局本局は昼下がりの休憩時。

ある意味管理局の最大戦力の一員であるスノウとシオンはゆったりティータイムと洒落込んでいた。ちなみに二人ともダージリントーだ。

「そう言えば新人の星川姉妹は仕事に慣れましたの？」

「そこそこかな。さすがに10歳だし、難しい仕事は回せないし」

「アレでも壊すことにはそこらの魔導師にひけを取らないのが恐ろしいですわ」

「じゃあスノウは化け物ね」

「わたくしが化け物なら京谷はなんなのですか」

「んー」

シオンはしばらく考え込んでからポツリと漏らす。

「．．．神帝？」

「それは今の彼の二つ名ですわ」

スノウは呆れながら紅茶を啜った。

実はシオンは本局執務官でありスノウは自身の補佐である執務官補佐。管理局では雪の名前を持ちながら炎の技を操るスノウ、無口のままだまりを氷漬けにして回るシオンの戦闘スタイルから”対極の雪女”等と揶揄されたこともあった。しかし、9月付けでスノウもようやく執務官となるため、スノウのラウンズ入り時から長らく自らの補佐としながら面倒を見てきたシオンとしては心持ち寂しいを持っていた。

「で、その星川姉妹は今何処に」

「セレナやアリス、紫苑達と買い物に行くって言ってた。今頃5人も昼食かな」

「紫苑が？珍しいですね。休みの日はいつも引きこもるか訓練か
ですのに」

スノウは半ばビックリしたように呟く。シオンからすれば、カルト
か自分としか余暇を過ごしていなさそうな気がしてならない。

「．．．なんですか？その」かく言うあなたもカルトか私としか過
ごしてないよね」的な視線は」

「…………あなたも、読視術を？」

「お約束みたいなものですわ」

そう言って、スノウは紅茶を飲み干した。そうして左肘をついて頬を乗せてスノウとしては珍しい姿勢を見せる。カルトにすら見せないやうな気なしモードだ。

「あれ、スノウさんにシオンさんじゃないですか」

「どうかしたの、希来？」

「き、希来！？」

突然の希来の登場に冷静に対応するシオンに対し、スイッチオフになっていたスノウは半ば飛び上がるような間抜けな声をあげた。

「ど．．．どうしたんですかスノウさん」

そんな驚かれ方をされた希来はショックを受けながら聞き返した。

「な、何でもありませんわ」

慌てて平静を装うスノウ。二人の様子を見て、シオンは微笑ましく

なる。

「な、何を笑っているんですの!？」

「なんか微笑ましくてつい・・・」

と、そこへシオンの端末に着信が入る。

「メールですよ?」

「エマージェンシー音ですよ、シオンさんの端末の」

「何故にディープパープルなんですよ・・・」

そんな呆れ顔のスノウを他所に、対応するシオンの眼差しは仕事のそれだ。

「うん、私たちもすぐに準備するわ。大丈夫、ラウンズの権限で使える人材は出来るだけ迎撃に当たらせる。じゃあよろしく」

そう言ってからシオンは端末を閉じ、立ち上がる。

「どうしました?」

「緊急事態。謎の組織所属とおぼしき魔物が出たそうよ。連絡は私が行きながら回すから、二人とも付いてきて」

オールライト
「了解」

- side mids city・east -

ここはミッドチルタの首都東部。紫苑たちは星川姉妹との休暇の憩いにこの場所を選んでいた。が、この場所で謎の組織・・・ジエネ

シスだがまだそれとは紫苑たちは知らない・・・が目撃されたということで急遽仕事となった。

「しかし突然仕事かぁ・・・」

アリスは残念そうな声を上げた。それを見ながらセレナは確かにとうなずく。

「じゃが、手練れで今回の事件の鍵を握る敵。儂らが出のうて誰が出る」

紫苑はジョワイユーズを持て余しながら呟く。それを聞いて二人は改めて気を引き閉めた。

「大丈夫？二人とも」

アリスは少しだけ不安そうなきらら、さららを見て優しく話しかけた。

「はい」

「なんとか・・・」

「そっか」

アリスは二人の頭を軽く撫でてから立ち上がる。

『エネミー確認！場所はミッド首都東部、第三地区！数は・・・500を越えています！！尚、同地点に魔力反応が2！！』

「だ、誰じゃ！？」

『映像、出ます！！』

モニターに投影された、二人の少女。全員が見たことある、馴染みの顔だった。

「優希．．それとなのは？」

「なんで二人があそこに．．」

「今はそんなことを言っている場合ではない。ゆくぞ」
「「「はいっ！」」」

- side midscity・east3 -

「でえやあ!!」

「デイベイン、バスター!!」

なのはのデイベインバスター、優希のクロススレイヴが敵”動く石像”を捉える。

二人はこの近郊で簡単な体術の練習をしていたところを襲われた。救援信号は既に送っている。

「ルナ、数は分かる!？」

『確認されているだけでも数は500を超えています』

「500．．」

なのはが特に驚くでもなく、へえ．．と呟く。これがsts時代のなのはならたぶん狼狽していたはずだ。

「とにかく、手当たり次第に潰すしかないね」
「そだね」

二人は示し合わせると、一気に飛翔する。
ある程度距離を取ったところで、二人は反転してカートリッジを撃ち込んだ。

「クロススレイヴ!!」

「クラスターストーム!! シュート!!」

クラスターストーム。

サークレットクラスターの派生技でこちらよりも誘導性に劣る分、破壊力と弾数に秀でる今作限りのオリジナル魔法だ。

対する優希も、湯布院戦で見せたよりも巨大なクロススレイヴを見せ、向かってきた敵を蹴散らした。

「まだまだあ!!」

さらにもう一発、今度は密集地点に飛び込み再びクラスターを撃ち込み、辺りを焼き払う。

「すごいですね、なのはさん」

「ま、管理局エースは伊達じゃないよ」

そんなことを言っていると、上から急降下してくる敵を捉える。

なのははとっさに構えるが、不意に動きを止めたかと思うと敵は真つ二つに裂かれた。

「ふう、間に合ったかの」

「紫苑さん!？」

攻撃の主は紫苑だった。手にはある程度鎖を伸ばし、雷の刃を纏わ

せて固定したジョワイユーズが握られている。

「速いですね」

「このスピードが、ナイトオブブラウنزの売りじゃからの。他にアリスやセレナ、もう暫くすればスノウ達も来る」

それを聞いてなのはは思う。ナイトオブブラウنزは化け物かと。そして不意に、なのははフェイトの存在を思い出す。

「そう言えばフェイトちゃんは!？」

「む?今日は一緒じゃなかったのか？」

「はい、今日はフェイトちゃん用事がある・・・って!!」

会話しながらも、やられない程度には迎撃する。それは紫苑や優希も同じである。

「用事？」

「はい、”魔法無効化能力”でしたっけ?その事を」
「・・・っ」

その単語を聞いた途端、紫苑の血相が僅かに変わる。

「・・・まずは目の前の敵じゃ。後でその事を教えてほしい」

「はいっ」

「私はフェイトちゃん探してきますっ」

「待てい」

「ひゃん!？」

一目散に疾り出したなのはを紫苑は念動力で縛り上げた。

「何するんですか!？」

「阿呆、行方が心配なら端末で呼び出せばよいではないか」

「そ、そうですね・・・」

いそいそと戻ってきたなのはは通信端末でフェイトを呼び出す。

何コールかの後、フェイトが応対した。

「フェイトちゃん!」

『なのは!?!どうしたの?』

「うん、さっき襲撃があつてね。フェイトちゃんのことにもいつてないか心配で・・・」

『あー・・・残念、もう来たみたい』

「えええええ!?!」

なのはは驚愕の声をあげた。

「む、襲撃がそちらにも?」

『はい、神月二佐。私もすぐ出ねばなりません』

「ふむ、分かった。ならスノウ達はそちらへ向かわせよう」

『分かりました』

そうして、フェイトの通信は切れる。

「では、儼らは敵を片付けるとするか」

「はいつ」

全員がそれなりの距離に散開しようとしたその時、空から一条の光が紫苑たちの元へ降り注ぐ。

「ぐう!？」

紫苑はジョワイユーズを振り回し、その光を打ち消した。すかさず、先端のアンカーを光の発生源へと投擲した。

「むっ」

攻撃の主、マントの男は予想外の射程にたじろぎながらも難なく弾く。

「遅いわ!!」

さらに紫苑は接近しながら他端の錘を投げつける。マントの男はそれをかわし、魔力をまとわせた右腕を突き出した。

紫苑はわずかの動作で回避してから、ジョワイユーズをスサノオモード・・・先程の一定量伸ばした鎖に通電させ、殺傷能力を持たせた雷刃とさせた状態・・・にし、一刀両断にかかった。しかし、それは左腕で阻まれた。

「ぬっ・・・」

「血の気が多いな、真祖。そう焦るな・・・」
「貴様・・・なぜ私の素性を・・・」

マントの男は左腕を振り払い、紫苑を飛ばす。

「くっ!？」

「敵の戦力を調べることは戦略を練る上で大事なことだ」

「紫苑さん!!」

「来るな!!」

駆け寄ろうとした優希を紫苑は一喝して制した。

「二人は周りの雑魚を片してくれ。儂がこやつを倒す」

「倒す．．か。構うまい、我の他にも味方はいるからな。有害な戦力は足止めできるに越したことはない」

「っ！？貴様．．なんと．．」

「我等ジェネシスは本時刻を持ってミッドチルタを襲撃する」

「な！？じゃあ京谷は．．！！」

「奴か。奴等は今頃アサキムが相手しておるかもな」

それを聞き終わるや否や、紫苑はジョワイユーズを右薙ぎに振り払う。その一閃は、マントの男のマントを綺麗に両断した。

「む．．なかなかやりおる」

「貴様．．引っ捕らえた暁には洗いざらい吐いて貰うぞ！！」

紫苑はジョワイユーズを上段打突に構えた。

- s i d e s e r e n a -

「っ！？」

敵の斬撃が右肩を掠める。

セレナはすかさずジークフリードを向けるが既に敵は脇腹を狙っていた。

「しまっ」

「パンツァーフィストオ！！」

アリスの一撃が敵に当たり、辛くも退ける。

「ありがと、アリス」

「例には及ばないわ。それより．．．」

アリスは敵を見やる。敵は既に体勢を整え、次の攻撃にいつでも入れるようになっていた。

「せっかく来たんやし、楽しませてもらわな困りますなあ」

鍰なしの刀の少女、月詠はセレナの攻撃の鋭さを楽しみにしているといった瞳だ。

「その私に一発入れた君、十分離れときんさい」

「なっ！？アンタ何言って」

「でないと、首。ハネてまいりますよ？」

「ッ！ー！」

アリスは本能的に、月詠はやバイと感じた。僅かに躊躇った後、距離を取った。

「．．．．．」

「では、始めましょうか。．．死の決闘を」

そう言った月詠の瞳はあくまで純情無垢であった。

R e w r i t e 1 3 : ミッドチルダ攻防戦

- s i d e s n o w -

さて、ここはフェイトがいた国立図書館上空。フェイト、スノウ、シオンは襲撃してきたあらかたの敵を片付け、周囲を警戒していた。

「いやあ．．．スノウ達が来ると一瞬だね．．．」

「フェイトがトロいだけですわ」

「あう．．．」

スノウの言葉に容赦と言う言葉はない。優しさにも恋にも厳しさにも。

「それで．．．何を調べていたんですの？」

「そうそう．．．これだよ」

フェイトはスノウの問いに、端末を開きつつ答えた。端末を立ち上げると、“魔法無効化能力”についての文献のデータが立ち上げられた。

「これは．．．魔法無効化能力？」

「うん、湯布院から帰ってきたときにガーネットさんがちょっと話してくれたでしょ？だから気になってさ」

「魔法無効化能力といえば．．．それはもう稀少技能の最上級の能力ですわ。ちなみに所持者は今のところ確認されてない．．．何故それを調べよう？」

スノウの疑問に、フェイトは答える。

「ガーネットさんは魅音さんならいくら数が多くても必ず倒すと、そう言っていました。それが本当なら、魅音さんを無力化する手立てが必要です」

「それで・・・魔法無効化能力なのですか」

フェイトはこくりと頷いた。そこへシオンが口を挟む。

「でもどうして魔法無効化能力だけ？他にも魔法を無力化させるなにかはたくさんあるように思いますが」

「うん、例えばヴォヌスとかね。貴輔さんの話じゃ本来魅音さんを無力化するために造られた魔物だしね」

「けれど、先日の戦闘を見る限りでは大した効果を上げられなかった・・・」

スノウも分析に加わる。しかし、それでも周りへの警戒の糸が切れないのはラウンズならではだ。

「ええ、AMFだと弱体化は出来ても魅音さんが動きを鈍らせるようには思いません。ですから、確実な方法を突き詰めると魔法無効化能力が濃厚に思います」

フェイトの説明に、二人してつい感心してしまう。

「ようやく執務官としての責務が果たせるようになりましたのね」
「うう・・・バカにしてる」

「していませんわ、素直に感心してます・・・みんな散開なさい！

「！」
「「！！」」

スノウの櫓にフェイトとシオンは一気に散らばる。その僅かな時間の後、一条の光が走った。

「あそこ！！」

フェイトが指差した先を、シオンは口に出すより先に氷の射撃魔法”ソードブレイカー”を数十発形成し撃ち込んだ。

「ちっ！！」

攻撃先にいた三つの点は、舌打ちをしながら散開する。その内のひとつが突っ込んでくる。

「くっ！」

「私が受けますわ！！」

スノウは日本刀型アームデバイス”村雨”を握り、ひとつ突っ込んでくる敵を受けんと立ちふさがる。

（目が虚ろ・・・？）

スノウは目の前の栗毛の少女の生気のない瞳を見て僅かに怪訝を感じる。しかし、それはすぐに霧散した。

「つつ！」

少女が振り下ろした大剣をスノウは華麗に避け、魔力弾を数発放つ。さらに回し蹴りを叩き込んだ。

ガッ

「・・・無傷!？」

煙から足を伸ばし、スノウの回し蹴りを相殺した少女は全くの無傷。そのまま距離を取ると、大剣を構え直し斬りかかってきた。

(戦いのプロと言うわけではなさそうですわね・・・)

スノウは村雨を炎で強化し、大剣を受けた。

だが村雨が大剣に触れた瞬間、村雨を纏っていた炎は掻き消された。

(呑まれた!?)

スノウは驚愕しながら、虚空瞬動で距離を取る。

「火龍咆哮波!!」

スノウは遠距離斬撃、火龍咆哮波で生まれた炎は辺りを焼き払わんと少女を飲み込む。

しかし、それさえも少女の周りでは何事もなかったかのように阻まれている。

「本当に・・・やりますわね、フェイト・・・!」

スノウは、フェイトの見解の正確さに心底驚愕しながらも魔法が通しない、目の前の少女の対峙に少なからず畏怖を感じていた。

スノウが栗毛の少女を相手にしていたころ、シオンとフェイトもま

た、別の二人の少女を相手にしていた。

「ソードブレイカー、シュートッ」

シオンは再びソードブレイカーをばらまく。シオンが対峙する黒毛ショートの少女・・・ユカリは氷の短剣を器用にかわしながら距離をつめてくる。

「ハーケンセイバアアア！！」

「ちい、また！！」

フェイトの至近距離からのハーケンセイバーを再びかわし、距離を取った。

「今よフリー！！」

「わかった」

ユカリの掛け声に山吹色の髪に茶褐色の肌を持つ少女、フリーは長い鞭をしながら叩きつけようとする。

「ディレイリリース遅延解除、フリーズドライ」

だが、シオンはそれさえも読む。振り返り様に^{ディレイ}遅延によって溜めていた氷の直射砲撃魔法フリーズドライを撃った。その青白い砲撃はフリーの長い鞭を氷漬けにする。

「な・・・」

「私の得意とするのは手数と基本・・・。遅延魔法くらい造作もない」

等と言いながらも既に四つの魔法陣とその20倍におよぶソードブレイカーを形成している。

フェイトもユカリに対し、互角以上の戦いを展開している。

「残念ですが、私達の勝ちです」

「はあ？」

フーの宣言にシオンは間抜けな声を出してしまう。だが、その瞳と振る舞いはハツタリを言っているようではなかった。

「気づきませんか？あなた達の周りの空間に・・・」

フーにそう言われ、シオンは周りを見渡す。

すると、シオンとフェイトが居た空間は無限に広がる不思議空間と化していた。

「んな！？」

シオンにしては間抜けな声だ。

「ひええ！？」

フェイトも驚愕な声をあげる。ユカリとフーは合流すると勝ち誇った顔をしながら言った。

「ふふふ・・・私の十八番、インフィニティ・フロア無限抱擁”です。ここに閉じ込められたが最後、対象者の脱出は不可能です」
「くっ・・・」

歯軋りするフェイトにあくまで冷静なシオン。ユカリはシオンの態

度が少しいけ好かない。

「．．．もう少したじろいてもよくないですか？」

「別に、子の手の事はよくありますから．．．」

「あるの！？」

何故かフェイトの方が驚いた。

「しょうがないですね．．．聞き分けのない子には．．．お仕置きです」

シオンがパチンツと指を鳴らす。しかしなにも起きない。

「な、何がしたいの．．．」

「気づきませんか？自分のパンツがないの」

「え．．．あれ、ウソ！？」

「．．．っ！？」

「ちなみに私の手中です」

シオンが手を開くと、少女には似合わなさそうな黒いショーツが表れる。しかし、一組だけだ。

「そちらの茶肌の子は．．．変態なの？」

「ほっといってくださいっ／＼／＼！！」

顔を真っ赤にして怒鳴るフー。無理もない、指パッチンで相方が下着を奪われた上、自分がノーパンだとバレた日には激昂して当たり前だ。

「ぐぐーっ言わせておけば．．．泣いて許しをこうても「ハーケン

セイバーッ！！」無駄ですよ」

隙だらけのためにフェイトがハーケンセイバーを叩き込むが、攻撃はユカリをすり抜ける。

「ということは本体はもう居ないってことね・・・」

「そういうこと　では、制圧が完了するまで貴女たちには大人しくしていて貰います」

そう言つて、二人は消失した。残されたのはフェイトとシオン、そしてでかい長方形のオブジェがいくつも浮いているばかりだ。

「いやぁ・・・嵌められたね」

「・・・なんかいまいち深刻になれないのは为什么呢ですか」

してやられたりといった表情のシオンに対し、内心オロオロのフェイト。

「なにか策はあるんですか？」

「んー、特には」

「特にはって・・・。そう言えばさっきのパンツの転送魔法ってなんなんですか？」

フェイトはふと気になったことをシオンに問う。

「ああー・・・フェイトは短期プログラムだったから知らないのかな。いや・・・今の魔法学校じゃやらないか」

「・・・なんの話ですか？」

フェイトはわずかに怪訝を抱いた。シオンは愛想笑いを浮かべなが

ら返す。

「私も短期プログラムだったんだけどね。教導官の人が凄く知識持っていてね。事ある毎に呼ばれては用途の分からない魔法を教えられたわ」

「それが・・・さっきの？」

「うん。さっきのは簡単な転送魔法の応用で、座標軸や空間認識能力を利用した”^{スチール}窃盗”、だね。これは窃盗犯罪や銀行強盗の常套手段」

「ああー・・・よく聞きますね。他には？」

「他には私がさっき使った”^{ディレイ・スベル}遅延魔法”。これはフェイトも見たから分かると思うけど、魔法効果の発生のタイミングをずらすやつね。戦闘ではなかなか便利」

「へえー・・・」

「・・・まあ他には嫌いな先生のヅラをそとずらす魔法や、ネジ巻き時計のネジを綺麗に巻く魔法とか実用するには馬鹿馬鹿しいものを・・・」

シオンの苦労話を聞きながらフェイトは思う。

エースになるのは大変なんだな、と。

さて、スノウが魔法無効化能力持ちの少女と戦い、シオンとフェイトが不思議空間に閉じ込められている頃、紫苑はマント男を相手に苦戦を強いられていた。

「雷穿蛇ッ!!」

紫苑の形成した幾つもの雷の鞭を、マント男は周囲に展開した黒い刃で綺麗にいなす。

さらに、魔法陣を使いゴーレムを召喚しては優希となのはの援護を妨害する。

「ふんっ!!」

黒い刃の幾つかを紫苑に向けて放つ。紫苑はジョワイユーズを引き戻すと、アンカーを振り回しすべて撃ち落とす。

「ほう・・・さすが吸血鬼の真祖。かの”闇の福音”にも劣らない力だ」

「ふん、妾をあのかけ物と一緒にするでないっ」

周囲は紫苑の儀式魔法によって、天候が悪くなっている。それを利用して、紫苑はアンカーを空高く射出した。

「穿て稲妻!!」

紫苑が叫ぶと、アンカーに向けて雷が落ちる。それがアンカーに直

撃した瞬間に、紫苑はそのまま振り回してマント男目掛けて打ち込んだ。

「ぬおっ!？」

マント男は驚愕するが、すんででアンカーは止まってしまふ。

（やはり遠いと多重の魔法障壁で止められてしまふ。あやつらの援護はやはり欲しいが、ゴーレムの対応に追われる以上、期待が出来ない）

紫苑はどうすれば良いか、必死に頭を働かせる。

せめて隙を作ることが出来れば。

「・・・しかたあるまい」

そう言うと、紫苑は二人に念話を飛ばす。

『なのは、優希』

『はいっ』

『・・・少し、手伝ってくれんかの』

『めっさ敵しいんですが』

『そこは妾がなんとかする。妾が援護に入る隙を作るから、二人には全力の攻撃を撃ち込んでほしい』

『・・・取れる時間は?』

『ざっと10秒じゃな』

『分かりました、やります。優希ちゃんも行けるよね?』

『はいっ!』

「何を考えておるかは知らんが、攻撃されても文句は言えまい」

そう言つて、マント男は黒い刃を全弾紫苑目掛けて撃ち込んだ。紫苑は口を僅かに吊り上げると、左手をマント男目掛けて翳す。すると、紫苑目掛けて飛んできた黒い刃が全て逸れる。

「なっ!?!」

「驚くのはまだ早いッ!」

さらに紫苑はなのはや優希の周りに居たゴーレム群をひと睨みすると、両手をそれぞれに翳して握った。それに合わせて、それらのゴーレムがひしゃげて爆散する。

「今じゃ!」

紫苑の叫びで、なのはと優希が構えた。

「エクセリオンモード、ドライブ!!カートリッジロード!!」

「フェイス、ドライブ!!」

なのははカートリッジを二発撃ち込み、優希は自らの補助魔法フェイスをかけて突撃の準備をする。

「やらせるものか!」

「妾が相手じゃ!」

それらの妨害に入ろうとするマント男に行動させまいと、紫苑はインファイトを持ち込む。

かなり危険だが、マント男は意識は自ずと紫苑に集中せざるを得なくなる。

しかし、紫苑は一騎やスノウに劣るとはいえ近接戦闘は超エース

級。遅れをとることはあまり考えられない。

「ぬう！」

「はあっ！！」

紫苑のスサノオモードのジョワイユーズが、マント男のマントを僅かに裂く。

「なんの！」

だがそれくらいで怯むようなワヤではない。マント男はすかさず魔力で形成した杭を紫苑の胸目掛けて撃ち込もうとする。

しかし、紫苑の先程の掌握による謎の攻撃によって防がれてしまう。

『exelion buster』
『flying rush』

なのは達のチャージも終了したようだ。それを感じ取った紫苑はマント男のガードを突き崩した。

「ぐおっ・・・！！！」

「行けっ二人とも！！！」

紫苑は距離を取りながら怒鳴る。それを聞いたなのはと優希はマント男を捉え、マント男の元へ突撃した。

「ハアアアア！！！」

しっかり準備してただけあって、突撃のスピードも普段のそれを遥かに越える。

マント男はなんとか体勢を建て直す。それと同時に、なのはのレイジングハート・エクセリオンと優希のルナティックの初撃がマント男の魔力障壁に衝突する。

「ッー!!」

「くうー!!」

しかし、紫苑ですら厄介に感じる多重障壁。紫苑に劣るなのはたちがどうにか出来るようなものではない。

だがそれは、あくまで戦闘ならばだ。

今回のようにただ一発を叩き込むことだけに専念した全力攻撃なら、戦闘中における紫苑の攻撃よりも遥かに攻撃力がある。

さらに、なのはの必殺魔法のひとつ、エクセリオンバスターや優希の必殺剣フリンジングラッシュによる攻撃力は、管理局最強が集うラウンズ内では兎も角も管理局全体で言えばトップクラスの破壊力を秘め、さらには結界・シールド破壊の効果も持つ。紫苑はその2つの能力に賭けたのだ。

優希は2撃目、3撃目を叩き込んでいき、なのははカートリッジをつぎ込めるだけつぎ込んで行く。

すると、マント男の最後の障壁に僅かに亀裂が入った。それと、二人のフィニッシュが重なる。

「エクセリオン・・・バスター ツー!!」

「フリンジング・・・シュ ツー!!」

なのはたちに出せる最高の一撃が、マント男の最後の障壁を砕く。それを見た紫苑は、再びジョワイユーズに雷撃を纏わせる。

「よくやった！！あとは妾に任せておけ！！」

紫苑は直ぐ様虚空瞬動によって、再び魔力障壁が覆う前に攻撃を仕掛ける。

「だがっ！！」

マント男も簡単に引き下がるはずがない。強烈な攻撃のために硬直してしまったのはと優希を払いのけ、迎撃体勢に入った。

「遅いわ！！」

だが、紫苑の方が速い。速度も落とさず、懐を取った紫苑は雷撃を纏わせたジョワイユーズをマント男の体に巻き付け完全に動きを奪う。

「なんと！？」

「まだ終わらんよっ！！」

紫苑はチェインバインドでさらにきつく拘束する。そしてジョワイユーズの柄（持ち手）を握ったまま飛び上がり、右手を高く翳した。すると、その中天に20型ブラウン管テレビくらいの大きさの雷球が形成された。

（ここまでやるか！）

マント男は短時間であそこまで考えた紫苑の戦術に感服する。

その間にも紫苑はチャージを完成させた。

「いつけえええええ!!」

紫苑の雷球は身動きが出来ないマント男に向かって一直線に落ちる。マント男はかわすことが出来る筈もなく、直撃を受けることとなった。

- s i d e s n o w -

「ハッ・・・ハッ・・・」

あれからしばらく切り結んでは付かず離れずの繰り返しだ。

魔力が飛翔にしか使われない分、魔力の消費は非常に押さえられているがその分体力は普段以上に使っていた。

（なるほど・・・私に決定打を与えるではなくともいなしきるだけの技術はあると言うことですか・・・。というかあの子のツレとウチのツレは何処に？）

少しだけシオンとフェイトの心配をするスノウ。まさか今ごろ栗毛の少女のツレに不思議空間に閉じ込められ、あるうことが談笑で盛り上がっているとは思えないはずだ。

「さあ、仕切り直しと行きますか」

スノウは村雨の切っ先を栗毛の少女に向けた。

「あなた・・・名前は？」

「．．．アスナ」

そこで栗毛の少女、アスナはようやく口を開く。

「アスナ．．．あなたのその力はなんですか？」

「．．．魔法無効化能力．．．と、みんなは言ってる。とても強力だって」

あくまでアスナは淡々と言って述べる。

どうやらフェイトの見解はビンゴだったようだ。

「そうですね．．．。では40年前、貴女は下坂魅音を無力化する作戦にいましたの？」

「．．．私はまだ10歳。たぶん、別の人」

アスナはそう言うが、スノウには確かに信じられない。しかし、アスナにわざわざ嘘を言わせる理由はないと思ったので信用することにした。

「わかりました。では勝負の続きと行きましょう」

スノウは村雨を構え直す。しかし、アスナは信じられない一言を吐く。

「．．．貴女は、私には勝てない」

「．．．なんですって？」

その言葉に僅かにスノウの頭に青筋が走る。それに対し、アスナは両手に何かを纏わせ両手を近づけた。

「ッ!？」

スノウはただならぬ力の奔流に驚愕する。

淡いオレンジの膜に全身を包んだアスナは虚空に突き刺していた大剣をひと回しして握り直すと、先程よりも遥かに速いスピードでスノウに迫る。

（迅い！）

アスナの右薙ぎの一撃をなんとか弾き、ブースとをかけ距離を取る。しかしそれを遥かに凌ぐ速度でアスナは猛追してきた。

ガキンッ

村雨と大剣が火花を散らす。

先に動いたのはスノウだ。アスナの力を巧く受け流し、その勢いを殺さないまま突きを繰り出す。

だがアスナも負けない。それを紙一重にかわし、インファイトを仕掛ける。

（そこまで!？）

それをなんとか避け、スノウは腹にパンチを入れようとする。

「ガハッ」

だが、アスナのドロップキックの方が早かった。スノウは思いきり図書館に突っ込む。

感掛法。

それがアスナの使った技法だ。

右手に魔力、左手に気（特に決まりはないため、纏わせやすい方にそれぞれを纏わせるのが基本とされる）を形成し、合成することで通常の何倍もの身体能力と魔力耐性を得る”究極技法”のひとつだ。それを魔力を一切通さない魔法無効化能力持ちのアスナが使い、さらに戦士としての教育をしっかりと施せば京谷や奏らすらも越えてしまっただろう。

今スノウが相手しているのはそういう相手だ。

「ぐっ．．．」

なんとか立ち上がり、村雨を構え直すスノウ。

魔力が効かない、身体能力は相手が上。

スノウは果たしてある意味最強の少女を倒すことが出来るのだろうか。

R e w r i t e 1 3 : ミッドチルダ攻防戦（後書き）

作者「・・・ここまで一気投下となりまして申し訳ありません。これまでのまえがきあとがきは後日追加しておきます」

一騎「いいのか。。。？」

作者「仕方ないじゃない・・・更新できなくて読者さんを待たせるわけにはいかないから、一応のストック分を投下したのよ」

一騎「じゃあここからの話は？」

作者「ここからの話は途中だから結構とびとびになるかな・・・。読者のみなさん申し訳ありません」

一騎「で、次回予告は」

作者「いまのとこスノウがぼこぼこにやられてるからここの救済と、シオンとフェイトの件。そろそろ京谷のところに視点を戻そうかなって」

一騎「そろそろ起承転結の転に差し掛かってきたな」

作者「そうだね。読者のみなさん、これからこの駄作におつきあいください」

命「次回もまた見てくださいね！リリカルマジカル頑張ります！！」

R e w r i t e 1 4 : ミッドチルダ攻防戦 2

- s i d e s i o n -

「凄いですね、シオンさん」

「こんなのは、氷山の一角・・・」

戦いをすっかり忘れ、シオンによる基本魔法についての運用の話を
フェイトは一生懸命に聞いている。

まあユカリとフーは足止めしからないので、まあゆるゆるな雰囲気
でいても問題は全くないのだが、心配をちらつとだがしたスノウが
僅かにいたたまれない気もする。

「……さて、脱出策を考えないと」

「……ですね」

あまりに夢中になっていて、閉じ込められていたのに気づいてい
なかった。

とはいえ、シオンはあながち取り乱しているわけでもない。

「それで、何か策はあるんですか？」

「もちろん…。効果は、抜群」

そう言って、シオンは手にしていたパンツを……………

「くんくん」

「なにしてるんですかあああああ！！！！？？」

嗅いだ。

「どうか…した？」

当の本人は何がしたいのやらさっぱりで、首を傾げる。

曰く、『使えるものは、なんでも使う』。

勝つために出来ることを、シオンはしたまでなので何一つおかしいことはしていない。

「どうしたも何も何パンツ嗅いで」

「捉えた」

『freeze dry』

ズバアアアア！

一瞬、フェイトにはシオンの行動が見えなかった。

だが、数瞬あつて事態を理解する。先程の不可解な行動に釣られて

しまったユカリに対して、砲撃を叩き込んでいたのだ。

「ユカリ!？」

「氷爆」

『N i v i s c a s u s』

ユカリがやられたのに対して思わず飛び出したフーに追撃と言わんばかりの氷爆。

これ自体は大きい破壊力があるわけではないが、不意打ちなら十分過ぎる破壊力がある。

「あああっ!!」

フーとユカリは吹っ飛ぶ。

シオンは二人に追随すると、喉元にソードブレイカーをあてがった。

「…命を奪うまではしたくない。これを解除して…?」

(……すい)

フェイトは心底感嘆する。

僅かな隙を自ら作り、それに付け込もうとした敵をおとしめて逆に主導権を奪う。

基本に忠実で、かつ狡猾な作戦。

フェイトは、シオンの戦い方に惚れ惚れしていた。

「ぐっ……だが、ここから出たいなら私達を殺すしかない」

「けれど、あなたたちにはまだやることがあるはず。それを差し置いて相打ちを狙う…?」

「くっ……!」

年上ならではの心情を見抜く力で心理的にも追い込んでいく。

シオンのにはさして特別なことをしている訳ではないが、ユカリと

フーからしたら嫌で嫌で仕方ないのかもしれない。

気絶してしまっていたユカリに代わって、フーは苦虫を潰したような顔で逡巡する。

やがて、諦めたように結界を解いた。

カシャン

空間に裂け目が生じ、やがて割れて空間が霧散する。
程なく、見慣れたミッドチルタの町並みが視界に広がった。

「あ、あれ？いつの間に……」

フェイトはシオンの戦いを見て放心していたため、何が起こったか理解できていない。

「さて……彼女達はどうしましょうか」

- Side Serena -

「でええい!!」

セレナの槍、ジークフリードが横薙ぎに唸る。

「ウフフフ、そんなヤワな槍は当たりませんえー」

時折奇妙な笑い声を上げながら、ホイホイ槍をいなしていく月詠。

ヘラヘラしていながらも、的確で確実な剣裁きにセレナは攻めあぐねていた。

(つ、強い！私の槍が全部防がれてる……)

仮にも槍が得物だ。命やカルトには及ばずともセレナは十分強い。

さらに槍という特性上、ある程度の力量差はリーチで埋め合わせが出来る。

となると。

（相手がそのアドバンテージをもともしない力を持っている）

ということだ。

とはいえ、技による効率的運用をすればそれでもなんとかあったかもしれない。

……だが、セレナの本職は龍召喚士。後衛にアリスがいたから、前に出ても通用する程度に磨いていただけのことだ。

そして、その力量差はじりじりと戦いに現れはじめる。

「それっ、斬空閃ッ!!」

わざとかと言うほど緩慢なテイクバックから鋭い剣戟。

セレナはあまりの鋭さに僅かに反応が遅れ、ジークフリードを弾き飛ばされてしまう。

「フリードッ!!」

「追わせm「ストライクツエアアア!!」おおっ？」

追撃をかけようとした月詠にアリスはストライクエアで牽制した。さらに、自身の能力である風変換により、細く長い風の奔流を紡ぎ出す。

「むう……ウチのジャマせんといてえな」

「悪いね。別にアンタをジャマするつもりはないけど、仲間をやるほど私は甘くない」

アリスの周りを細い奔流が走る。

セレナはすでに弾き飛ばされたジークフリードを回収しに行った。

「まあええですわ。木禺がたかったところで、ウチには勝てませんえ」

「そう、ならこれを防ぎ切れたらねッ!」

アリスはエクセリオンを嵌めた腕を翳す。すると、アリスを包んでいた風が一斉に月詠にかけていく。

「ハッ、こんなもの!」

月詠は迫り来る風に切払いをかけた。アリスは剣で風は斬れないとは思っていたが、残念ながら完全にせき止められる。

だが、いちいち驚いている程策無しでもない。

「ハアッ！」

アリスは剣を振るようなモーションを繰り返す。すると、その動きをトレースするように風の刃が月詠の体を掠める。

「わわっ！？」

「まだまだッ！リングエアロックー！」

今度は丸を描くように手掌でモーションを繰り返す。それに呼応して、月詠の周りで走り回っていた風の糸が強固に月詠を縛る。

「本気で、これでウチを止めれるとおもてはるんですか？ならば、救いようのないアホおすな」

ただの小太刀で月詠は風のバインドを切り裂いていた。そのまま、

瞬動でアリスの眼前に迫った。

「ほな、さいなら」

問答無用の五月雨剣。

が、アリスの目の前には分厚い風の断層が敷かれており月詠の連撃はくしくも阻まれる。

「悪いね、これでもラウンズのFBなんだよ」

月詠が気づいた時にはすでにリングエアロックで拘束されていた。そう、それは月詠の攻撃をアリスの空気断層盾で阻まれた一瞬。

「今だよセレナ」

「オッケー……おいで、トリシェーラ」

ようやくジークフリードを回収したセレナは、ビルの上に陣取っている。

そしてジークフリードを振りかざし、自分の使役する氷龍の一匹トリシェーラを呼び出していた。

アリスはときどき思う。寒がりな氷龍を呼ぶなよと。

「なつ、竜種なんて聞いておらんえっ!？」

さすがの月詠もセレナの龍召喚に驚愕の視線を送る。

「あれだけ時間があつたんだ…。君がアリスと戦っている間に召喚して、攻撃準備をさせるには十分過ぎる」

セレナの髪が魔力の奔流でたなびく。

同時に、トリシェーラの口に大きな魔力スフィアを形成しつつあった。

「当たらせませんえッ」

対して月詠は小太刀を器用に扱い、風の糸を切り裂いていく。が、解けたと同時にアリスは重ね掛けを行う。

本当に身動きを取れなくするように思い切りバインドをかけるものいいが、それではあの魔力をもともしない斬戟で無効化されかねない。

ならば、解く度に重ね掛けしたほうが効率がよいとアリスは考えた。もっとも、アリスの風を操る力の賜物であることが大きいのだが。

いずれにせよ、解除しては縛られ、解除しては縛られを繰り返しているうちにチャージは完了する。

文字通り風と戯れる月詠に、トリシェーラは無情の氷撃を放った。

「あつ」

気づいた時にはもう遅い。

一瞬にして月詠の体は空間ごと完全に氷結させられてしまった。

「…初めて見たけど、ゴツいわね」

風の系を操りながら、一部始終を見ていたアリスはそう漏らす。

「大丈夫。一応非殺傷だし。クロノのエターナルコフィンみたいなことはないから」

「クロノ提督の技でしょ。アレはエグイよ」

「あくまで周囲をまるごと凍らせ続けるだけ。…まあ非殺傷解いたら間違いない死ぬけど」

「…………聞いた私が馬鹿だった」

セレナのさりげなく見えたサディスティックな一面は、アリスの心の中に固く封印されたという。

「それは置いといて、まだ気は抜けないよね」

セレナはトリシェーラを手なづけながら呟く。

月詠を氷結させた周囲には魔力の増大を感じ取った魔物があまたに押し寄せていた。

「そうだね……。かといって、私たちが落ちるなんてことは先ずないんだけど」

そう言うアリスも、すでにエクセリオンによってワイヤーを生成して舞のように操っていた。

魔物はアリスたちを視認すると、まるで何かに取りつかれたかのようになり、アリスたちの元へ押し寄せてきた。その先頭に向けて、アリスはワイヤーを引き伸ばし、前列の魔物をまとめて両断する。

「トリシェーラ、ダイヤモンドダスト！」

セレナもトリシェーラにプレス攻撃を指示し、片っ端から氷漬けにする。そして、砕く。

（後は、どれだけ敵の数を減らせるか）

- s i d e K a n a d e -

「ふう。やっと終わった」

「クッ・・・化け物め・・・」

両手のハンドソニックを解いて、私は髪を軽く掻き上げた。あ、そこに寝そべってる女の子はスレイ。この子が今回私が倒した敵。

感想？・・・うーん、強かった、よ？倒すのに3分かかったし。

・・・そこ、早すぎとか言わないの。これでも、管理局局長。えっへん。

「非常の天使・・・。これほどの力とは・・・。」

「本気、じゃないよ？」

「な！？」

そんなに驚かなくてもいいのに。

「だって・・・もう52歳だし。本気、やー」

「そんな些末な理由で、我ら終わりの世界の使徒を・・・！」
ジェネシス

「切なくなるのは分かるけど、あいにくあなたたちに私を本気にさせる力は、ない」

そう言っただけで私はその先へ進もうとした。一応、追っただけでもないようにスレイって子にはバインドをかけておいた。そこで、私は一つの魔力の塊が近づいてきているのを感じた。

この魔力の大きさは・・・京谷に匹敵する！？

私はしまったハンドソニックを再び展開した。そして、近づいてくる気配に全面的に神経を研ぎ澄ませた・・・その瞬間、探知範囲からその気配が消える。

「!？」

思わず私は周りを見渡してしまう。しかし、気配は全く感じられなかった。

「どうしたんだい？僕はここだよ」

後ろから声がした。私は反射的にハンドソニックを後ろに薙いだ。が、捉えていない。というよりも、ヒットする直前にまた気配が消えた。

(なぜ・・・)

私は前線をしばらく離れていたとはいえ、曲りなりにも前衛の魔導

師。気配を消していてもこんなに近くに來られたら基本的にわかるけど・・・今さっき、現に知覚を完全にすり抜けられた。

ここまで鈍っていたのなら説明はつく。けど、事前に京谷に気配を消して近づいてもらって試したからそれは実戦というのを差し引いても真実味が沸かない。

「ほら、ここだよ」

「くっ！」

今度は正面に現れた。私はここ一番の踏み込みと後々実感した一撃をそいつは難なくいなす。

「・・・ハンドソニック、セカンドフォーム」

ファーストフォームは小回りは利くけど、こういう開けた戦闘では少々心ともないリーチである。

だからこそそのセカンドフォーム。これなら、リーチはファーストの1.5倍。重量は少々増えるけど、私には苦には感じない。
・・・が。

「どうしたんだい？いい打ち込みだけどぜんぜん僕に届いてないけど」

「・・・うるさい・・・！」

そう、何度接近して打ち込んでも一向にあたらない。もちろん相手はバックステップで躲してはいる。けれど、なぜかクリーンヒットする軌道の攻撃がぜんぜんあたっていない。

「時空管理局長、堂本奏。昔は非常の天使と呼ばれていたようだけれど、今じゃその見る影もないね」

「な!!?」

目の前の少年が信じられない言葉を口にした。

この子・・・私を知っている!?

動揺が表に出たからか、私は本能的に衝撃波をまとった一撃を放った。自分でもびっくりな不意打ちだったのだけれど、少年は難なく躲けてしまう。・・・その時、少年の姿がぶれ・・・ソニックブーム 衝撃波が過ぎた瞬間にブレがおさまった。

「なんだ、心まで非常に冷静冷酷だと思っていたけれど。案外感情的なんだよね」

「うる・・・さいっ!!」

私はクイックムーブで背後を取る。振り抜きざまに斬撃。が、今度は予備動作なしで躲される。

「!!」

おかしい。いくら手練れ・・・そう、京谷や魅音であつても予備動作のない瞬動ができる人がいると言っても、筋肉の動きまでは消すことができない。そして、私は天使の血が流れているため人間よりはるかに膂力・思考速度・五感が高い。

その私が捉えられないなら・・・答えは一つ。

「そう・・・あなた、時使いなのね」

「ご名答。僕は・・・時間を操れる」

答えはかくして正解。そして最悪。

時を操るといふ事は、戦いに於いてどんな実力者よりも優位に立つ

ことができる究極の力を手にしているという事になる。

なぜなら、あらゆる修練を積んで技のタイムラグを削っていったとしてもそれぞれ限界というものがあるから。もちろん、魔法は慣れ＋詠唱破棄＋動作なしでタイムラグはコンマを切るんだけど・・・たとえそうしたとしても、相手も時の魔法を同じタイミングで出せるとしたら、全ての努力は水の泡。

対抗手段は、同じ時の魔法を同じ以上のタイムラグで出せ、かつ相手より早く決定打を叩き込めるような準備をするしかない。

それか、相手の移動先を魔法の発動から指定座標に移動完了するまでに座標割り出し＋攻撃を叩き込む。時の魔法は動き出したら座標の塗り替えとかが一切できないからね。こういう転移系の時間魔法はそれが弱点。

「さて。僕に勝てないというのは、答えを知った時点でわかるね？」
「だとしても。私はここであなたを倒す。」

私は天使の羽を展開した。私が非常の天使と呼ばれる所以の、白き翼。

「ほう。それがかの」

「しゃべらせる暇は、与えない」

背中 of 羽の先が白く光りだす。私の魔力光である白い輝き。それらから、あまたの光の軌跡が走り、私の周りに滞空した。

「いけ、アルテミス Artemis」

アルテミス。威力こそその辺の魔導師の誘導弾よりも低いが、この魔法の恐るべきは“命中精度”。この魔力弾は特段目標をロックしなくても敵を勝手に狙い撃ちする。・・・うん、だから誘導射撃な

んでしょっていう人もいるかもしれない。

そういうのじゃなくて、必ず敵を射抜く。相殺しようと誘導弾をこのアルテミスに向かわせても、アルテミスはその魔力弾を逆に破壊する。そして、切り払いは完全にすり抜ける。シールドは特に狙わなければ躲す。そしてすんで躲してもほかの誘導弾のように逸れたりせず、ただただ半永久的に敵を追う。

フィールド系はどうしようもないし、だからこれだけの効果を持たせるために威力を殺した。この魔法は隙を作ったりどうしてもダメージを与えたい場所に攻撃したい時に便利だ。

これなら・・・と思い、一回で出せるだけの数を出して少年に向かわせた。

その2秒後、絨毯爆撃かというほどの爆発音が起きる。・・・まあ、800は出したかな。

「ふう。こんなものかな」

「な・・・」

愕然とした。Artemisが一発も当たっていない。

「Artemis・・・君があ頃主力としていた誘導魔法。威力は石ころ程度だけど敵に必ず当たり、フィールド系の防御と単純に敵の防御力に負ける以外には絶対無敵。なのになぜ躲されたか」

少年は、あざ笑うかのように言った。

「何のことはない、ただの疑似時間停止と空間転移の応用だ。僕がそこにいると魔法たちに錯覚させて、着弾の瞬間に疑似時間停止と魔法による転移をかける。それだけはさすがのArtemisも読み切れなかったという事だ」

愕然とした。ただ時間魔法を使えるだけと侮っていた。けど・・・この子はこの力を十分に理解し、そして自在に操れる。これは・・・強敵。

「さて、僕のターンかな？」

そういうとまた転移する。そして、目の前に現れた。

「さあ、見せておくれ。天使の・・・悲鳴を！！」

分かっている、思考がついていかない。それを視認した時にはすでに蹴り飛ばされていた。

「まだだよ」

少年の手には剣があった。それは京谷の持っていた剣とどこことなく似ている。

「いくよ、デュランダル」

そして先ほどの転移を活用して目前に迫ってきた。私は限界まで神経を研ぎ澄ませ、剣を受けた。すぐさま転移で少年は背後を取ってきた。それを、体を反転して受けた腕で弾く。

どうやら、この子のデュランダルは京谷の不滅デュランダルの刃とはまた違うものみたい。

宝具としてのデュランダルなら、きっと謂れの通り私は初撃である世だった。

「やっぱり武器を持つての転移はさすがに読んだね。先ほどの発

言は訂正しよう」

そんなものをいまさら訂正されても。それに、武器を持ったままで
の彼に追隨するだけで精いっぱい……。

「……しかたない」

私は、フェザーサークルを発動させた。私の周りを、白い羽と風が
包み込む。ここにはたとえ時間転移でも入ってこれない。

「逃げるのかい、仲間を置いて」

「残念だけど。それも勘定に入れている」

「……どういう意味？」

「それは、この航時機カシオペアの力でね」

私は航時機カシオペアのスイッチを入れる。すると、私の足元にミッドチルダ、
ベルカのそれとも違う魔法陣が展開される。

そこから漏れる魔力の奔流が私を包み込む。そして、私はまとめて
転移した。

- s i d e a s a k i m -

「……逃がしたか」

僕は、結合がほどけた結界を見ながらつぶやいた。よく魔力を探る
と、ここに来ていたすべての反応が消えていた。おそらく、一緒に
転移するような術式を組んでいたんだろうね。

「アサキム様……」

バインドがすでに解けていたスレイが僕に申し訳なさそうな口調で話しかけてきた。

「いいよ。局長が相手なら、十分持ったほどだよ」

「あ、ありがとうございます！」

正直、あの子だとは思わなかった。まあ、僕もあの子を氷上京谷と勘違いしていたし。やっぱり魔力探知だけに頼るのは止そうかな・・。

あんなに局長が若々しいのは、初代^{アインス}アサキムの呪いのせいだ。といっても、あのころのアインスはあくまでこの世界の番人に過ぎなかったけど。いつしか、この世界のボスになっていた。そして僕が二代目だ。

「僕たちの世界を好き放題した管理局は許せない……」

「はい、アサキム様のその医師に賛同したからこそ、我らはあなたの元におります」

けど。それ以上に。

僕は、なぜか氷上京谷との戦いを楽しみにしていた。

なんでだろう……。風のうわさで、彼は管理局を変えたいと思っていると聞こえたからかな。

「さて。ミッドチルダは……」

僕は魔力でミッドの様子を見てみた。やはりというべきか、苦戦は

していたようだけれど、ラウンス勢が勝っているようだ。あ、アスナのところはアスナが勝ってるね。うーん、やっぱりこの戦力じゃ足りなかったかな。死んでないだけましかな。

「スレイ、みんなに撤退だつて伝えて」

「は、はい。かしこまりました」

きつと彼らはここに来る。その時に、すべてに決着をつけよう。

- side snow -

「・・・」

「・・・ッ！」

ぎいん！！

アスナの振り下ろしの一撃を、私はなんとか受け止めた。だが、ただの受け止めでしかないからか、簡単にガードブレイクされてしまった。

アスナの引き上げられた身体能力を前に、私は圧倒されている。身体強化に、魔法が通らない。ある意味、AMFでの魔力集束よりも鬼畜ですわ。

そして満身創痍……。魔力があっても、体がぼろぼろでは……。こんなことならこういった対策をするべきでしたわ。そんなことを考えていたら、アスナが突っ込んできました。

それを・・・

どこからともなく、マントの人が現れて受け止めたかと思うと合気で投げ飛ばしてしまった。

「・・・？」

アスナはなぜ投げられてしまったか理解が追いついていない様子。けれど、このマント・・・。

「ん？ああ、あの時の袴の女の子？」

「あ、あなたは・・・まさか・・・」

「そう。あの時の通りすがりのエース様よ」

いまだマントを羽織っているけれど、その声は間違いなく下坂魅音のもの。私はなぜここに現れたかを聞こうとしましたが、それを下坂魅音はさえぎった。

「まあまあ。今回は逃げないしあとでいいでしょう。それよりも・・・」

そう言つて、下坂魅音はマントを脱ぎ捨てました。そこにはフェイトと同じマントを羽織つてはいるけど、中は深い深紅のバリアジャケットを身につけ、その右手にはフェイトのバルディッシュとほぼ同じようなデバイスが握られていました。そして、マントを翻す。

「SCARLET KNIGHTにして冥界の女王、ハデス・クイーン下坂魅音の戦いを見ていきなさい」

その言葉には、京谷が以前私を救ってくれた時の心の温かさを感じました。ああ、この人も京谷と同じ高みにいる人なのだろう、と。

けれど、アスナは戦意を失っているようでした。

「アサキムが帰って来いって」

そういつて、アスナは光に包まれました。

「お、お待ちなさい！」

「くらくら」

捕らえようとする私を下坂魅音は制しました。

「なぜ止めるのですか!？」

「今の君じゃどうあがいても、あの子には勝てないよ。それに・・・」

そういつて管理局ビルを見やりました。

「奏っちゃんと君の隊長さんが帰ってきた。とりあえずはあそこに帰りましょうか」

R e w r i t e 1 4 : ミッドチルダ攻防戦2 (後書き)

作者「なんだかんだで次の日の3:00orz」

一騎「飲み会参加したもんな」

命「そういえばPV2000いつてたね？」

京谷「ああ、そうだな。読んでくださった方には無上の感謝を。というか、魅音のあの二つ名」

作者「もちろん奈々様のSCARLET KNIGHTが元ネタですよ！とは言っても、魅音の魔力光やバリアジャケットからしてこの二つ名は似合うと思ってね」

魅音「えっへん！そして私の作者的イメージソングでもあるのだよ」

一騎「そこまで!？」

優希「あはは・・・」

作者「さて、次回予告はついにラウンズの前に姿を現した下坂魅音。各々の戦況報告と魅音の過去。そしてこれからの戦いの指針は!？」

魅音「ようやくまともに参加できる・・・」

作者「あ、その前に短編はさむかも」

全員「おおおいい!?!?!?!?!」

R e w r i t e 1 5 : S C A R L E T K N I G H T (前書き)

作者「今回・・・想像を絶する駄文です・・・ごめんなさい」

R e w r i t e 1 5 : S C A R L E T K N I G H T

- s i d e k y o u y a -

「ここは!？」

「えええ!?!どこ!？」

俺とはやては周りを見渡した。突然魔法陣にまわりつかれたかと思つと、いきなりこのザマだ。

・・・つてよく見たら局長の部屋かよ。道理でなんか見覚えがあると思つたら。

「・・・ん?という事は誰がこれを・・・?」

そんなことを思っていると、周りにいくつかの魔法陣が展開した。俺を転送した魔法陣・・・。つーことはカルト達がこおに飛ばされてくるのかね。

そしたら、遠征組・・・一騎、カルト、命、アルル、そして局長が次いで魔法陣から現れた。

「く・・・ここは?」

「あゝ?なんだここは」

「え?え?」

「よかった・・・みんな無事ね」

なんだか良く分からないといった様子の三人に、ただ一人状況を把握している局長。どうやら局長が転移を実行したらしい。

「局長がこれをやったのか」

「うん……。思わぬ敵に会っちゃってね」

「つかどこだよここは」

カルト。気持ちはわかるが一応局長だからな。

「ここが私の部屋だよ、カルト。・・・カルトは見たことなかったんだよね」

「全然だな」

だろうな。俺ですら一回しか見たことない。
すると、はやての端末に通信が入った。

『はやてちゃん！』

「なのはちゃん？」

『うん！良かった・・・帰ってきていたんだね』

なのはは若干泣きそうだ。後ろには少しぼろぼろになった紫苑と優希もいた。

「なのは・・・つかどうしたんだよ、その恰好！？」

『え、あ・・・これ？』

なのはは若干話にくそうだ。それを感覚的に感じた紫苑が代わりに答えた。

『実はの・・・先ほどジェネシスとやらの襲撃があったのじゃ』

「！！！！」

俺たちに戦慄が走る。局長は、やはりそうだったか・・・といった

顔をした。

「それで？」

『うむ、妾らはなんとかじゃったが、他までは存じえぬ。・・・すまぬな』

「いや、いい。なら全員に聞いて回る」

俺は先ずはアリスのところに繋いだ。

『ん、何京谷』

「アリス・・・それとセレナか」

端末からはアリスの他にセレナがいた。アリスは大したことはないが、セレナは紫苑以上にボロボロだった。

その俺の驚愕を感じ取ったセレナは自分から話し出した。

『ごめん、敵が意外と強かった』

セレナはラウンズの中でも一番若く、そして一番経験が少ない。まあ、それを差し引いてもこのやられようはかなりだった。

それを現すように、セレナは肩で息をしている。対峙した敵の強さを垣間見た気がした。

「いや、いいさ。それよりも、大事に至らなくてよかった」

『うん、ありがとう京谷』

さて。今度は希来かな。

「希来」

『隊長。どうかなさいましたか』

希来はきららとさららというようだった。こちらは三人とも涼しい顔をしている。

『あ、京谷。こっちは紫苑といたんだけどね・・・紫苑が先に行っちゃって。それで追いかけてようとしたら雑魚敵が』

なるほど。追いかけてようとしたらたかられたか。えんえんせき止められていたのか？

『そうなんです・・・。倒しても倒してもゴキブリのように』

「まてきさら、その単語はいくらなんでも出すな」

読者の中には黒い生命体が嫌いな人も絶対いるはずだ。

ちなみに俺はそんなに苦手じゃない。つか出てきたら魔法で蹴る。

さて、次はフェイトあたりに通信してみるか。

「フェイト」

『え、あ、京谷？』

突然の通信に困ったような表情で対応してくるフェイト。後ろには涼しげな顔をしたシオンもいた。

「フェイトはシオンといたのか」

『うん。ちよつと京谷がいつか出した結界魔法に似たようなのに閉じ込められて・・・』

あ、ああー。エンコンバンデンティア・インフイニータ無限抱擁か。あんな術式を使う奴がやつこさんにはいるのかよ・・・これは厄介だな。

『でもシオンさんが『パンツの匂い嗅いでおびき寄せてボコボコにしました』ってなに自分の株落としているんですか!?!』

『さて。何のお話かな・・・?』

「シオン・・・しまいにや変態執務官なんて渾名つけられるぞ・・・」

「

いくら勝つために手段を問わないとはいえ・・・オツサンのセクハラみたいなことするなよ。

まあいい。とりあえずほぼ全員の無事は確認した。あとは・・・どこにもいなかったスノウ。

「京谷、スノウは」

「一応全員に繋いだけどスノウだけ反応がなかった。魔力反応はあるんだが・・・端末がイカれてるみたいだ」

「あゝあゝ!?!そりゃ一番危ないってことじゃねえか!」

そう、反応はある。だけど通信がつかない。つまり、戦闘中に端末が壊れたという事しか考えられない。戦闘中に攻撃を受け、大ダメージを負った・・・。

「くそッ!!!」

カルトが飛び出そうと、扉に走り寄っていこうとしたとき、いきなり扉が思い切り開け放たれる。

「ゴハア!!」

「「「カルト!?!」」」

突然の事態に反応できなかったカルトは開け放たれた扉に引っ叩か

れて吹っ飛ばされた。そして気を失う。

「あらっ、人がいたのね・・・ごめんよ？」

その光景にも驚いたが。一番はその入ってきた人物に驚いた。

フェイトのマントに酷似したマントに包まれた、深紅のバリアジャ
ケット。その様は、まさに深紅の騎士を思わせた。

「よっ、みんな」

そう・・・下坂魅音その人。その肩には、かなり大怪我を負ったス
ノウを担いでいる。

「スノウ!!」

「大丈夫だよ、命に別状はない。今は寝かせてあげて」

「あ、ああ・・・」

魅音はそのままソファーまで歩いていくと、スノウをそこに下した。
スノウは大怪我こそ負っているが、確かに魅音の言うとおり命に別
状はなさそうだ。

「ふう・・・さて、奏っちゃん久しぶり」

「うん・・・本当に、久しぶり」

どこか懐かしそうに、局長は魅音に微笑む。魅音はそれに満足した
ようにうなずくと、俺たちの周りを見渡した。

「奏っちゃん。この子たちが、秘蔵っ子たちなのかな」

「うん・・・と言っても、京谷が集めた子たちを私が後見人として

見ているだけなのだけれど」

「そっか。でも、いい目をした子たちだね」

「なあ」

俺は魅音に話しかける。魅音はん？といった感じでこちらを見た。

「どうして、ここに来たんだ？」

「どうしてって・・・そりゃ、戦うんでしょう？ジェネシスと」

「ああ。俺たちが今追っている事件の黒幕だからな」

「だよな。そして、私もその事件に一枚噛んでいる」

「なに・・・？」

俺の瞳が鋭くなる。すると、魅音は肩をすくめた。

「こらこら、別に私も黒幕とは言っていないじゃない。あくまで、一枚噛んでいる。そもそも・・・事の始まりは私の力だったんだから」
「・・・・・・・・・・」

始まり？それはいったいどういう意味なんだ？

「京谷」

後ろから一騎が呼んできた。というかこいつが皮切りになるのは珍しいな。

「とりあえず、全員呼び戻したほうがいいんじゃないか？そんで、休息を取ってから会議室なり用意してにしたほうがいい」

「せやね。ここで話をポンポン進めてもみんながちゃんと事と事態を理解せな意味がないやろ」

はやての言つとおりだ。みんなが知らないと、きっとこれはどうしようもない。それに、各々が手に入れた情報を共有しないとな。俺は魅音を見た。魅音はあくまでリラックスしており、命とのんびり談笑していた。

俺の視線に気づいた魅音はくすりと笑う。

「心配しなくても、逃げないよ。君たちと協力したほうが、私にとって助けになりそうだし」

ふむ。なら、みんなの帰還を待つとしますかね。

- s i d e k a z u k i -

あれから5時間後。帰還したラウンズの面々やなのは達はそれぞれ体を癒し、アースラの会議室に集っていた。もちろん、シグナム達ヴォルケンリッターも来ている。

カルトとスノウは欠席した。理由はスノウの看病。カルトはスノウに頼まれたからとしか言わなかったが、京谷は案外カルトもゾッコンなんじゃないかとのこと。

みんなはというと、それぞれ談笑していた。が、やはり盛り上がりには欠けている。やっぱり、お互いかなり痛手を負ったからだろう。

そんなことを思いながら、待っていると京谷とフィオネが会議室に入ってきた。次いで、奏さんも入ってくる。

「よし、みんな席についてくれ。これから報告会議を始める」

「では、端末に配られた資料を見てください」

フィオネの進行で会議は進む。この資料、いったいいつ作ったんだよ……。かなり手が込んでいる。

「まず、俺たち遠征組の報告から。俺たちが向かったのはここ、第6元管理世界ジェネシス」

「元管理世界？」

その単語に、きららが質問をした。

「管理局が管理していたけど、ある理由によって管理から手を引いた世界の一つだ。例えば星が滅んだりとか、生物が住めなくなった星とか。きららみたいに、疑問があつたらすぐに言ってくれ。そしてわかるやつでいいから答えてくれ」

「……はいっ」「」

「ここからは私が」

そう言つて奏さんが進行を買つて出た。奏さんは資料をめくるように言つと、そのままスクリーンに画像を映し出す。

「この世界は40年前の事件による世界規模の時間停止が原因で管理局に棄てられた。以後、ここに管理局の手は伸びていない」

「世界規模の時間停止……？」

と、アリス。ここは魅音が答えるようだ。

「それは私が答えるわ。奏っちゃん、私の話はどれくらいした？」

「私たち側の話は」

「そっか。じゃあその話知らない人はあとで聞いた人に聞きなさい。この時間停止はね、正直言えば私を無力化するためのあれなんだよ

ね」

「た、たった一人のために？」

アリスは驚く。まあ無理はないわな。

「アリス、あの人Eランクだから」

「「「はあ！！？」」」

「な、なによ・・・そんなに驚く？」

魅音は若干傷ついたような視線を周りに送る。そりゃ驚くつて。俺たち旅行組と京谷くらいしか知らないだろうし。

「まあ、それは置いといて。若くして大魔力を持っていた天才魔導師の私はですねー。敵に自分の能力と私の体にあるとある物質に目をつけられたんですよ。それが・・・」

「アポカリプス」

「え、なんで知ってるの」

「倒した敵から聞いた」

そう、グンドラムという男に。いや・・・オオカミ？

「アポカリプスってなんなの、京谷君？」

なのはは京谷に聞く。だが京谷は俺に目くばせした。どうやらお前がしゃべれという事らしい。

「アポカリプスってのは、魔物の体には絶対含まれている物質なんだ。そいつがないと、魔物は生きてゆけない」

「うん・・・だから、管理局がそういうのに対抗する兵器を作って

戦争になった。だから今質量兵器が使用禁止なんだよ」

「そうなんだ・・・」

「で、私の体にはそのアポカリプスが大量に含まれていたらしくて、それを欲した敵組織に捕らえられたの。それからは【自主規制】で【自主規制】の【R-25】・・・」

「待つて」

ここで、見かねた奏さんが止めた。

「え、ここからがいいとこなのに」

「・・・みんな泣きそう」

「うつ・・・ひどすぎるよおお・・・」

「魅音さんにそんな過去が・・・」

「ひつぐ・・・ひぐ・・・」

魅音のあまりの生々しい体験談にみんなが戦慄していた。あの京谷と紫苑ですら開いた口が閉まっていけない。俺も・・・悪寒が止まらない。

「まあいいじゃん。こうして日の目を見たん、よくないです!!」

ん？」

黙って話を聞いていたフェイトが立ち上がった。目には大粒の涙がたまっている。

「今・・・それをにこやかに話せるのは、きっとあなたの中で整理がついているからかもしれない。けれど・・・そんなのをにこやかに話されても・・・私たちは!」

「分かってるよ」

「では、なぜ!!」

魅音は涙を流しながら怒りなのか自分の過去と重ねているのかわからないフェイトを見る。

「君たちはわからないかもしれないけど。私たちが見たものこそが、本当の戦争。みんなが平和にいられるのはただの偶然。それは・・・幸運という女神に溺愛されているだけなんだよ。それに、こういったことなんて、他の人たちが経験したものほど酷くはないよ」
「・・・・・・・・」

「私がそういった事をされている間に、そういった事で生み出された兵器によってみんなの命が消えていく。私には・・・そういった事のほうが辛いから」

その言葉にみんなが黙り込む。

「では・・・そうして、あなたは報われたんですか？」
「もちろん。捕まる前は楽しくしていたし、待つという対価を払ったからこそ、みんなを助けられる力を身につけた・・・。それに親友にまた巡り会えた」

魅音はフェイトに近づいた。フェイトは魅音を見上げる。魅音は、優しく微笑むと優しくフェイトの頭を撫でた。

「うんうん、よく声を我慢したね」
「うつ・・・うつ・・・」

きつとなのはに会う前、辛い時期を過ごしてきたフェイトには魅音の話題は堪えたかもしれない。他のみんなだってかなりヘビーすぎることなのだ。

「それよりも。大事なのは敵のことよね？」

魅音は奏さんに問う。奏さんは資料をめくらせると、話を再開した。

「敵の組織の名前はわかっていません。なので、暫定的にこの世界から取ってジェネシスとしましょう」

すると、スクリーンにはいくつかの人物が映し出された。セレナや紫苑はその写真を見て心当たりがありそうな視線を投げる。

「これがジェネシスの主な幹部です。詳しいことはデータが破棄されたため把握できていませんが・・・実力は最低でもA+・・・最大オーバーSSを超えるでしょう」

「オーバーSSで・・・スノウやカルトさんみたいなのがぞろぞろいるの!？」

なのはが顔に縦線を入れながら悲鳴を上げる。ああ・・・こないだカルトにボコボコにされたんだよな。同情する。

「そしてこのジェネシスのボスが・・・この、アサキムという少年」

奏さんが口にした少年の写真がアップにして映される。見た感じ、かっこいいのだが・・・うん。

「・・・生気がないね」「」

そう、生きている感じがしないのだ。いやそういう人ってたまにいるんだろうけど。

「なぜか・・・人形のように見えるな」

シグナムがふむ、と頷く。ヴィータも賛同したように言った。

「なんかはやてに会うまでのあたし達みたいだ。なんつーか・・・使命感で生きてるみたいだな」

「あー・・・」

うまい例え。山田君、座布団一枚持つてきなさい。

「この少年が一番脅威です。この子・・・時間魔法を使いこなす」

「時間魔法？もしかして自陣加速とかなん？」

「うん。だけど・・・この子の術式はそんなチャチなものなんかじゃない」

ここ一番の深刻そうな顔をする奏さん。その様子に、魅音を除くほぼ全員が緊張した面持ちで奏さんを見る。

と、ここで唐突に京谷に質問を振った。

「京谷」

「なんですか局長」

「接近戦におけるタイムラグの重要性について述べて」

「それと何か関係が？」

「いいから」

奏さんがそう言うので、京谷も疑問に思いながらタイムラグについて話し出した。

「タイムラグっていうのは、近接戦闘・・・いや、戦い全てにおいて重要なものです。おなじみの威力の技を2の時間と1の時間で出

せるのでは戦局の変わり方も大きく変わる。コンマ一秒の判断力を求められる近接戦闘ではそれが顕著に出る。そんなわずかな隙が、自分の戦局を大きく左右し・・・時には自分の命に関わってくる。だから、接近戦を主にする魔導師つてのは一撃必倒もだがタイムラグを削る訓練も必要になってくるんですね

「はい、よくできました」

一年生が初めてひらがな全部書けた時にすごく喜ぶ先生のように、ぱちぱちと拍手する奏さん。それが恥ずかしかったのか、若干京谷の顔が赤い。

「だけど。その努力を」全て無に返してしまうのがこの時間魔法。特に時間移動だね」

「えと、それが戦いにどういった影響が？」

あまりことを理解出来てないなのはにきらが突っ込む。

「なのはさん、時間を操れるという事はこちらの攻撃は絶対に当たらないってことです。つまり、こちらが攻撃した時に、別時間・別座標に飛ばせばその攻撃は絶対に回避できるってことですよ」

「もちろん、弱点はある。この術式は魔法の中では一番術式が複雑なの。人間の脳では一般的に2・31秒以上の擬似時間停止、3・27秒以上10・78m以上の時間回避、そして回避時間以前に戻るのとは不可能」

「・・・すいません・・・さっぱりです」

さすがにラウンズメンバーもこれには音を上げてしまっていた。俺もほばちんぷんかんぷんだ・・・。そこを、京谷は簡単にまとめた。

「あー、つまり。単純に一回の回避量が10mまで、時間回避で3

秒以上回避できないってことだ」

「とは言っても、あくまでこの時間魔法自体が、だから。その辺りはしっかり修正してくると思うよ」

「うん。そのタイムラグ以上の時間で回避されたから・・・時間回避に頼り切ってるわけじゃないと思う」

「・・・という事はむちゃくちゃ強いって事か」

だろうな。しっかり躲して、それで時間回避を使っているんだろう。それはとてつもない敵と戦うことを意味する。そのことを、紫苑が説明し始めた。

「それで、じゃ。今回襲撃してきたのは奴らの手下じゃ。非常に強いのはマントの男とスノウが対戦した魔法無効化能力を持つ少女。この二人にしっかりと警戒しておけばさした相手ではあるい・・・。無論、他の者も十分強い。じゃから気は抜くでないぞ」

「そうだね。さて・・・一応整理はできた？」

みんなに魅音が聞く。なのは達は数拍置いて、しっかり頷いた。それを見て満足した魅音は続ける。

「じゃ、主な作戦指揮についてはまた時間をおいて話しましょ。ちゃんと鍛錬しないと、思わぬ伏兵がいるかもしれないから」
「それはいいけどよ。アンタはどうするんだ？」

京谷は魅音に聞いた。魅音はしばらく悩んで、

「よし。キミの部隊のお世話になろうかしら」

「はあ!？」

「いいよね、奏っちゃん」

「うん、大丈夫」

「というわけで・・・よろしく」

かくして、魅音の強引なペースに吞まれ、ラウンスは魅音を匿うことになった。

その夜、修練の門からは京谷の雄叫びが聞こえたとか聞こえなかったとか。

R e w r i t e 1 5 : S C A R L E T K N I G H T (後書き)

作者「ふっふっふっ……」

命「ねえ、なんか作者が壊れてるんだけど」

一騎「まあ、なんか一番下手な文章構成らしい。かといっていい展開を作れなかったそうで」

命「あはは……」

一騎「さて、次回予告は久々の日常編だ」

命「ここまで読んでくれた人にはいっぱい感謝。それでは、次回をお楽しみ！ドライブ・イグニッション！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6751z/>

魔法少女リリカルなのはR e w r i t e

2011年12月28日22時44分発行